

石器

石器は4,281点出土した。中でも尾鈴山酸性岩類製の礫石器・剥片の出土が顕著であり、本遺跡の石材別点数では58%、重量では73%を占める。出土した石器については、概ね遺跡の主体期である縄文時代後期前半から中葉の遺物であると考えられるが、一部は他時期に含まれる可能性がある。

本項では石器を器種ごとに分類して報告する。なお、縮尺は基本的に器種ごとで統一したが、本書紙面の都合上、一律ではない。

石鏃 (第46図352~375)

51点出土し、24点を図化した。石材はチャートや黒曜石が多く、安産岩や珪質頁岩も僅かであるが出土している。352~358は基部にやや深い抉りを持つ。352~354は正三角形に近い形状で、小型のものがある。359~362は二等辺三角形を呈す。358は楕円形鏃である。363~368は基部に浅い抉りを持つもので二等辺三角形形状を呈すものが多い。368は安山岩製で五角形に近い形状を呈す。369~372は刃部がくびれた形態のもので、全てチャート製である。基部の抉りが深いものと浅いものがある。373・374は基部に抉りを持たない。375は破損した石鏃で、使用後に破棄された可能性がある。

石匙 (第46図376~383)

8点出土し、全て図化した。横型(376~382)と縦型(383)がある。石材はチャート製のものが多く、381は玉髓製、382は安山岩製で、それぞれ1点ずつ出土した。376は片側に小突起を作り出し、石鏃としての機能も有していたと考えられる。

石鏃 (第47図384~387)

4点出土し、全て図化した。石材は特定の石材に偏ることはない。384はホルンフェルス製で自然面やや風化が見られる。同器種内では非常に大型である。381は両端部を使用可能なように加工している。

削器 (第47図388~392)

4点出土し、全て図化した。剥片の長辺に組織的な剥離があり、刃部とする石器を削器とした。389は頁岩製の削器の接合資料であり、破損後に再加工を施したものが390である。

石鏃 (第47図393)

1点のみ出土した。石材はホルンフェルスである。

打製石斧 (第47図394~397)

4点出土し、全て図化した。全て砂岩製である。粗く加工したものが多く、395・397は自然面が残存する。

磨製石斧 (第47図398・399)

図化した2点のみ出土した。398は基部が欠損する。刃部に目立った使用痕は確認できないことから、使用前に破損したもののか。なお、398はII層から出土した遺物である。399は磨製石斧の基部である。

スクレイパー (第48図400~403)

12点出土し、4点図化した。400は薄い円礫の縁辺に粗い刃部をつけたもので、中心で割れた後に再加工して使用している。403は刃部を鋸歯状に加工する。

礫器 (第48図404~410、第49図)

自然面を広く有し、粗く加工して刃部を付けた石器で概ね300g以上のものを礫器として分類した。石材は尾鈴山酸性岩類と砂岩に限定される。16点出土し、全て図化した。404・405は剥離面が刃部に集中するもので、片手で握りやすい。406~410は磨石または敲石の転用である。411~419は主要剥離面を持つもので、大形の剥片を素材としたものと円礫を加工したものがある。411は裏面に大きな剥離面があり、後述する粗製剥片類の石核に相当する可能性がある。

石核 (第50~53図)

45点出土し、25点図化した。石材は黒曜石、チャート、珪質頁岩、ホルンフェルス、砂岩、尾鈴山酸性岩類がある。尾鈴酸性岩類製のものが特に多く、31点出土している。420は黒曜石1、421は黒曜石2の石核である。423~426は珪質頁岩の石核で、多方向からの剥離が認められる。427~430はホルンフェルス製の石核である。431・433は砂岩の石核である。434~444は尾鈴山酸性岩類の石核である。435・438・439は比較的硬質な尾鈴1製で、多数の剥離面が確認できる。440~444は台石を転用している可能性がある。

粗製剥片器 (第54~58図)

尾鈴山酸性岩類または砂岩を石材とした第一剥片で、円形~長楕円形の平面形を呈し、打点部分から下縁に向けて鋭利になる剥片である。199点確認したが、剥片との区別がつかないものが多く厳密には分類しきれない。ここでは、形態や石器としての使用の有無などから以下の8類に細分した。なお、本来であれば刃部

部を下に配すレイアウトをとるべきであるが、本書紙面の都合上、主要剥離面の打点を右側に配すように統一して掲載している。

I類 (第54図)

128点出土し、16点図化した。二次的な加工が施されないものを分類した。445～453は母岩の長辺を、454～460は短辺を敲打し作出したものである。453・456は摩擦面を持ち、磨石から剥離された可能性が高い。

II類 (第55図)

I類の中で、刃部を使用した痕跡が認められるものを分類した。25点出土し、13点を図化した。刃部に潰れが見られるものが多く、スクレイパーとしての機能があったと考えられる。469・470は主要剥離面に研磨痕がみられるが、人為的なものではなく流水作用による摩擦であろう。470～473は磨石の転用である。

III類 (第56図)

組織的な刃部が作出されたものを分類した。スクレイパーや礫器などの機能があったと考えられる。16点出土し、10点を図化した。

IV類 (第57図)

比較的大型で、重量360g以上のものを分類した。礫器としての機能があった可能性が高い。6点出土し、全て図化した。

V類 (第58図490～494)

上記以外で二次加工が見られるものを分類した。剥片としての使用は認められない。493・494は磨石または砥石の転用である可能性が高い。

VI類 (第58図495～498)

不定形な剥片で自然面が扁平でないものを分類した。いずれも刃部と思われる部分に潰れや敲打痕が認められる。

VII類 (第58図499～501)

上記剥片類の石核に相当する可能性があり、使用痕が認められるものである。便宜上剥片の分類に含めた。

剥片・二次加工剥片 (第59図)

砂岩、尾鈴山酸性岩類以外の剥片を石材毎に抽出した。総点1,036点あり、重量は約7.9kgである。506は上記II類に相当する可能性がある。

接合資料 (第59図511～517、第60図518・519)

511は413と剥片の接合資料である。514は512・513の

接合資料である。517は515・516の接合資料で、表面に自然面を有する。518は457・499が接合した資料である。519はD3Gr.から出土した黒曜石2の剥片が3点接合したものである。

石錘 (第60図520～541)

出土した石錘は全て打欠石錘であった。42点出土し、22点を図化した。砂岩と尾鈴山酸性岩類が多いが、珪質頁岩や、ホルンフェルス製の遺物も少量出土した。520・523・531は片側の袈り部分が潰れており、硬質な物体の上で縦に据えた状態で反対側を敲打した可能性がある。534～541は石錘の袈り部分以外に大きな剥離があるものである。534は比較的横長の礫を素材としている。541は凹石を転用したものである。

磨石 (第61図542～556)

119点出土し、15点を図化した。石材は砂岩または尾鈴山酸性岩類に限定される。包含層中では同規格の搬入礫と思われる円礫が出土するため、ここでは明瞭に磨面が確認できるもののみ磨石とした。円礫 (542～551) と長楕円礫 (552～556) がみられる。片面のみ (542～544) と両面 (545～551) に磨面を有するものがある。なお、549～551は敲打痕があり、特に550・551は周縁部が明瞭である。556は磨石の接合資料で僅かに煤が付着する。

凹石 (第61図557～561)

10点出土し、5点を図化した。中央に敲打による使用痕があり、浅く窪む石器である。磨面があり磨石の転用の可能性がある。形態や石材は磨石と共通する。

敲打石 (第61図562～567)

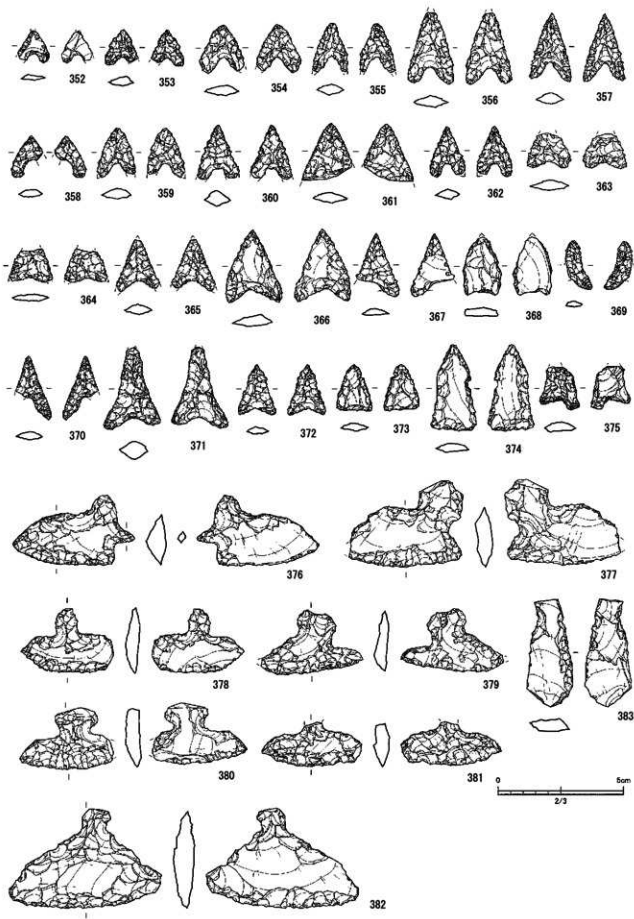
6点出土し、全て図化した。小振りな礫の周縁に敲打痕が見られる。石材は砂岩 (562・563)、チャート (564・565・567)、ホルンフェルス (566) である。

砥石 (第62図568～573)

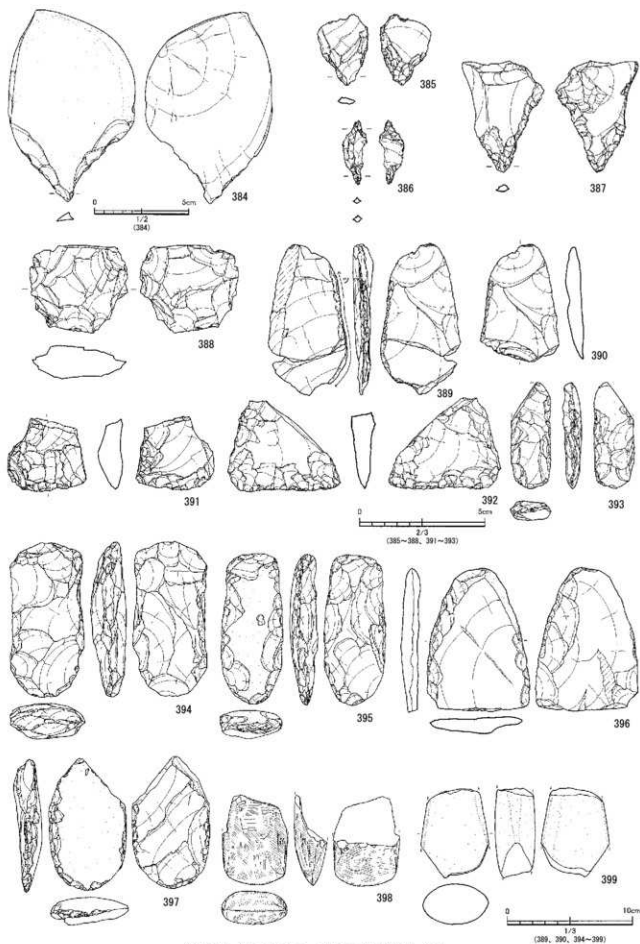
7点出土し、6点を図化した。研磨により内湾するものを砥石とした。568は褐色を呈す頁岩の剥片を素材としており、研磨痕が明瞭に残る。569～573は砂岩製で、敲打痕が看取できるもの (571・572) もある。

台石 (第62図574～578、第63図)

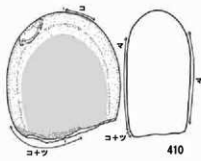
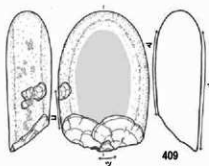
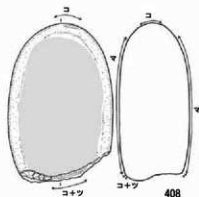
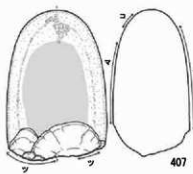
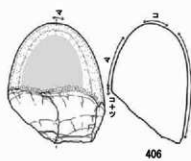
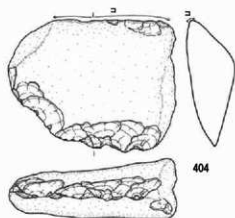
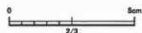
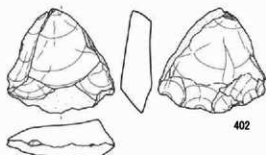
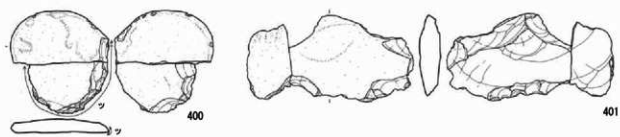
16点出土し、7点を図化した。磨石同様、摩擦痕のあるものを抽出した。全て尾鈴山酸性岩類製で、平滑面に摩擦が見られる。578～580は剥離面を持つ。



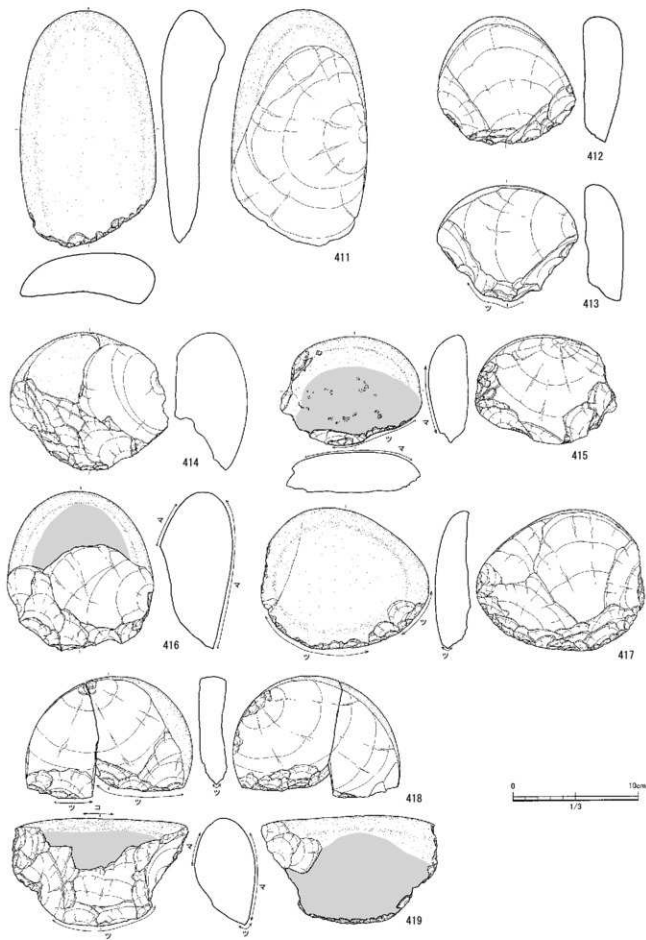
第46圖 縄文時代中・後期石器実測図(1)



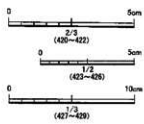
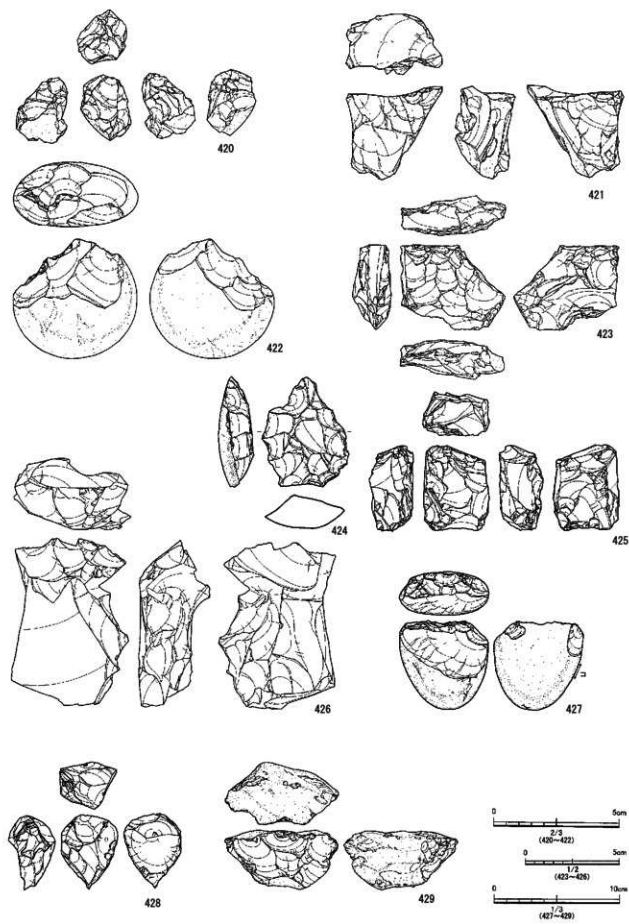
第47図 縄文時代中・後期石器実測図(2)



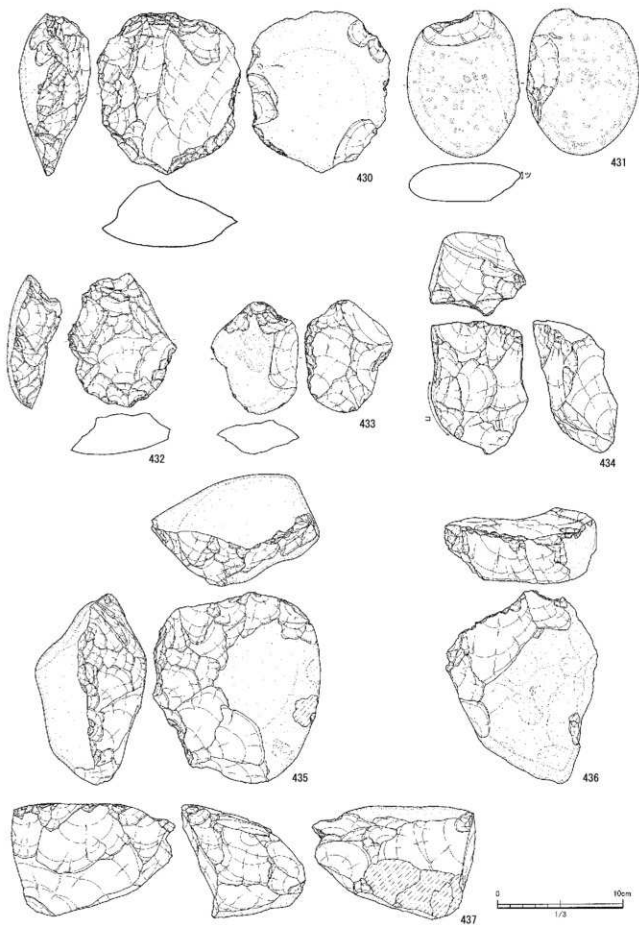
第48図 縄文時代中・後期石器実測図(3)



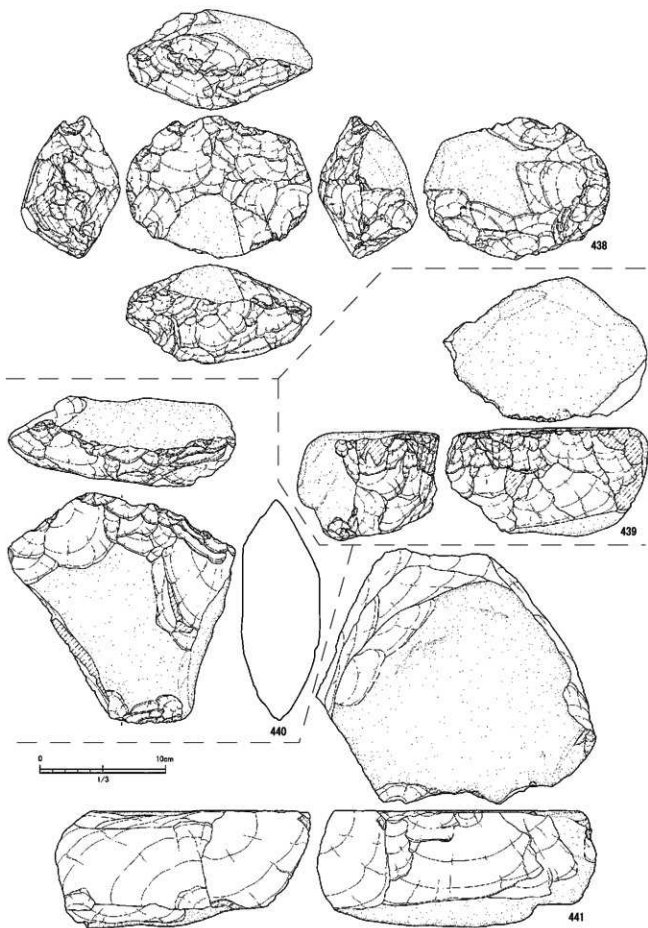
第49図 縄文時代中・後期石器実測図(4)



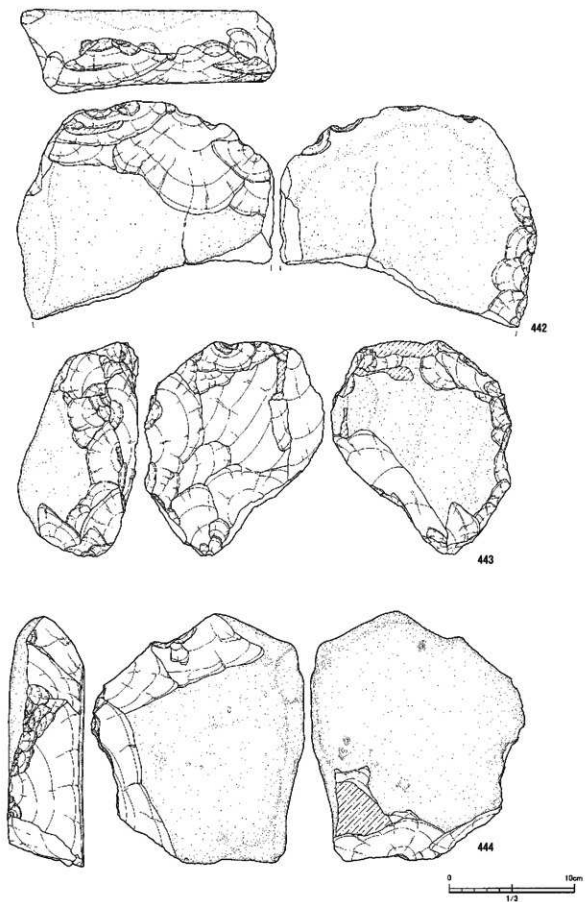
第50圖 縄文時代中・後期石器実測図(5)



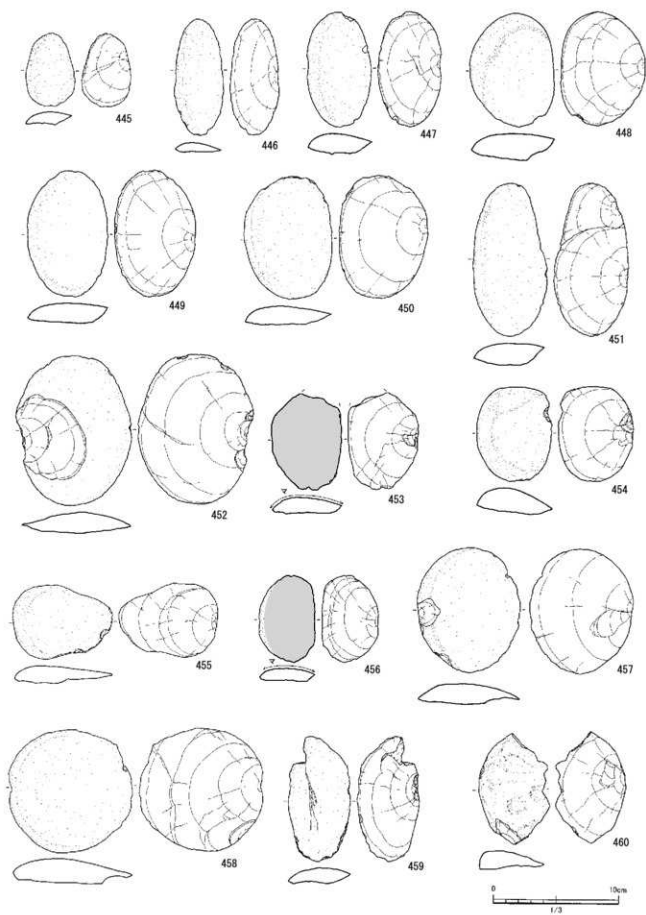
第51図 縄文時代中・後期石器実測図(6)



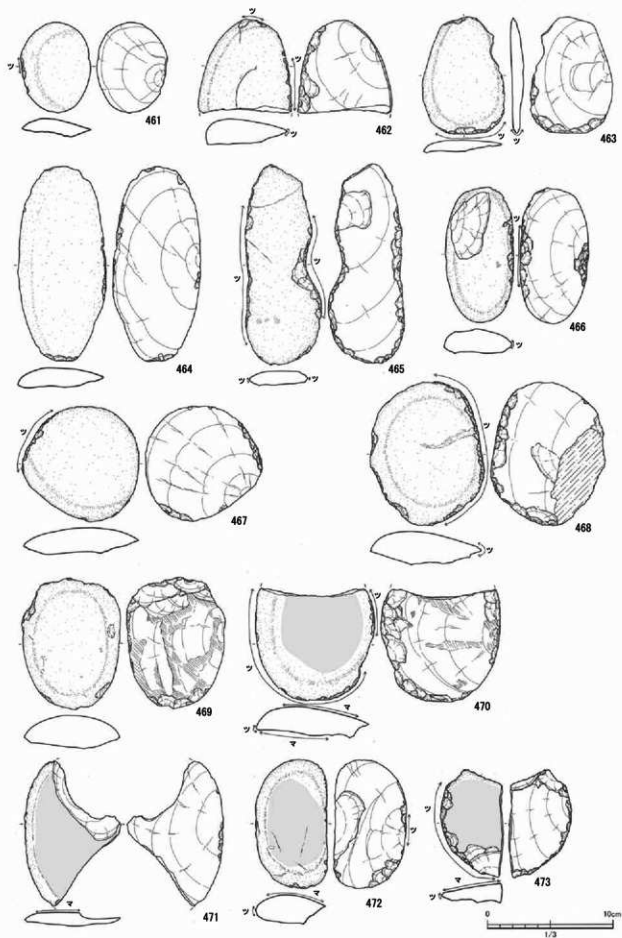
第52図 縄文時代中・後期石器実測図(7)



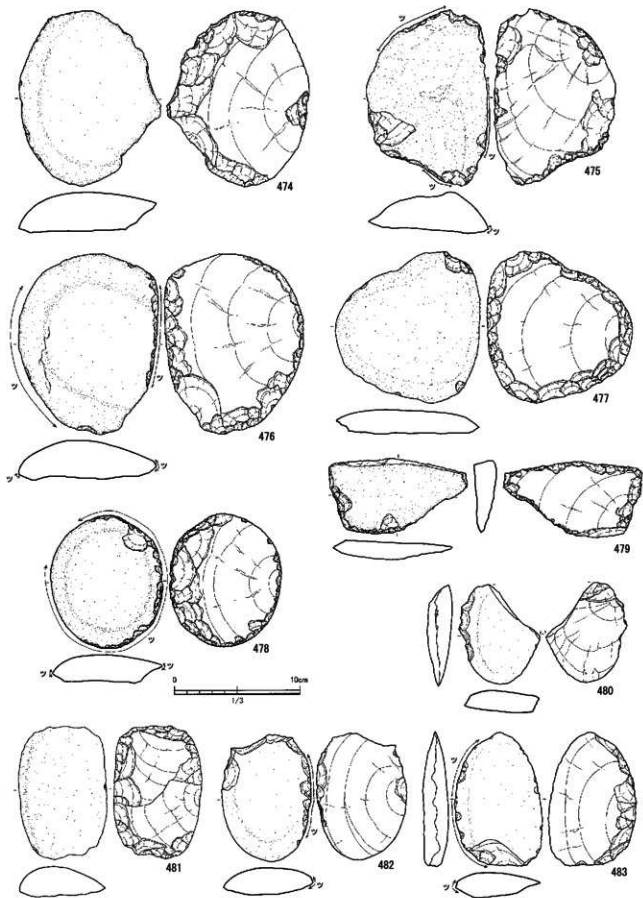
第53圖 縄文時代中・後期石器実測図(8)



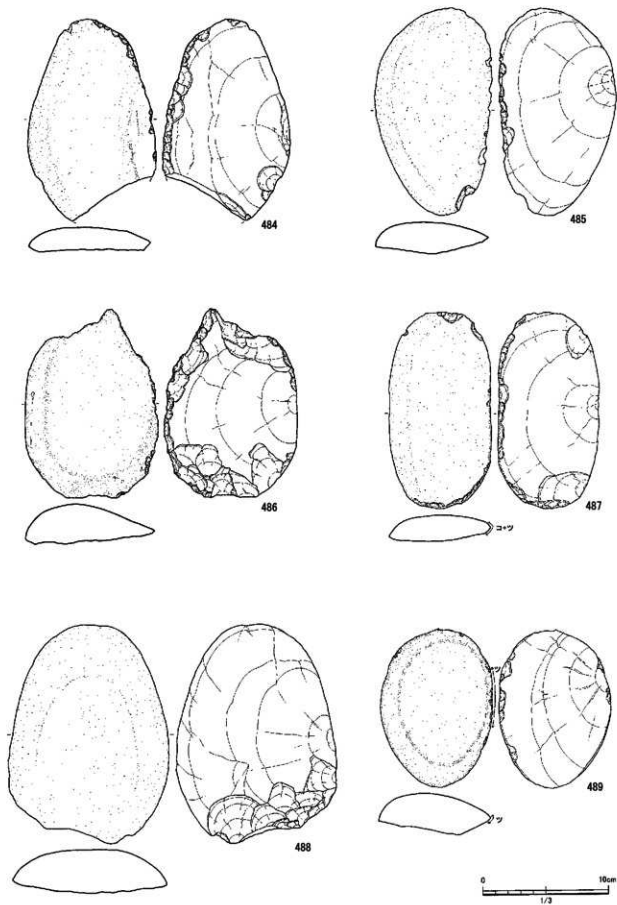
第54図 縄文時代中・後期石器実測図(9)



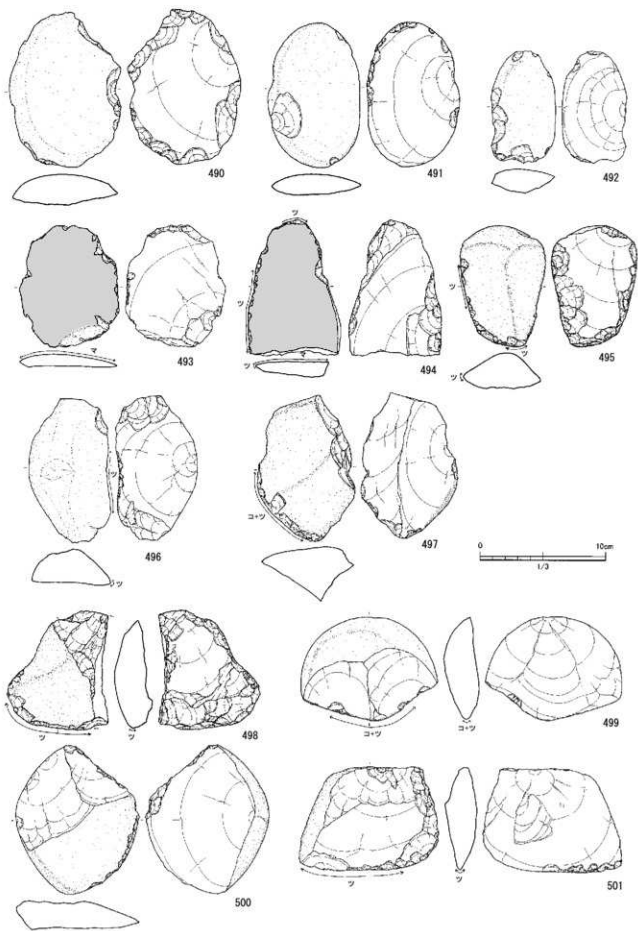
第55図 縄文時代中・後期石器実測図 (10)



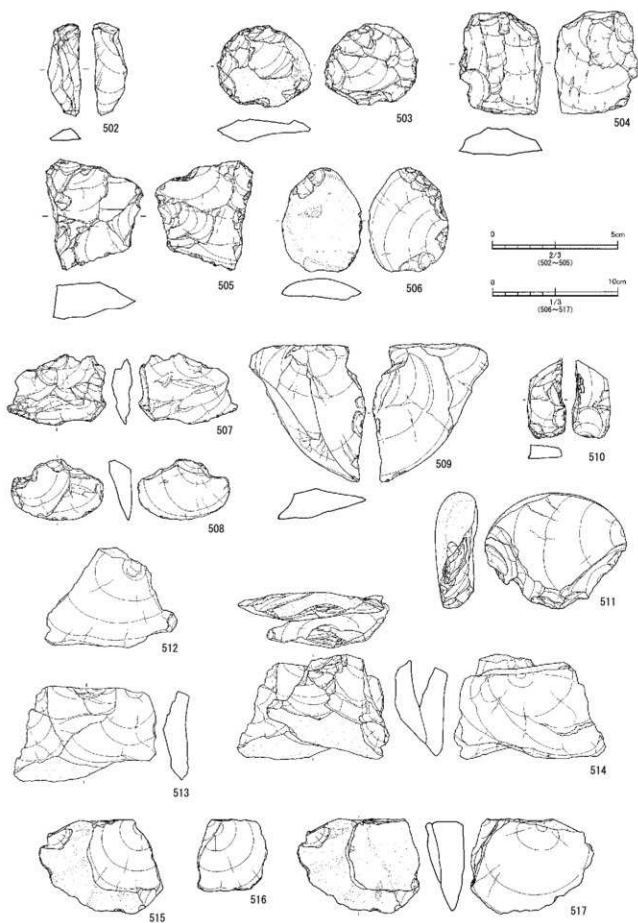
第56図 縄文時代中・後期石器実測図 (11)



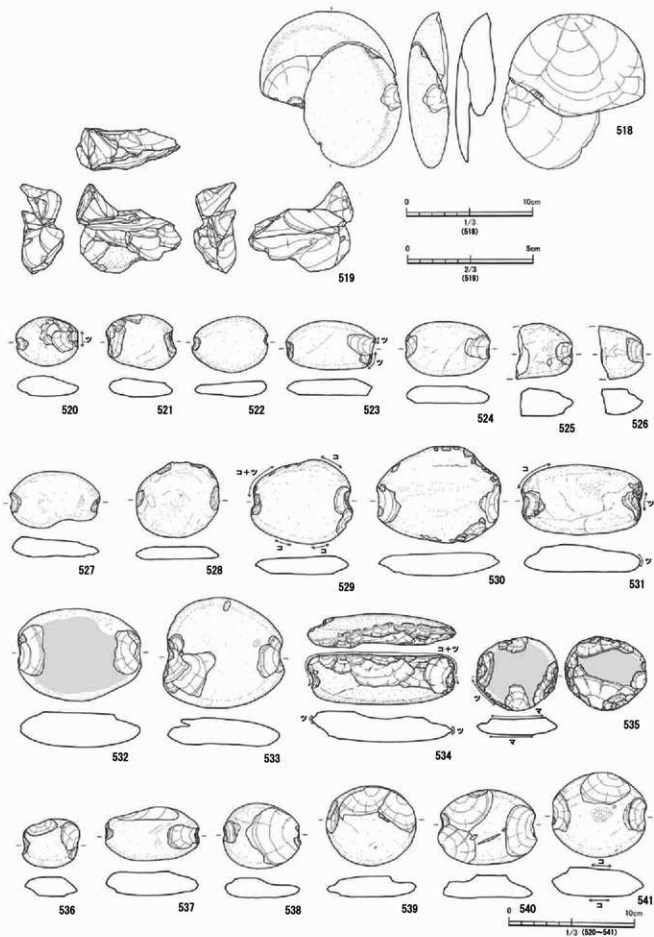
第57図 縄文時代中・後期石器実測図 (12)



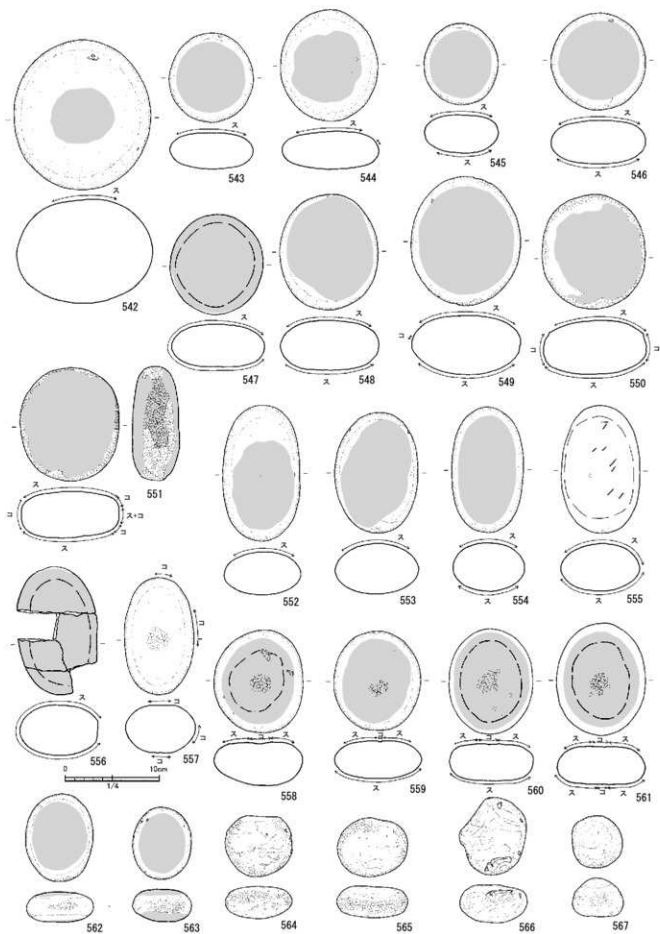
第58図 縄文時代中・後期石器実測図 (13)



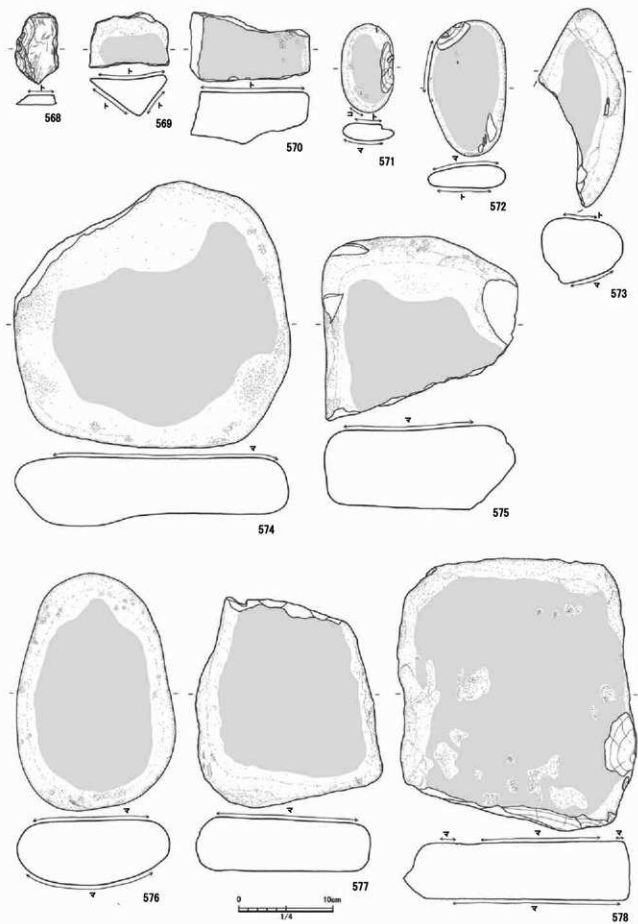
第59図 縄文時代中・後期石器実測図 (14)



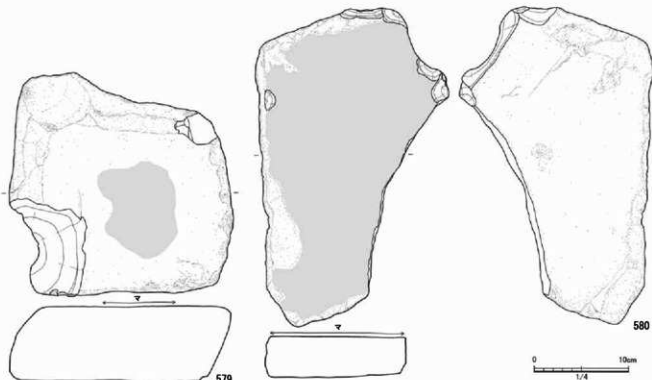
第60図 縄文時代中・後期石器実測図 (15)



第61図 縄文時代中・後期石器実測図 (16)



第62図 縄文時代中・後期石器実測図 (17)



第63図 縄文時代中・後期石器実測図 (18)

No	器種	分期	部位	出土位置	出土層位	数量	色層		施文・痕跡等		胎土	備考	
							外面	内面	外面	内面			
136	深鉢 I	Ⅰ	胴	B4 C3 C4	Ⅱ	口: (28.0) 灰黄褐 10YR6/2	にぶい褐 7.5YR6/4	口縁部に周刺を刻んだ短い突帯文。1条突帯文上にC字の刻目。ナデ上に網文・貝殻碎痕文等。	口唇部に斜方向の押圧網文等・内面に縄文等	やや密	胎土に5mm以下の灰色粒を含む 2mm以下の白色粒を少量含む 1mm以下の黄色粒を微量を含む 1mm以下の白色・透明粒を少量含む	蜂刺孔	
137	深鉢 I	Ⅰ	胴	A4- A5	Ⅱ	-	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄 2.5Y6/3	縄文	やや密	胎土に5mm以下の灰色粒を含む 2mm以下の白色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を多く含む	溝状凹痕	
138	深鉢 I	Ⅰ	胴	C6	Ⅱ	-	にぶい黄褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR4/4	無断縄文・弧状の胎付突帯文・突帯状に部分納め網目	やや密	胎土に5mm以下の灰色粒を少量含む 2mm以下の白色粒を多く含む 1mm以下の透明粒を多く含む	外: スス付着	
139	深鉢 II	Ⅱ	口	D4	Ⅱ	-	にぶい黄褐 10YR5/3	暗灰黄 2.5Y4/2	突起上に円形突帯文。十字形突帯にC字形連続網文・押引文・磨擦網文か(条線文)	工具ナデ一様方向のナデ 磨擦圧痕	やや密	胎土に5mm以下の白色粒を多く含む 2mm以下の白色粒を少量含む 2mm以下の透明粒を微量に含む	
140	深鉢 II	Ⅱ	胴	A3B IVa	Ⅱ	-	黄褐 2.5Y5/3	黄褐 2.5Y5/3	十字形突帯にC字形連続網文・縄文	やや密	胎土に5mm以下の灰色粒を少量含む 2.5mm以下の白色粒を微量に含む 2mm以下の透明粒を多く含む		
141	深鉢 II	Ⅱ	口	D6	Ⅱ	-	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/4	ナデ一様突帯(二枚貝によるロッキング)か一円形連続網文・突帯結付・竹管文	ナデ一様削り 縄文	やや密	胎土に5mm以下の白色粒を多く含む 2mm以下の灰色粒を多く含む 1mm以下の白色粒を微量に含む	溝状口縁
142	深鉢 II	Ⅱ	口	D6	Ⅱ	-	透黄 2.5Y7/3	にぶい黄 10YR7/3	ナデ一様突帯(二枚貝によるロッキング)か一円形連続網文	丁字状削り方向のナデ一様削りの網文	やや密	胎土に5mm以下の白色粒を多く含む 2mm以下の白色粒を少量含む	溝状口縁 外: スス付着
143	深鉢 II	Ⅱ	口	A1B Ⅱb	Ⅱ	-	にぶい黄緑 10YR6/3	にぶい黄 10YR7/4	縦方向のナデ	縄文・横方向のナデ	やや密	胎土に5mm以下の白色・黄色・透明粒を微量に含む 2mm以下の白色・灰色粒を微量に含む	外: スス付着
144	深鉢 II	Ⅱ	口	D4	Ⅱ	-	にぶい赤褐 5YR5/3	灰褐 7.5YR4/2	7条の沈帯・帯貝による磨擦網文	縦方向の貝殻赤文	やや密	胎土に5mm以下の白色粒を少量含む	外: スス付着
145	深鉢 II	Ⅱ	口	C8	Ⅱ	-	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄緑 10YR6/3	口唇部に押圧網目・棒字目状の胎付突帯文	縦方向のナデ	やや密	胎土に5mm以下の白色・黄色粒を少量含む 2mm以下の白色粒を多く含む 2mm以下の透明粒を少量含む	外: 赤色顔料 スス付着
146	深鉢 II	Ⅱ	口	C4	Ⅱ	-	にぶい黄緑 10YR4/3	にぶい黄緑 10YR5/3	3条の沈帯・2条の沈帯の間に縄文か・ナデ	縦方向のナデ	やや密	胎土に5mm以下の白色粒を微量に含む 1mm以下の白色・透明粒を少量含む	溝状口縁 沈帯内に微量の赤色顔料
147	深鉢 前期末	Ⅱ	口	C5	Ⅱ	-	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR4/2	ナデ・胎位の貝殻赤文・連続網文・貝殻赤点文	縦方向のナデ・貝殻赤文・赤点文	やや密	胎土に5mm以下の白色・透明粒を少量含む	
148	深鉢 II	Ⅱ	口	T29	Ⅱ	-	にぶい黄緑 10YR5/3	暗灰黄 2.5Y5/2	口縁部下に突帯・口唇部に棒字目	縦いナデ	やや密	胎土に5mm以下の白色粒を少量含む 2mm以下の透明粒を多く含む	外: スス付着
149	深鉢 II	Ⅱ	胴	E7	Ⅱ	-	にぶい黄緑 10YR5/3	にぶい黄 10YR6/4	ナデ・貝殻の磨いたナデ・粘り突帯上に連続網文・磨擦による磨擦文・弧状沈帯文	縦い削り方向のナデのナデ上に貝殻による上下2枚のロッキング	やや密	胎土に5mm以下の白色・黄色粒を少量含む 2mm以下の白色粒を多く含む 2.5mm以下の白色・透明粒を少量含む	外: 内: スス付着
150	深鉢 前期末	Ⅱ	胴	C5	Ⅱ	-	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR5/2	縦方向の貝殻赤文・弧状の貝目突帯の上下に連続網文	縦方向の貝殻赤文の上に横いロッキング	やや密	胎土に5mm以下の白色粒を多く含む 1mm以下の透明粒を含む 2mm以下の灰色粒を少量含む	外: スス付着

第9表 縄文時代中・後期土器観察表 (1)

No	器種	分類	部位	出土位置	出土層位	重量 (g)	色		施文・装飾等		胎土	備考	
							外面	内面	外面	内面			
151	深鉢	前期	胴	A3	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR5/3	暗灰黄 2.5Y5/2	短付突帯(横)→斜み 短付突帯(縦)→ナデ 下部は染朱文	ナデ	やや 密	20m以下の白色粒を多く含む 10m以下の白色・透明粒を多く含む 20m以下の灰色粒を多く含む	
152	深鉢	前期	天	C7	Ⅲ	-	灰青緑 10YR5/2	にぶい黄緑 10YR5/3	口縁部に斜帯、下部は ナデ→風化の染朱文	横方向のナデ	やや 密	30cm以下の白色粒を多く含む 10m以下の白色粒を多く含む 10m以下の灰色粒を多く含む	
153	深鉢	前期	天	C5	Ⅲb	-	灰青緑 10YR5/2	にぶい黄緑 10YR5/4	ナデ→貝殻線継ぎ通点文	横方向のナデ	やや 密	20m以下の白色粒を多く含む 20m以下の白色・透明粒を含む	外・スス付帯
154	深鉢	Ⅲ	底	24T	I	-	にぶい黄緑 10YR5/4	明黄緑 10YR5/6	丁寧なナデ・指ナデ	ナデ	やや 密	20m以下の白色粒を多く含む 10m以下の白色粒を多く含む 3.5m以下の灰色粒・黒粒を少量含む	多角形足
155	深鉢	Ⅲ	口	D6	Ⅲ	-	暗灰 10YR6/1	灰青緑 10YR4/2	口縁突起に沈線→2ガキ・ 沈線・縞文	横方向の2ガキ	やや 密	20m以下の白色粒を少量含む 20m以下の白色・白色粒を少量含む 10m以下の灰色・透明粒を含む	外・内・赤色顔料 内・スス付帯
156	深鉢	Ⅲ	口	E7	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR6/4	にぶい黄緑 10YR5/4	口縁突起に沈線・縞文→1次 線→2ガキ	沈線・横方向の2ガキ	やや 密	10m以下の白色粒を少量含む 10m以下の透明粒を多く含む	外・赤色顔料 (汚染多い)
157	深鉢	Ⅲ	口	C3	Ⅲ	-	明赤褐 5YR5/9	にぶい褐 7.5YR5/4	2ガキ→十字形の4個の短 沈線の間に縞文・横方向の 沈線→縞文	横方向の2ガキ	やや 密	10m以下の白色粒を少量含む	
158	深鉢	Ⅲ	口	C3	Ⅲb	-	明褐 7.5YR5/6	明褐 7.5YR5/6	ナデ→沈線→縞文	ナデ(風化)	やや 密	40cm以下の白色粒を少量含む 10m以下の白色・白色粒を多く含む 20cm以下の透明粒を少量含む	縞成前肩口
159	深鉢	Ⅲ	口	C6	Ⅲ	-	にぶい褐 7.5YR5/3	暗5YR5/6	口縁部突起に2枚員による 短斜縞文・沈線文・外側に 斜灰文。3.5m→沈線→2 枚員による短斜縞文	工具による横方向 のナデ	密	20cm以下の白色粒を少量含む 30cm以下の白色粒を含む	環状口縁 外・スス付帯、赤色 顔料
160	深鉢	Ⅲ	胴	B4	Ⅲb	-	暗7.5YR6/6	暗7.5YR7/6	沈線→縞文→横方向のナデ →下部は貝殻染朱文	横方向の貝殻染朱 ス→ナデ	やや 密	50cm以下の白色粒を少量含む 20cm以下の白色・灰色粒を少量含む 20cm以下の白色粒を多く含む	内・黒泥
161	深鉢	Ⅲ	胴	E7	Ⅲ	-	明褐 7.5YR5/6	灰褐 7.5YR4/2	ナデ→沈線→斜帯→ナデ →縞文	横方向のナデ	やや 密	1.50m以下の白色粒を少量含む 10m以下の白色・透明粒を多く含む	
162	深鉢	Ⅲ	胴	E7	Ⅲ	-	にぶい赤褐 5YR4/3	黒褐 10YR2/2	縞文→沈線による区画→ 丁寧なナデ	横方向の粗い2ガキ	やや 密	20m以下の白色・透明粒を多く含む 10m以下の白色・透明粒を多く含む	
163	深鉢	Ⅲ	胴	B4	Ⅲb	-	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/4	縞文→沈線による区画→ 2ガキ	横方向のナデ	やや 密	20m以下の白色・透明粒を多く含む 10m以下の透明粒を少量含む	外・赤色顔料 内・黒泥
164	深鉢	Ⅲ	胴	C5	Ⅲ	-	にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい褐 7.5YR5/4	縞文→沈線による区画→ 丁寧なナデ	横方向の貝殻染朱 文	やや 密	30cm以下の白色粒を多く含む 10m以下の白色・透明粒を多く含む 10m以下の白色・透明粒を少量含む	
165	深鉢	Ⅲ	胴	E5	Ⅲ	-	黒褐 2.5YR3/1	黒褐 2.5YR3/1	縞文→沈線による染朱→ 2ガキ	2ガキ	密	20m以下の白色・灰色粒を少量含む 20m以下の白色・透明粒を多く含む 10m以下の透明粒を少量含む	
166	深鉢	Ⅲ	胴	C3	Ⅲb	-	にぶい褐 7.5YR4/4	にぶい黄緑 10YR7/4	ナデ→沈線による区画→ 縞文	丁寧なナデ	やや 密	20cm以下の白色・黄色・白色粒を少量含む 20m以下の白色・透明粒を少量含む 10m以下の白色粒を少量含む	
167	深鉢	Ⅲ	胴	E7	Ⅲ	-	黒褐 7.5YR3/1	灰青緑 10YR4/2	縞文→沈線による区画→ ナデ	粗い横方向のナデ	やや 密	10m以下の白色粒を多く含む 10m以下の透明粒を少量含む	
168	深鉢	Ⅲ	胴	E3	Ⅲb	-	暗5YR6/8	暗5YR6/8	ナデ・無筋縞文・環状に沈 線	横方向のナデ	やや 密	20cm以下の白色・白色粒を多く含む 20m以下の灰色粒を多く含む 10m以下の透明粒・黒粒を少量含む	外・黒泥、赤色顔料 内・黒泥
169	深鉢	Ⅲ	底	A1-3区	Ⅲb	-	明赤褐 5YR5/6	灰褐 7.5YR4/2	横方向の工具ナデ・縞文	横方向のナデ	やや 密	20cm以下の白色・透明粒を少量含む 30cm以下の灰色粒を少量含む	外・スス付帯
170	深鉢	Ⅲ	口縁 把持 部	F3	Ⅲb	-	暗7.5YR4/4	灰青緑 10YR4/2	環状の沈線・ナデ→一部2ガ キ	横方向のヘラナデ	やや 密	10m以下の白色粒を多く含む 20cm以下の黄色を少量含む	
171	深鉢	Ⅲ	口 縁把 持部	C5	Ⅲb	-	にぶい黄緑 10YR5/3	にぶい黄緑 10YR5/3	口唇部に前方の短沈線・ 短斜縞の短沈線→口唇・ 縁部に短沈文・ナデ	横方向のヘラナデ	やや 密	10m以下の白色粒・黒粒を少量含む 0.50m以下の黒粒を多く含む 30cm以下の白色粒を多く含む	
172	深鉢	Ⅲ	口 縁把 持部	F8	Ⅲa	-	暗5YR6/8	にぶい褐 7.5YR5/3	沈線文・渦巻状の沈線文・ 縞文、環状2ガキ	横方向の2ガキ	やや 密	1.50m以下の白色・透明粒を少量含む 20m以下の白色・灰色粒を多く含む	外・スス付帯、赤色 顔料
173	深鉢	Ⅲ	口	A1-3区	Ⅲb	-	にぶい黄緑 10YR6/4	にぶい黄緑 10YR7/4	短付突帯および口縁部 に前方の短沈線・斜・横 方向の短ナデ	横方向のナデ	やや 密	0.50m以下の白色粒を少量含む 20cm以下の白色粒を多く含む 10m以下の白色・透明粒を少量含む	環状口縁、把持部が 割断したようになり らみあり
174	深鉢	Ⅲ	底	D6	Ⅲ	-	灰青緑 10YR4/2	黄褐 2.5Y5/3	沈線・横方向の丁寧なナデ	横方向のナデ	やや 密	20cm以下の白色粒を少量含む 10m以下の透明粒を少量含む	
175	深鉢	Ⅲ	底	E7	Ⅲ	-	灰青緑 10YR4/2	暗5YR4/1	沈線・短付突起・ナデ	粗いナデ	密	10m以下の白色・灰色粒を少量含む 30cm以下の白色粒を多く含む	
176	深鉢	Va	口	E6	Ⅲ	口(C)A1	にぶい黄緑 10YR7/4	灰青緑 10YR5/2	貝殻線継ぎ斜灰文・口唇部 に沈線→ナデ	貝殻染朱文・横方向 のナデ	やや 密	40cm以下の白色粒を多く含む 10m以下の白色・灰色粒を少量含む 0.50m以下の透明粒を多く含む	外・スス付帯
177	深鉢	Va	口	E7	Ⅲ	-	にぶい褐 7.5YR3/3	暗5YR7/6	貝殻染朱文・貝殻線継ぎ斜 灰文・短斜縞斜灰文・縞 文	ナデ	やや 密	10m以下の白色・黄色・灰色粒を多く含む 10m以下の白色粒を少量含む	環状口縁、黒泥
178	深鉢	Va	口	F6	Ⅲ	-	暗7.5YR6/6	暗7.5YR6/6	口唇部に貝殻線継ぎ斜灰文・ 短斜縞の短沈線→縞文・貝殻 線継ぎ斜灰文・短斜縞斜灰文・横 方向のナデ	貝殻染朱文・横方向 のナデ	やや 密	20cm以下の白色粒を含む 10m以下の白色・灰色粒を少量含む 20cm以下の白色・透明粒を多く含む	内・黒泥 外・スス付帯
179	深鉢	Va	口	E6	Ⅲ	-	暗5YR6/8	暗5YR6/8	貝殻染朱文・沈線文	貝殻染朱文	やや 密	10m以下の白色・透明粒を少量含む	外・スス付帯、環状 口縁
180	深鉢	Va	口	A3-3区	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR7/4	明黄緑 10YR7/6	口唇部に連続短斜灰文・短 沈線・環状沈線・縞文→ナ デ	貝殻染朱文後ナデ	密	10m以下の白色・灰色・透明粒を少量含む 10m以下の白色粒を多く含む	外・スス付帯 内・黒泥

第10表 縄文時代中・後期土器観察表(2)

No	器種	分類	部位	出土位置	出土層位	流量 (cm)	色面		施文・面整等		胎土	備考	
							外面	内面	外面	内面			
181	深鉢	V	口	D4	Ⅲb	-	にぶい襷 7.5YR/6/4	灰褐 7.5YR/5/2	縄文一次焼・2ガキ	粗い2ガキ	やや 粗	18m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の白色粒を含む 0.5m以下の透明粒を含む	外・赤色顔料、黒 鉄 内・黒炭
182	深鉢	Va	Ⅲ	E7	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR/6/4	褐灰 10YR/6/1	底のあるへう状工具による 浅焼、厚層部に連続刻み。 横方向の貝殻条痕文一横 方向のナズ	工具による横方向 のナズ	やや 粗	18m以下の赤色粒を微量に含む 18m以下の白色粒を少量含む 18m以下の透明粒を中量含む	
183	深鉢	Va	口	E7	Ⅲ	-	埋5YR/8/6	灰黒褐 10YR/4/2	胎付突帯・横方向のナズ	横方向のナズ	やや 密	20m以下の赤色・灰色粒を少量含む 20m以下の白色・白色粒を少量含む	外・スス付着・黒炭 内・スス付着・黒炭
184	深鉢	Vb	口	D6	Ⅲ	-	黄灰 2.5Y/4/1	黄青 2.5Y/7/4	口唇部に貝殻条痕文・貝 殻条痕文・1段の貝殻条痕 刻み文	横方向のナズ	やや 粗	30m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の白色・透明粒を微量に含む	外・スス付着
185	深鉢	Vb	口	E7	Ⅲ	-	埋7.5YR/7/6	埋7.5YR/7/6	横方向の貝殻条痕連続刻 み文、横方向のナズ	貝殻条痕文一ナズ	やや 密	18m以下の赤色・褐色粒を少量含む 20m以下の白色粒を少量含む 18m以下の透明粒を少量含む	内・黒炭・スス付着
186	深鉢	Vb	口	A3- 1区	Ⅲ	-	にぶい埋 7.5YR/6/4	にぶい黄緑 10YR/6/4	口唇部に貝殻条痕押印文・貝 殻条痕刻み文・貝殻条痕文	貝殻条痕文一横方 向のナズ	やや 粗	18m以下の赤色・白色粒を多く含む 18m以下の透明粒を少量含む	
187	深鉢	Vb	口	E8	Ⅲ	-	朝赤褐 5YR/5/6	褐灰 7.5YR/5/1	口唇部に斜方向の強い沈 積・貝殻条痕文	貝殻条痕文	やや 密	20m以下の赤色粒を微量に含む 20m以下の灰色粒を多く含む	
188	深鉢	Vb	口	C4	Ⅲb	-	埋7.5YR/4/4	にぶい黄緑 10YR/6/4	斜方向の短沈積・斜方向の 粗い2ガキ	光沢のある丁寧な ナズ	やや 粗	20m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の白色粒を多く含む 18m以下の灰色・透明粒を少量含む	
189	深鉢	Vb	口	C4	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR/6/4	2.5Y/4/1	口唇部に強い沈積状の面 取り、横方向のナズ・貝 殻条痕連続刻み文	横・斜方向のナズ	やや 粗	18m以下の赤色粒を微量に含む 20m以下の透明粒を少量含む	
190	深鉢	Vb	口	B4	Ⅲa	-	黄青 2.5Y/8/2	2.5Y/8/4	貝殻条痕による連続刻み 文、横方向のナズ	口唇部に貝殻条痕 文、横方向のナズ	やや 粗	50m以下の赤色粒を多く含む 20m以下の灰色粒を少量含む 18m以下の白色粒を少量含む	波状口縁
191	深鉢	Vb	口	F8	Ⅲ	-	にぶい埋 7.5YR/7/4	灰褐 7.5YR/5/2	斜方向の短沈積文・ケズリ 状の強い横方向のナズ	横方向のナズ	やや 粗	20m以下の赤色粒を多く含む 0.5m以下の透明粒を多く含む	外・スス付着 内・黒炭
192	深鉢	Vb	口	C7	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR/6/2	2.5Y/1	斜方向の短沈積文・口唇部 に刻み、粗い横方向のナズ	粗い横方向のナズ	やや 密	4.5m以下の赤色粒を少量含む 20m以下の灰色・透明粒を少量含む 20m以下の白色粒を多く含む	外・スス付着・黒炭 内・黒炭
193	深鉢	Vc	口	E5	Ⅲ	-	にぶい埋 7.5YR/6/4	にぶい埋 7.5YR/6/4	波瀾部に押印刻み、横方 向のナズ・胎付突帯上に円 形連続刻み文	貝殻条痕文一ナズ	やや 粗	18m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の黒色・白色・透明粒を少量含む 20m以下の灰色粒を含む	波状口縁
194	深鉢	Vc	口	E6	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR/6/2	にぶい黄緑 10YR/6/4	横ナズ・0字形の連続刻み 文	横方向のナズ、口 唇部凹面の面取り	やや 粗	1.5m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の灰色粒を少量含む 20m以下の灰色粒を多く含む	
195	深鉢	Vc	口	C6	Ⅲb	-	にぶい埋 5YR/6/4	埋5YR/6/6	ケズリ状の強い横方向のナズ 一連続刻み文	横方向のナズ、口 唇部は凹線文状の 面取り	やや 粗	20m以下の赤色粒を多く含む 50m以下の灰色粒を少量含む 18m以下の白色粒を少量含む	
196	深鉢	Vc	口	B5	Ⅲb	-	埋7.5YR/6/6	にぶい黄緑 10YR/7/4	横方向のナズ一0字形の 連続刻み文	横方向のナズ	やや 密	20m以下の灰色粒を多く含む 50m以下の白色粒を少量含む 18m以下の透明粒を少量含む	
197	深鉢	Vc	口	C6	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR/6/4	にぶい黄緑 10YR/7/4	口唇部内側に連続押印刻 み・斜方向の貝殻条痕文・ 波瀾文状に連続刻み刻み 文(押印文)・口縁等に下に 連続押印刻み	貝殻条痕文	やや 密	18m以下の赤色・白色粒を少量含む 20m以下の灰色粒を微量に含む	
198	深鉢	Vc	口	一定	F7	Ⅲ	黄灰 2.5Y/7/2	にぶい黄緑 10YR/6/3	斜・横方向の貝殻条痕文。 波瀾部に短沈積、波瀾部に 内側の波瀾文・口縁部に2 次工具による連続刻み 文、押印文	斜・横方向の貝殻条 痕文、胎付突帯 ナズ	やや 密	70m以下の赤色粒を多く含む 0.5m以下の白色粒を少量含む	外・内・黒炭 波状口縁
199	深鉢	Vd	口	E7	Ⅲ	-	埋7.5YR/4/4	にぶい黄緑 10YR/6/4	口唇部に沈積文、斜方向・ 突帯の短沈積文・貝殻条痕 文	貝殻条痕文	やや 密	18m以下の赤色・褐色・灰色粒を少量含む 18m以下の白色粒を多く含む 18m以下の透明粒を多く含む	外・スス付着・黒炭
200	深鉢	Vd	口	A3- 3区	Ⅲa	-	埋5YR/8/6	明黄褐 10YR/7/6	口唇部に沈積文・口縁端部 に連続押印刻み、現在の 横方向の沈積文	ナズ	やや 密	18m以下の赤色粒を微量に含む 18m以下の灰色粒を多く含む	
201	深鉢	Vd	口	E8	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR/6/4	にぶい黄緑 10YR/6/4	口縁部に連続刻み刻み文・波 瀾による滑帯文・連続刻み 文・口唇部に沈積、波瀾部 に円形刻み文	横方向のナズ	やや 密	18m以下の赤色・透明粒を少量含む 0.5m以下の黒色・白色粒を少量含む 8.5m以下の灰色粒を少量含む	波状口縁
202	深鉢	Vd	口	C4	Ⅲb	-	埋5YR/8/6	埋5YR/8/6	2条の波瀾文・横方向のナズ ・棒状工具連続短沈積文	横方向のナズ	やや 密	18m以下の赤色・透明粒を微量に含む 20m以下の白色粒を微量に含む	
203	深鉢	Vd	口	E5	Ⅲ	-	黒褐 7.5YR/3/1	灰褐 7.5YR/4/2	縦方向・横方向の短沈積 文・横方向のナズ	丁寧な横方向のナズ	密	18m以下の白色・透明粒を少量含む 18m以下の赤色粒を微量に含む	
204	深鉢	Vd	口	B5	Ⅲb	-	黄青 10YR/6/4	褐灰 10YR/6/1	2条の弧状沈積文・斜 文、横方向のナズ、口唇 部の凹線文状の面取り、口唇 に沈積文・連続押印文	横方向の貝殻条痕 文一横方向のナズ	やや 粗	50m以下の赤色粒を多く含む 18m以下の白色・透明粒を含む 20m以下の赤色粒を含む	外・スス付着 内・黒炭
205	深鉢	Ve	口	A3- 2区	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR/6/4	にぶい黄緑 10YR/6/4	波瀾内連続刻み刻み文・波 瀾文、横方向のナズ	粗いナズ	やや 密	18m以下の赤色粒を微量に含む 0.5m以下の黒色・透明粒を少量含む 0.5m以下の白色粒を少量含む	波状口縁

第11表 縄文時代中・後期土器観察表 (3)

No	器種	分類	部位	出土位置	出土層位	流量 (cm)	色面		施文・面整等		胎土	備考	
							外面	内面	外面	内面			
208	深鉢	Va	口	A1-1区	■	-	にぶい黄緑 10YR5/2	灰赤焼 10YR4/2	口唇に連続斜め・横方向のナデ・2本の沈線文	横方向のナデ	やや密	18cm以下の赤色・白色粒を多量含む	
207	鉢	X	胴一筋	E2	■	-	にぶい黄緑 10YR5/4	にぶい黄緑 10YR5/4	ナデ・2本の沈線文、X字状に反転する2本の沈線文、へうろび	へうろび	やや密	18cm以下の赤色・透明粒を少量含む 18cm以下の白色粒を少量含む	
206	深鉢	Va	口一筋	B4	■	口: (27.0)	黄赤焼 2.5YR7/4	黄赤焼 2.5Y7/7	口唇は斜方向の連続斜め・長筒円状の沈線文・工具ナデ	横方向のナデ一横方向の貝殻縁連続刻実文	やや密	28cm以下の赤色粒を多量含む 18cm以下の赤色・白色・灰色・透明粒を少量含む	外・スチ付蓋 圧痕資料13
209	深鉢	Va	口	G4	■	-	にぶい黄緑 10YR5/2	にぶい黄緑 10YR7/4	横方向のナデ・口唇部沈線文・沈線文	横方向のナデ(結合面あり)	やや密	28cm以下の赤色粒を多量含む 18cm以下の赤色粒を少量含む	
210	深鉢	Va	口	E8	■	-	褐 7.5YR6/4	明焼 7.5YR5/4	口唇部に沈線文・屈状沈線文・連続刻実文	ナデ・粗いナデ	やや密	28cm以下の赤色・灰色・透明粒を少量含む 18cm以下の白色粒を多量含む	外・内: 黒煎 波状口縁
211	深鉢	Va	口	A2-2区	■	-	褐 7.5YR7/6	灰赤焼 10YR5/2	2本の沈線文をほむようにな連続斜め・貝殻縁文	貝殻縁文	やや密	28cm以下の赤色・灰色粒を少量含む 18cm以下の赤色・透明粒を多量含む 18cm以下の白色粒を多量含む	外・スチ付蓋 波状口縁
212	深鉢	Va	口	F6	■	-	にぶい黄 7.5YR6/4	10YR4/2	口唇部は凹状の面取り・沈線文・口唇の上下端部及び沈線はさむ連続斜め・多稜文	横方向のナデ	やや密	28cm以下の赤色・灰色粒を微量に含む 18cm以下の赤色粒を多量含む 28cm以下の白色・透明粒を多量含む	波状口縁 外・スチ付蓋
213	深鉢	Va	口	C3	■	-	にぶい黄 7.5YR7/3	にぶい黄 7.5YR7/4	口唇部に沈線文・連続斜め・沈線文と連続刻実文・横方向のナデ	貝殻縁文一横方向のナデ	やや密	28cm以下の赤色・白色・灰色粒を少量含む 18cm以下の赤色粒を多量含む 0.5cm以下の透明粒を多量含む	外・黒煎 波状口縁
214	深鉢	Va	口	A3-1区	■	-	にぶい黄緑 10YR5/2	にぶい黄緑 10YR5/3	沈線部を厚圧・5本の沈線文・ナデ	横方向のナデ	やや密	28cm以下の赤色粒を多量含む 18cm以下の赤色・白色粒を微量に含む	波状口縁
215	深鉢	VI	口	B5	■	-	にぶい黄 7.5YR5/4	明赤焼 5YR5/6	ナデ・貝殻縁文一突帯胎付・突帯部に厚圧跡	貝殻縁文一ナデ	やや密	18cm以下の透明粒を多量含む 28cm以下の赤色粒を少量含む	外・スチ付蓋 波状口縁
216	深鉢	VI	口	E6	■	-	明赤焼 5YR5/6	褐 7.5YR6/4	口唇部に厚圧跡・貝殻縁文一ナデ	貝殻縁文	やや密	28cm以下の白色粒を多量含む 18cm以下の灰色粒を多量含む 18cm以下の透明粒を少量含む	
217	深鉢	VI	口	C4	■	-	赤焼 5YR4/5	明赤焼 5YR5/5	厚圧部に貝殻縁連続刻実文・貝殻縁連続刻実文・横方向のナデ	横方向のナデ	やや密	18cm以下の赤色粒を微量に含む 18cm以下の白色粒を少量含む 18cm以下の透明粒を少量含む	波状口縁
218	鉢	IV	口	A3-2区	■	-	にぶい赤焼 5YR5/4	にぶい黄緑 10YR5/4	貝殻縁細文・横方向のへうろび	へうろび	やや密	28cm以下の赤色粒を少量含む 18cm以下の灰色粒を少量含む	外・スチ付蓋
219	深鉢	VI	口	C3	■	-	にぶい黄緑 10YR5/4	褐 7.5YR6/4	胎付突帯・沈線文の両側に2本の連続斜め・口唇は厚圧跡目文・沈線文・横方向のナデ	斜一横方向の貝殻縁文一ナデ	やや密	5cm以下の赤色・透明粒を多量含む 18cm以下の赤色・灰色・透明粒を少量含む 18cm以下の白色粒を多量含む	内: 黒煎 波状口縁
220	鉢	VI	口	G4	■	-	にぶい黄 7.5YR6/4	にぶい黄 7.5YR6/4	口唇の胎付突帯に横方向の斜行状の胎付粘土帯・横方向のナデ・胎付突帯文	丁寧なナデ	やや密	18cm以下の赤色粒を少量含む 18cm以下の灰色・透明粒を多量含む	外・内: 黒煎
221	深鉢	VI	口	A1-4区	■	-	明焼 7.5YR5/5	褐 7.5YR6/4	4本の逆字状連続斜め・横方向の胎付突帯上に刻実文・横方向のナデ	斜方向の貝殻縁文一ナデ	やや密	28cm以下の赤色粒を少量含む 18cm以下の赤色・透明粒を少量含む 18cm以下の白色粒を多量含む	内: スチ付蓋
222	深鉢	VI	口	F3	■	口: (30.0)	明赤焼 2.5YR5/6	明赤焼 2.5YR5/8	貝殻縁文一貝殻縁連続刻実文	貝殻縁文	やや密	48cm以下の赤色粒を多量含む 0.5cm以下の赤色粒を少量含む	
223	深鉢	VI	口	D4	■	-	明赤焼 5YR5/8	明赤焼 5YR5/8	貝殻縁文一貝殻縁連続刻実文	貝殻縁文	やや密	48cm以下の赤色・灰色粒を多量含む 0.5cm以下の赤色粒を少量含む	
224	深鉢	VI	口一筋	B5	■	口: (23.0)	明赤焼 5YR5/8	明赤焼 5YR5/8	貝殻縁文一貝殻縁連続刻実文	貝殻縁文一横方向のナデ	やや密	48cm以下の赤色・灰色粒を多量含む 18cm以下の白色・透明粒を少量含む	外・スチ付蓋
225	深鉢	VI	口一筋	F3	■	口: 31.4	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 5YR5/5	貝殻縁文・横方向のナデ一貝殻縁連続刻実文・口唇部はナデで面取り	貝殻縁文	やや密	28cm以下の赤色粒を多量含む 18cm以下の赤色・灰色粒を多量含む 18cm以下の赤色・透明粒を少量含む	外・スチ付蓋
226	深鉢	VI	口一筋	F2	■	口: (39.2)	褐 5YR6/8	褐 2.5YR6/8	貝殻縁文一貝殻縁連続刻実文・口唇部はナデで面取り	貝殻縁文	やや密	18cm以下の赤色・透明粒を多量含む 0.5cm以下の赤色粒を微量に含む	外・スチ付蓋
227	深鉢	VI	口一筋	F3	■	口: (26.0)	にぶい赤焼 5YR5/4	明赤焼 5YR5/8	貝殻縁文一貝殻縁連続刻実文・口唇部はナデで面取り	貝殻縁文・横方向のナデ	やや密	48cm以下の赤色粒を多量含む 28cm以下の赤色・白色粒を少量含む 18cm以下の白色・透明粒を多量含む	外・スチ付蓋・黒煎 内: 黒煎
228	深鉢	VI	口一筋	G6	■	-	明赤焼 2.5YR5/8	褐 2.5YR6/8	横方向の貝殻縁文・横方向のナデ・貝殻縁連続刻実文	横方向の貝殻縁文	やや密	28cm以下の赤色粒を多量含む 18cm以下の白色粒を少量含む	外・スチ付蓋
229	深鉢	VI	口	C5	■	-	褐 5YR6/8	明焼 7.5YR5/6	貝殻縁文一横方向のナデ・厚圧跡に横方向の貝殻縁連続刻実文	やや密	28cm以下の赤色粒を少量含む 1.5cm以下の赤色・白色粒を少量含む 28cm以下の透明粒を多量含む	外・スチ付蓋 波状口縁	
230	深鉢	VI	口	G4	■	-	赤焼 5YR4/8	褐 7.5YR6/4	貝殻縁文一横方向のナデ一貝殻縁連続刻実文	横方向のナデ	やや密	0.5cm以下の赤色粒を少量含む 18cm以下の白色・透明粒を多量含む	外・スチ付蓋 内: 黒煎
231	深鉢	VI	口一筋	F3	■	-	赤焼 5YR4/8	明焼 7.5YR4/4	貝殻縁文一横方向のナデ・貝殻縁連続刻実文	横方向のナデ	やや密	48cm以下の赤色粒を少量含む 18cm以下の白色・透明粒を少量含む	外: 黒煎
232	深鉢	VI	口一筋	E3	■	口: (20.6)	褐 7.5YR6/8	褐 7.5YR6/8	貝殻縁文一ナデ・貝殻縁連続刻実文	貝殻縁文一横方向のナデ	やや密	5cm以下の赤色・透明粒を多量含む 18cm以下の赤色・白色・灰色粒を少量含む 18cm以下の透明粒を多量含む	外・スチ付蓋・黒煎 内: 黒煎
233	深鉢	VI	口一筋	C4	■	口: (23.0)	明赤焼 5YR5/5	褐 7.5YR4/3	貝殻縁文一貝殻縁連続刻実文	貝殻縁文一横方向のナデ	やや密	28cm以下の赤色粒を多量含む 18cm以下の白色・透明粒を少量含む	外: 黒煎 圧痕資料13
234	深鉢	VI	口	F3	■	-	褐 7.5YR4/3	赤焼 5YR4/8	貝殻縁文一貝殻縁連続刻実文・口唇に厚圧跡	貝殻縁文(斜文)	やや密	18cm以下の白色・透明粒を微量に含む	外・内: 黒煎
235	深鉢	VI	口	E4	■	-	明赤焼 5YR4/1	明赤焼 5YR5/5	貝殻縁文・貝殻縁連続刻実文	貝殻縁文・横方向のナデ	やや密	18cm以下の赤色粒を多量含む 0.5cm以下の赤色・透明粒を多量含む 0.5cm以下の白色・灰色粒を少量含む	外・スチ付蓋

第12表 縄文時代中・後期土器観察表 (4)

No	部類	分類	部位	出土位置	出土層位	流量 (cm)	色面		施文・面装等		胎土	備考
							外面	内面	外面	内面		
226	深鉢	Ⅲ	C5	Ⅲb	-	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 5YR5/5	横方向のナデ、貝殻線施文・貝殻線連続刻文	横・斜方向の貝殻線施文・貝殻線連続刻文	やや密	5mm以下の赤色粒を少量含む 18mm以下の黒色・透明粒を少量含む 20mm以下の白色粒を多く含む	
227	深鉢	Ⅲ	C4	Ⅲa	口:(21.4)	明赤焼 5YR5/5	暗5YR5/5	貝殻線文一ナデ、貝殻線連続刻文	貝殻線文一ナデ	やや密	18mm以下の赤色粒を多く含む 20mm以下の黒色・白色・透明粒を少量含む	外・スチ付蓋 風化が激しい
228	深鉢	Ⅲ	C3	Ⅲb	-	黄緑 10YR3/2	褐7.5YR4/3	貝殻線文一横方向のナデ、貝殻線連続刻文	横方向の貝殻線文一横方向のナデ	やや密	4mm以下の赤色粒を少量含む 20mm以下の黒色・灰色粒を少量含む 20mm以下の透明粒を少量含む	外・内:黒斑
229	深鉢	Ⅲ	C4	Ⅲb	-	暗5YR5/5	にぶい黄緑 10YR3/4	貝殻線文一ナデ、貝殻線連続刻文	貝殻線文一横方向のナデ	やや密	18mm以下の赤色・白色粒を多く含む 0.5mm以下の灰色粒を少量含む	
240	深鉢	Ⅲ	F3	Ⅲb	-	にぶい赤焼 5YR4/4	にぶい赤焼 5YR4/4	貝殻線連続刻文・横方向のナデ、貝殻線文	貝殻線文・ナデ	やや密	5mm以下の赤色粒を少量含む 20mm以下の黒色・白色・透明粒を少量含む 18mm以下の灰色粒を少量含む	
241	深鉢	Ⅲ	E3	Ⅲb	-	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 5YR5/5	貝殻線文・貝殻線連続刻文	貝殻線文一横方向のナデ	やや密	20mm以下の赤色・黒色粒を少量含む 20mm以下の白色粒を少量含む 20mm以下の透明粒を多く含む	外・スチ付蓋
242	深鉢	Ⅲ	C3	Ⅲa	IVa	明赤焼 2.5YR5/5	明赤焼 2.5YR5/5	貝殻線文一貝殻線連続刻文	貝殻線文・横方向のナデ	やや密	20mm以下の赤色粒を多く含む 0.5mmの白色・透明粒を少量含む 20mm以下の透明粒を多く含む	
243	深鉢	Ⅲ	A1-2I	Ⅲ	-	黄緑 7.5YR4/1	明赤焼 7.5YR5/5	横方向のナデ、押印刻みの貝殻線連続刻文	貝殻線文・横方向のナデ	やや密	20mm以下の赤色粒を多く含む 18mm以下の黒色・透明粒を少量含む 20mm以下の透明粒を多く含む	外:黒斑
244	深鉢	Ⅲ	C3	Ⅲa	-	にぶい赤焼 5YR4/3	褐7.5YR4/4	ナデ、貝殻線連続刻文・貝殻線文	横方向のナデ、貝殻線文	やや密	4mm以下の赤色粒を少量含む 18mm以下の黒色・透明粒を少量含む 20mm以下の赤色粒を少量含む	
245	深鉢	Ⅲ	F3	Ⅲb	口:(18.0)	にぶい焼 7.5YR5/6	黄・斜方向の貝殻線文・横方向ナデ	貝殻線文一横方向のナデ	やや密	18mm以下の赤色粒を少量含む 18mm以下の黒色・白色粒を少量含む 18mm以下の透明粒を少量含む		
246	深鉢	Ⅲ	C4	Ⅲb	-	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 5YR5/5	横方向の貝殻線文一横方向の貝殻線文	貝殻線文	やや密	18mm以下の赤色・透明粒を少量含む 18mm以下の黒色粒を少量含む	外・スチ付蓋
247	深鉢	Ⅲ	C4	Ⅲb	-	明赤焼 2.5YR5/5	暗7.5YR5/6	横方向の貝殻線文の上・横方向の貝殻線文・斜方向の貝殻線文	横方向の貝殻線文	やや密	0.5mm以下の赤色・白色・透明粒を多く含む 0.5mm以下の黒色粒を少量含む	
248	深鉢	Ⅲ	A1-2I	Ⅲ	-	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 5YR5/5	貝殻線文一横方向のナデ	貝殻線文・横方向のナデ	やや密	4mm以下の赤色粒を少量含む 20mm以下の黒色粒を少量含む 20mm以下の透明粒を少量含む	外・内:黒斑
249	深鉢	Ⅲ	C4	Ⅲa	-	黄緑 7.5YR3/3	褐7.5YR4/4	横方向のナデ	蓋面内面に押印刻み・横方向のナデ	やや密	18mm以下の赤色・黒色粒を少量含む 18mm以下の灰色・透明粒を少量含む	蓋状口縁
250	鉢	Ⅲ	C4	Ⅲb	-	明焼 7.5YR5/6	明焼 7.5YR5/6	横方向のナデ(黄斑あり)・4面の施文	横方向のナデ(一部黄斑あり、2面平か)	やや密	18mm以下の黒色・白色粒を少量含む 20mm以下の透明粒を少量含む	
251	深鉢	Ⅲ	C5	Ⅲb	-	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 5YR5/5	口唇部に押印刻み・押印刻み一帯にヘラナデ(黄斑あり)	横方向のナデ	やや密	20mm以下の赤色・灰色粒を少量含む 18mm以下の黒色・透明粒を少量含む 4mm以下の白色粒を多く含む	蓋状口縁
252	深鉢	Ⅲ	E3	Ⅲb	-	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 2.5YR5/5	口唇部に押印刻みで押印刻み4個一横方向のナデ	横方向のナデ	やや密	4mm以下の赤色粒を少量含む 18mm以下の黒色粒を少量含む 20mm以下の白色・透明粒を多く含む	内:スチ付蓋 蓋状口縁
253	深鉢	Ⅲ	C6	Ⅲ	-	にぶい焼 7.5YR5/4	黄緑 7.5YR2/2	組いへう3面・波頭部に2面の短次施文	組いへうガキ	やや密	18mm以下の白色粒を少量含む 20mm以下の灰色粒を多く含む 18mm以下の透明粒を少量含む	蓋状口縁 内:スチ付蓋
254	深鉢	Ⅲ	E3	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR7/2	黄緑 10YR7/4	波頭部に貝殻線文による押印刻み・横方向のナデ	横方向のナデ	やや密	20mm以下の赤色粒を多く含む 18mm以下の白色・灰色粒を少量含む 0.5mm以下の透明粒を少量含む	蓋状口縁
255	深鉢	Ⅲ	C5	Ⅲ	-	にぶい焼 7.5YR2/4	暗5YR7/3	口唇部に押印刻み・横方向のナデ	貝殻線文	やや密	20mm以下の赤色粒を少量含む 18mm以下の白色粒を少量含む 20mm以下の透明粒を少量含む	蓋状口縁か
256	深鉢	Ⅲ	A3-3I	Ⅲ	-	黄緑 2.5YR5/4	にぶい黄緑 10YR7/4	横・斜方向の貝殻線文・口唇部に連続押印刻み	横方向の貝殻線文一横方向のナデ	やや密	20mm以下の赤色粒を少量含む 20mm以下の黒色・白色粒を少量含む 18mm以下の透明粒を多く含む	外:黒斑
257	深鉢	Ⅲ	F7	Ⅲ	-	暗7.5YR5/6	暗7.5YR5/6	波頭部内外面をめぐりる波状施文・貝殻線文	貝殻線文	やや密	20mm以下の赤色粒を少量含む 20mm以下の白色粒を少量含む 2.5mm以下の灰色粒を少量含む	外・スチ付蓋 内:黄化付蓋 蓋状口縁
258	深鉢	Ⅲ	A3-1I	Ⅲ	-	にぶい焼 7.5YR5/4	にぶい焼 7.5YR5/4	貝殻線文一横方向のナデ・口唇部に施文	貝殻線文	やや密	1.5mm以下の赤色粒を少量含む 20mm以下の黒色・透明粒を少量含む 18mm以下の赤色・灰色粒を少量含む	口縁・スチ付蓋
259	深鉢	Ⅲ	A1-4I	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR6/4	にぶい黄緑 10YR7/4	口唇部に連続施文と押印刻み・横方向のナデ、波頭部に2面の短次施文	横方向のナデ	やや密	20mm以下の赤色粒を少量含む 18mm以下の黒色・白色粒を少量含む 20mm以下の白色粒を少量含む	蓋状口縁 外:黒斑
260	深鉢	Ⅲ	F8	Ⅲ	-	暗5YR5/6	にぶい焼 7.5YR5/4	口唇部に黄斑と押印刻み・横方向のナデ	横方向のナデ	やや密	20mm以下の赤色・灰色粒を多く含む 18mm以下の黒色粒を少量含む 18mm以下の白色・透明粒を多く含む	外・内:スチ付蓋 黒斑
261	鉢	Ⅲ	C3	Ⅲb	-	暗5YR5/6	暗5YR5/6	横方向のナデ・口唇部に短次施文・斜角のある押印刻み	横方向のナデ	密	18mm以下の赤色・白色粒を少量含む 0.5mm以下の透明粒を多く含む	外:赤色胎料
262	深鉢	Ⅲ	C4	Ⅲb	-	明赤焼 2.5YR5/5	明赤焼 2.5YR5/5	口唇部に短次施文・横方向の工具ナデ(ヘラか)	横方向のナデ	やや密	4mm以下の赤色粒を少量含む 20mm以下の黒色・白色粒を少量含む 20mm以下の透明粒を多く含む	内:黒斑
263	深鉢	Ⅲ	B4 C4	Ⅲb	口:(23.3)	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR6/3	横・斜方向の貝殻線文一ナデ、口唇部に貝殻線による押印刻み	横・斜方向の貝殻線文一ナデ	やや密	20mm以下の赤色粒を少量含む 18mm以下の透明粒を少量含む	外・スチ付蓋 蓋状口縁
264	深鉢	Ⅲ	F6	Ⅲ	口:(28.1)	黄緑 10YR5/4	暗7.5YR5/6	横方向の工具ナデ、波頭に押印刻み	横方向のナデ・工具ナデ	やや密	20mm以下の赤色粒を多く含む 0.5mm以下の灰色粒を多く含む	蓋状口縁 外:スチ付蓋 少量の入り付蓋 内:黒斑 蓋状口
265	深鉢	Ⅲ	C4	Ⅲb	-	明赤焼 5YR5/5	明赤焼 5YR5/5	波頭部に刻文・斜方向の貝殻線文一帯にヘラナデ	横方向の貝殻線文一横方向のナデ	密	20mm以下の赤色粒を少量含む 18mm以下の白色粒を少量含む 18mm以下の透明粒を多く含む	

第13表 縄文時代中・後期土器観察表 (5)

No.	群集	分期	部位	出土位置	出土層位	流量 (cm)	色面		施文・面装等		胎土	備考	
							外面	内面	外面	内面			
266	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C5	Ⅲ	-	灰青 7.5YR4/2	にぶい黄 7.5YR5/4	波瀾部に洋庄跡み、口縁部に波瀾・貝殻条文・ケズリ瓦跡の強いナデ	貝殻条文	やや密	3mm以下の赤色・白色粒を少量含む 1.5mm以下の黒色・灰色粒を少量含む 1.5mm以下の透明粒を多く含む	波状口縁 外縁・ス入付着
267	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C4	Ⅲ	口(20.4)	にぶい黄 7.5YR4/2	にぶい黄緑 10YR2/4	波瀾部に洋庄跡み、工具ナデ・縞跡	貝殻条文	やや密	0.5mm以下の白色色粒を多く含む 1mm以下の赤色粒をやや多く含む	波状口縁 外・風乾 縞成後穿孔
268	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C5	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR4/4	にぶい黄緑 10YR3/3	波瀾部に口縁の短波文・口縁部に連続斜交文・横方向のナデ	ナデ	やや密	4mm以下の赤色粒を多く含む 1.3mm以下の黒色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を少量含む	外・内・風乾 波状口縁
269	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C4	Ⅲ	口(25.6)	にぶい黄 10YR4/4	にぶい黄 10YR3/4	波瀾部に洋庄・工具押形跡み・貝殻条文・横方向のナデ	横方向のナデ	やや密	4mm以下の赤色粒を多く含む 1mm以下の白色・灰色・透明粒を少量含む	波状口縁 外・ス入付着
270	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	D3	Ⅲ	口(31.8)	灰青 7.5YR4/2	明赤褐 5YR5/8	波瀾部に斜交文・貝殻条文	貝殻条文・横方向のナデ	やや密	3mm以下の赤色・透明粒を少量含む 1mm以下の黒色粒を少量含む 2mm以下の白色色粒を少量含む	波状口縁 外・ス入付着
271	皿	Ⅲ	Ⅰ	D5	Ⅲ	-	橙 5YR8/8	にぶい黄緑 10YR2/4	竹管による連続斜交・2本の波瀾・横方向のナデ・口縁に波瀾文・波瀾部に3本の押形跡み	横方向のナデ	やや密	1mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の白色・透明粒を少量含む	波状口縁
272	皿	Ⅲ	Ⅰ	A4-4E	Ⅲ	-	橙 5YR7/8	にぶい黄緑 10YR3/4	口縁部に巻貝による押形・巻貝条文・横方向のナデ・波瀾文	貝殻条文	やや密	4.5mm以下の赤色粒を少量含む 4mm以下の白色色粒を少量含む	波状口縁 外・少量のス入付着 内・多量の灰化物付着
273	皿	Ⅲ	Ⅰ	C4	Ⅲ	-	橙 5YR8/8	橙 5YR8/8	口縁に紐付貨幣・巻貝条文・横方向のナデ・波瀾文	丁寧なナデ	やや密	1mm以下の赤色・灰色粒を少量含む 1mm以下の白色色粒を少量含む	波状口縁 外・少量のス入付着 内・風乾
274	皿	Ⅲ	Ⅰ	C4	Ⅲ	-	明赤褐 5YR2/2	明赤褐 5YR5/8	工具ナデ・貝殻条文・口縁から内面にかけて波瀾部からずらして紐付貨幣文	貝殻条文文一横方向のナデ・波瀾部内面に貝殻条文	やや密	2mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の白色・透明粒を少量含む	波状口縁 ス入付着
275	皿	Ⅲ	Ⅰ	A1-4E	Ⅲ	-	橙 5YR8/8	明赤褐 5YR5/8	貝殻条文による波瀾の斜交文・横方向のナデ	ナデ	やや密	3mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の赤色・白色粒を少量含む 2mm以下の透明粒を少量含む	波状口縁 外・ス入付着
276	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C3 C4	Ⅲ	口(28.0)	橙 5YR8/8	橙 5YR8/8	貝殻条文	貝殻条文	やや密	3mm以下の赤色・灰色粒を少量含む 3mm以下の透明粒を少量含む	外・ス入付着 内・風乾
277	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	E3	Ⅲ	-	明赤褐 5YR4/2	明赤褐 5YR5/8	横方向の貝殻条文・ナデ	横・斜方向の貝殻条文・粘土網目模様あり	やや密	4mm以下の赤色粒を多く含む 2mm以下の白色色粒を少量含む 1mm以下の黒色・透明粒を少量含む	外・内・風乾
278	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C4	Ⅲ	口(23.8)	橙 5YR4/2	明赤褐 5YR5/8	貝殻条文一横方向のナデ	貝殻条文・横方向のナデ	やや密	3mm以下の赤色粒を多く含む 4mm以下の白色色粒を多く含む 2mm以下の透明粒を少量含む	縞成後穿孔
279	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	E2	Ⅲ	口(22.8)	灰青褐 5YR4/2	にぶい赤褐 5YR5/4	貝殻条文	貝殻条文	やや密	2mm以下の赤色粒を多く含む 1mm以下の赤色・白色・透明粒を少量含む	縞成後穿孔
280	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C4	Ⅲ	口(24.7)	橙 5YR8/8	2.5YR5/6	横方向のナデ・縞跡あり	貝殻条文	やや密	3mm以下の赤色粒を多く含む 1mm以下の赤色・白色・灰色粒を少量含む	外・ス入付着
281	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	E5	Ⅲ	口(26.6)	にぶい赤褐 7.5YR5/4	7.5YR5/4	横方向のナデ・横・斜方向の貝殻条文	貝殻条文	やや密	3mm以下の赤色・白色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を少量含む	縞成後穿孔
282	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	D3	Ⅲ	口(20.5)	明赤褐 2.5YR5/8	橙 5YR8/8	斜方向の貝殻条文・横方向のナデ	斜方向の貝殻条文・横方向のナデ	やや密	5mmの黒色粒を少量含む 0.5mmの黒色粒を少量含む 3mm以下の赤色・灰色・透明粒を少量含む	外・ス入付着
283	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	D3	Ⅲ	口(25.2)	にぶい赤褐 5YR4/2	にぶい赤褐 5YR4/2	横方向のナデ・貝殻条文	貝殻条文・横方向のナデ	やや密	1mm以下の赤色・白色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を少量含む	内・風乾
284	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	F5	Ⅲ	-	明赤褐 5YR5/8	橙 5YR8/8	貝殻条文・横方向のナデ	横方向のナデ・貝殻条文	やや密	2mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の赤色・白色・透明粒を少量含む 1mm以下の透明粒を少量含む	波状口縁
285	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C4	Ⅲ	口(21.0)	赤褐 5YR4/8	にぶい赤褐 5YR5/4	貝殻条文	貝殻条文	やや密	3mm以下の赤色粒を多く含む 2mm以下の白色・灰色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を少量含む	縞成後穿孔
286	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	D4	Ⅲ	口(29.8)	にぶい赤褐 2.5YR4/2	赤褐 5YR4/8	貝殻条文一へう巻跡あり	貝殻条文	やや密	3mm以下の赤色粒を多く含む 1mm以下の灰色粒を少量含む	縞成後穿孔
287	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C5	Ⅲ	-	にぶい赤褐 5YR4/2	にぶい赤褐 5YR4/2	貝殻条文・横方向のナデ	貝殻条文	やや密	1mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を少量含む	外・ス入付着
288	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	A2 Ⅲ	Ⅲ	-	にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい黄 7.5YR5/4	貝殻条文・横方向のナデ	貝殻条文・横方向のナデ	やや密	3mmの赤色粒を多く含む 0.5mm以下の赤色粒を少量含む 0.5mmの白色粒を多く含む	波状口縁 外・ス入付着
289	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	D4	Ⅲ	-	にぶい赤褐 5YR5/4	明赤褐 5YR4/8	ケズリ瓦跡の強い貝殻条文	ケズリ瓦跡の強い貝殻条文	やや密	3mm以下の赤色粒を多く含む 3mm以下の透明粒をやや多く含む 3mm以下の白色・灰色・黒色粒を少量含む	縞成後穿孔
290	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C4	Ⅲ	口(19.8)	赤褐 5YR4/8	赤褐 5YR4/8	斜方向の貝殻条文・ナデ	横方向の貝殻条文	やや密	4mm以下の白色粒を多く含む 1mm以下の赤色・灰色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を少量含む	粘土網目模様 外・ス入付着
291	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	C5 F5	Ⅲ	口(42.0)	にぶい黄緑 10YR5/4	にぶい黄緑 10YR5/4	貝殻条文一横方向のナデ	へう巻子か	やや密	3mm以下の白色粒を多く含む 1mm以下の赤色・灰色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を少量含む	波状口縁になる可能性あり
292	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	E5	Ⅲ	-	にぶい黄緑 10YR5/4	にぶい黄緑 10YR5/4	貝殻条文一横・斜方向のナデ	横方向のナデ	やや密	1.5mm以下の赤色・白色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を少量含む	内・灰化物付着
293	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	F8	Ⅲ	-	褐灰 10YR4/1	灰青褐 10YR4/2	細い波がナ・縞部に波瀾文	貝殻条文一横方向のナデ	やや密	1.5mm以下の赤色・透明粒を少量含む 0.5mm以下の灰色粒を少量含む	縞成後穿孔
294	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	A1-4E	Ⅲ	-	灰青 2.5Y/1	灰青褐 10YR5/2	貝殻条文一横方向のナデ	貝殻条文	やや密	1mm以下の赤色・灰色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を少量含む	波状口縁になる可能性あり 外・ス入付着
295	深鉢	Ⅲ	Ⅰ	E3	Ⅲ	口(21.6)	明赤褐 2.5YR3/2	明赤褐 2.5YR3/2	細いナデ	細いナデ・貝殻条文	やや密	4mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の赤色・白色・透明粒を少量含む	外・ス入付着

第14表 縄文時代中・後期土器観察表(6)

No	器種	分期	部位	出土位置	出土層位	遺量 (cm)	色		施文・遺形等		胎土	備考	
							外壁	内面	外壁	内面			
296	深鉢	XI	口内	C3	口口	(23.2)	赤褐色 5YR4/5	にぶい黄緑 10YR5/4	貝殻灰染文一様方向のナデ	貝殻灰染文一様方向のナデ	やや密	20m以下の赤色・白色粒を少量含む 10m以下の白色粒を多く含む 10m以下の透明粒を少量含む	外・スス付着 圧痕残5
297	深鉢	XI	胴	F6	口	-	赤褐色 2.5YR5/5	明赤褐色 5YR5/5	斜方向の染文	横・斜方向のナデ	やや密	40cm以下の赤色・灰色粒を多量含む 10m以下の黒色・白色粒を少量含む	外・黒腐 内・灰化物付着
298	深鉢	XI	胴	E3	口	-	明赤褐色 7.5YR5/5	明赤褐色 5YR5/5	斜方向の貝殻灰染文一様方向のナデ	斜・斜方向の貝殻灰染文一様方向のナデ	やや密	40cm以下の赤色粒を非常に多く含む 20m以下の白色・灰色・灰色粒を少量含む	外・スス付着
299	深鉢	XI	胴	F3	口	-	明赤褐色 5YR5/5	暗5YR5/5	斜・横方向の貝殻灰染文・横方向のナデ	斜・横方向の貝殻灰染文・横方向のナデ	やや密	20m以下の白色粒を多く含む 0.5m以下の白色・灰色・灰色粒を少量含む 10m以下の透明粒を少量含む	外・スス付着
300	深鉢	XI	胴一 底	C5 D5	口	-	赤褐色 5YR4/5	明赤褐色 5YR5/5	貝殻灰染文・ナデ	貝殻灰染文一様方向のナデ	やや密	20m以下の赤色・白色・灰色粒を非常に多く含む 20m以下の透明粒を少量含む	外・スス付着
301	深鉢	XI	胴一 底	B4	口	径:(10.5)	暗7.5YR5/5	暗7.5YR5/5	斜・横方向の工具ナデ・縦方向の工具ナデ	斜・横方向の貝殻灰染文・ナデ	やや密	20m以下の赤色・白色・灰色粒を非常に多く含む 20m以下の透明粒を少量含む	胴代座か
302	深鉢	XI	口内	C4	口	口:(28.0)	明赤褐色 5YR5/5	明赤褐色 5YR5/5	粗い工具ナデ	縦方向のナデ・ケズリ ノミ跡の粗いナデ	やや密	20m以下の赤色粒を多く含む 20m以下の白色・透明粒を多量含む 50cm以下の赤色・灰色粒を少量含む	外・スス付着 内・黒腐
303	深鉢	XI	口内	B4 F4	口	-	にぶい黄緑 7.5YR5/3	明赤褐色 5YR5/5	指頭痕・横方向の粗いナデ	縦方向の粗いナデ	やや密	20m以下の赤色・灰色粒を少量含む 10m以下の白色・白色粒を少量含む 10m以下の透明粒を多量含む	外・スス付着・黒腐 内・黒腐
304	深鉢	XI	口	E7	口	-	明赤褐色 7.5YR5/5	明赤褐色 7.5YR5/5	横方向のナデ・斜方向のナデ	横方向のナデ	粗	20m以下の赤色粒を少量含む 10m以下の白色・透明粒を少量含む 20m以下の白色粒を少量含む	外・スス付着
305	深鉢	XI	口	E4	口	-	にぶい赤褐色 5YR4/3	明赤褐色 5YR5/5	横方向の粗いナデ・縦方向のナデ	横方向の粗いナデ	やや密	20m以下の赤色粒を多量含む 0.5m以下の白色粒を多量含む 0.5m以下の灰色粒を少量含む	内・スス付着
306	深鉢	XI	口内	C4	口	口:(28.4)	にぶい赤褐色 5YR4/4	にぶい赤褐色 5YR4/4	縦方向の丁寧なナデ(先欠あり)・口唇部は斜めに並列	縦方向のナデ・ヘラ ナデ・ケズリナデ	やや密	20m以下の赤色粒を少量含む 10m以下の白色・透明粒を少量含む	外・黒腐
307	小型 鉢	XI	胴一 底	A1- 4D5	口	径:(5.5)	暗7.5YR4/4	明赤褐色 7.5YR4/4	横方向のナデ	横方向の粗いナデ	やや密	20m以下の赤色粒を多量含む 20m以下の白色・白色・透明粒を含む	外・スス付着 二ヶ丘タイプ に結合
308	深鉢	XII	口内	C4	口	-	暗7.5YR5/5	にぶい暗 7.5YR5/4	横方向のナデ・赤染文・粗いヘラミガキ・捺線文	赤染文一様方向のナデ	やや密	20m以下の赤色・白色粒を少量含む 20m以下の灰色粒を多量含む 10m以下の透明粒を少量含む	灰状口縁 内・黒腐
309	深鉢	XII	口内	C3	口	口:(42.7)	明赤褐色 2.5YR5/5	明赤褐色 2.5YR5/5	斜方向の工具よみ染文	斜・横方向の貝殻灰染文	やや密	20m以下の赤色・白色粒を多量含む 20m以下の赤色粒を少量含む	灰状口縁
310	深鉢	XII	口	C5	口	-	暗7.5YR5/5	暗7.5YR5/5	縦方向の貝殻灰染文・斜方向の貝殻灰染文	指頭痕・斜・横方向の貝殻灰染文	やや密	10m以下の赤色・黒色・白色粒を多量含む 10m以下の透明粒を少量含む	灰状口縁か 外・スス付着
311	深鉢	XII	口内	C4	口	口:(20.1)	暗7.5YR5/5	暗7.5YR5/1	横方向のナデ・貝殻灰染文	貝殻灰染文	やや密	20m以下の赤色粒を多量含む 10m以下の赤色粒を多量含む 0.5m以下の白色・黒色粒を少量含む	外・スス付着 内・灰化物付着
312	深鉢	XII	口	C5	口	口:(22.4)	赤褐色 5YR4/5	にぶい赤褐色 5YR4/4	貝殻灰染文	貝殻灰染文・ナデ	やや密	50cm以下の赤色・白色粒を多量含む 20m以下の黒色・透明粒を含む	外・スス付着 内・灰化物付着
313	深鉢	XII	口	C3	口	-	暗7.5YR5/5	暗7.5YR4/2	粗いヘラナデか	横方向のナデ・ヘラ ナデ及先欠あり	やや密	20m以下の赤色・灰色粒を少量含む 10m以下の透明粒を多量含む	外・スス付着 灰状口縁の可能 性あり
314	深鉢	XII	口	C3	口	口:(17.0)	明赤褐色 5YR5/5	暗7.5YR5/5	貝殻灰染文	横方向のナデ	やや密	20m以下の赤色・灰色粒を少量含む 20m以下の白色・透明粒を多量含む	外・黒腐
315	浅鉢	XIII	口内	D3	口	-	暗2.5YR5/5	暗7.5YR5/5	ヘラミガキ・4条の捺線文	ミガキ・ヘラミガキ ナデ(先欠あり)	やや密	20m以下の赤色・灰色粒を少量含む 20m以下の白色粒を多量含む 10m以下の透明粒を少量含む	外・内・黒腐
316	深鉢	XIII	口	E3	口	-	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/4	3条の捺線文・ヘラミガキ	ヘラミガキ	やや密	10m以下の赤色・灰色粒を少量含む 20m以下の白色粒を多量含む 1.5m以下の白色粒を多量含む 10m以下の透明粒を多量含む	外・スス付着 内・黒腐
317	深鉢	XIII	口内	F2	口	-	にぶい暗 7.5YR5/4	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁部に捺線文か・ヘラミガキ	丁寧なナデ・ミガキ(は ミガキ・口縁部捺線 に捺線文	やや密	40cm以下の赤色粒を少量含む 20m以下の黒色・透明粒を多量含む 20m以下の白色・灰色粒を含む	灰状口縁 外・スス付着 内・黒腐
318	深鉢	XIII	底	C5	底	径:6.9	暗7.5YR5/5	にぶい黄緑 10YR5/4	ナデ	ナデ・工具ナデ	やや密	20m以下の赤色粒を少量含む 10m以下の赤色・透明粒を少量含む	外・スス付着 上げ
319	深鉢	XIV	口	C4	口	-	暗7.5YR5/5	暗7.5YR5/5	横方向のナデ・黒染文・捺線文	縦方向のナデ・工具 ナデ	やや密	10m以下の赤色粒を少量含む 20m以下の赤色・透明粒を少量含む 20m以下の白色・灰色粒を少量含む 0.5m以下の透明粒を多量含む	外・少量のスス付着 灰状口縁か
320	深鉢	XIV	口	C5 A4	口	-	暗7.5YR4/4	暗7.5YR4/4	縦方向の捺線文・捺線上に 斜向・ナデ	横・斜方向のナデ	やや密	20m以下の白色・透明粒を少量含む 20mの灰色粒を少量含む	外・スス付着
321	深鉢	XIV	口	C4	口	-	明赤褐色 7.5YR5/5	暗7.5YR4/4	波線部部に斜向・横・縦方向の捺線文	横方向のナデ	やや密	20m以下の赤色粒を多量含む 10m以下の透明粒を少量含む	外・スス付着
322	鉢	XIV	口内	C3	口	-	黄褐色 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/4	指頭に捺線部圧痕あり・貝殻灰染文一様方向のナデ	灰状・捺線・捺線文・貝殻灰染文・丁寧なナデ	やや密	20m以下の赤色粒を多量含む	外・スス付着
323	深鉢	XIV	口	A3- 2D5	口	-	明赤褐色 7.5YR5/5	にぶい暗 7.5YR5/6	横方向のナデ一様方向の4条の捺線文	横方向のナデ・貝殻灰染文	やや密	10m以下の白色粒を少量含む 10m以下の透明粒を少量含む	内・黒腐
324	深鉢	XIV	口	A3- 2D5	口	-	暗7.5YR7/6	暗7.5YR7/6	横方向のナデ・捺線部灰文・口唇部に押印あり	横方向のナデ	やや密	50cm以下の赤色粒を少量含む 10m以下の黒色・透明粒を少量含む 20m以下の白色・灰色粒を少量含む	外・スス付着
325	深鉢	XV	胴一 底	C5	口	径:(10.5)	暗7.5YR5/5	暗7.5YR5/5	斜方向の貝殻灰染文・ナデ	縦方向の貝殻灰染文・ナデ	やや密	20m以下の赤色粒を非常に多く含む 40cm以下の白色粒を多量含む 20m以下の赤色・透明粒を少量含む	胴代座 圧痕残6

第15表 縄文時代中・後期土器観察表(7)

No	遺構	分期	部位	出土位置	出土層位	遺物	色別		施文・装飾等		胎土	備考
							外壁	内面	外壁	内面		
326	深鉢	XV	底	C7	Ⅱ	底：(8.65) 内面 灰黄緑 10YR7/3	内面 にぶい黄緑 7.5YR7/4	横方向の工具ナデ・ナデ	ナデ	やや密 やや密 やや密	20m以下の赤色粒を多く含む 18m以下の黒色・白色・透明粒を少量含む 18m以下の赤色・灰色粒を多く含む 18m以下の黒色粒を少量含む	網代瓦
327	深鉢	XV	底	D6	Ⅱ	底：(8.2) 内面 灰黄緑 10YR8/8	内面 灰黄緑 2.5YR7/2	横方向の工具ナデ・横方向のナデ	ナデ	やや密 やや密	18m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の黒色粒を少量含む 2.5m以下の赤色粒を少量含む 1.5m以下の黒色・白色粒を少量含む 20m以下の透明粒を多く含む	網代瓦
328	深鉢	XV	胴一底	C4	Ⅱ	底：(9.3) 内面 埋7.5YR7/6	内面 にぶい黄緑 10YR7/4	横方向のナデ	工具ナデ・指押え	やや密 やや密	20m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の黒色・白色粒を少量含む 20m以下の透明粒を少量含む	内：黒瓦 網代瓦
329	深鉢	XV	胴一底	B4	Ⅱ	底：(11.8) 内面 にぶい黄緑 10YR7/4	内面 にぶい黄緑 10YR7/4	斜方向の貝殻条痕文	斜・横方向の貝殻条痕文・ナデ	やや密 やや密	20m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の黒色・白色・透明粒を少量含む	網代瓦
330	深鉢	XV	胴一底	C4	Ⅱ	底：(10.6) 内面 淡黄緑 10YR8/4	内面 にぶい黄緑 10YR7/3	斜方向の貝殻条痕文	横方向の貝殻条痕文・ナデ	やや密 やや密	20m以下の赤色粒を多く含む 18m以下の黒色・白色・透明粒を少量含む 18m以下の灰色粒を多く含む	網代瓦
331	深鉢	XV	底	C5	Ⅱ	底：(10.8) 内面 にぶい黄緑 10YR7/4	内面 にぶい黄緑 10YR7/4	貝殻条痕文・横方向のナデ	横方向のナデ	やや密 やや密	40m以下の赤色粒を多く含む 18m以下の黒色・透明粒を少量含む 18m以下の白色粒を多く含む	木炭瓦 七丁瓦
332	深鉢	XV	底	C4	Ⅱ	底：(9.6) 内面 埋5YR7/6	内面 にぶい黄 7.5YR7/4	貝殻条痕文・ナデ	ナデ	やや密 やや密	20m以下の赤色粒を多く含む 20m以下の白色粒を多く含む 40m以下の灰色粒を多く含む	木炭瓦
333	深鉢	XV	底	D5	Ⅱ	底：(14.2) 内面 にぶい黄緑 10YR8/3	内面 にぶい黄緑 7.5YR7/4	ナデ・指押え	横方向のナデ	やや密 やや密	1~4cmの赤色粒を多く含む 0.5cm以下の黒色・灰色粒を多く含む 0.5cm以下の透明粒を少量含む	木炭瓦
334	深鉢	XV	底	E4	Ⅱ	底：9.05 内面 にぶい黄緑 5YR7/4	内面 埋5YR8/8	斜・横方向の貝殻条痕文・ナデ	斜・横方向の貝殻条痕文・ナデ・指ナデ	やや密 やや密	40m以下の赤色粒を少量含む 20m以下の白色粒を少量含む 20m以下の赤色粒を多く含む 40m以下の赤色粒を多く含む	内：断面：灰化物付 外：白色物付
335	深鉢	XV	底	C3	Ⅱ	底：(9.0) 内面 明赤焼 10YR8/8	内面 明赤焼 5YR8/8	斜方向の貝殻条痕文・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	やや密 やや密	20m以下の赤色粒を多く含む 20m以下の黒色・灰色粒を少量含む 20m以下の透明・灰色粒を少量含む	やや上げ底
336	深鉢	XV	胴一底	D5	Ⅱ	底：(8.8) 内面 埋5YR8/8	内面 埋5YR8/8	横方向のケズリ状の強い工具ナデ	横方向の貝殻条痕文・横方向のナデ	やや密 やや密	18m以下の赤色・黒色粒を少量含む 20m以下の白色・透明粒を多く含む 20m以下の灰色粒を多く含む	上げ底
337	深鉢	XV	底	D5	Ⅱ	底：10.4 内面 明赤焼 5YR8/8	内面 明赤焼 5YR8/8	ナデ	ナデ・指押え	やや密 やや密	20m以下の白色粒を多く含む 20m以下の赤色粒を少量含む 20m以下の透明粒を少量含む	底：白色物付 やや上げ底
338	深鉢	XV	底	D5	Ⅱ	底：(8.4) 内面 明赤焼 5YR8/8	内面 にぶい黄緑 10YR8/4	丁寧なナデ(光沢あり)・底部に指押え	丁寧なナデ	やや密 やや密	20m以下の灰色粒を多く含む 18m以下の透明粒を少量含む	やや上げ底
339	深鉢	XV	底	A1- C5	Ⅱ	底：(8.8) 内面 明赤焼 5YR8/8	内面 にぶい黄緑 10YR7/3	細いナデ	細いナデ	やや密 やや密	20m以下の白色粒を多く含む 20m以下の赤色・黒色・灰色粒を少量含む 18m以下の透明粒を少量含む	上げ底
340	深鉢	XV	胴一底	D8 E2	Ⅱ	底：(8.3) 内面 明赤焼 5YR8/8	内面 埋5YR8/8	斜方向の工具ナデ(黒化)	ケズリ状の強いナデ	やや密 やや密	18m以下の赤色粒を少量含む 20m以下の白色・透明粒を少量含む 20m以下の赤色粒を多く含む	底：白色物付
341	深鉢	XV	底	F3	Ⅱ	底：7.1 内面 明赤焼 5YR8/8	内面 明赤焼 5YR8/8	斜方向の貝殻条痕文・斜方向の工具ナデ	斜方向の工具ナデ・指ナデ	やや密 やや密	18m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の白色・透明粒を少量含む	外：スス付 内：黒瓦
342	深鉢	XV	底	D2	Ⅱ	底：(10.5) 内面 埋5YR8/6	内面 埋5YR8/6	ナデ(黒化著しい)	ナデ(黒化)	やや密 やや密	20m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の黒色・白色粒を少量含む 18m以下の透明粒を多く含む	底：白色物付
343	深鉢	XV	底	E7	Ⅱ	底：10.2 内面 明焼 7.5YR8/8	内面 灰黄緑 10YR8/2	ケズリ状の細いナデ	ケズリ状の細いナデ	やや密 やや密	18m以下の赤色・黒色粒を少量含む 20m以下の白色粒を少量含む 20m以下の灰色粒を少量含む	
344	深鉢	XV	底	E7	Ⅱ	底：10 内面 にぶい黄緑 10YR8/4	内面 にぶい黄 7.5YR7/4	ケズリ状の強いナデ	斜・横方向の工具ナデ・指ナデ	やや密 やや密	20m以下の赤色粒を少量含む 18m以下の白色粒を多く含む 18m以下の灰色粒を多く含む	外：内：スス付 底層資料7-12
345	付合磁胎土製品	XV	胴台	C5	Ⅱ	- 内面 にぶい黄緑 10YR8/4	内面 にぶい黄 7.5YR7/4	3コナデ・2段の連続刻文	ナデ	やや密 やや密	18m以下の赤色粒を多く含む 20m以下の白色・透明粒を少量含む 20m以下の灰色粒を少量含む	外：黒瓦
346	内面伏土製品	XVI	胴	D3	Ⅱ	- 底層 2.5Y7/4	底層 7.5YR8/4	ナデ一貝殻条痕刻文・黒瓦陶片	ナデ	密	18m以下の赤色粒を少量含む 20m以下の白色・透明粒を少量含む 20m以下の灰色粒を少量含む	底層4.6cm 底層4.3cm 23.9g
347	内面伏土製品	XVI	口	S45	-	- 内面 にぶい黄 7.5YR7/3	内面 灰黄緑 10YR8/2	貝殻条痕文・横方向のナデ	横方向のナデ	やや密	40m以下の赤色粒を少量含む	底層5.1cm 底層4.3cm 28.1g
348	内面伏土製品	XVI	胴	S44	-	- 底層 2.5YR8/1	底層 明赤焼 5YR8/8	貝殻条痕文	貝殻条痕文	やや密	18m以下の赤色・白色粒を少量含む 18m以下の黒色粒を多く含む	底層3.6cm 底層4.4cm 12.7g 灰化物付
349	内面伏土製品	XVI	胴	A48	Ⅱ	- 底層 2.5Y2/2	底層 埋10YR8/4	貝殻条痕文・黒瓦陶片	細い工具ナデ	やや密	18m以下の赤色粒を多く含む 20m以下の黒色粒を少量含む 18m以下の白色粒を少量含む	底層5.8cm、短径 2.5cm、(9.7g) 外：スス付
350	内面伏土製品	XVI	胴	A28	Ⅱ	- 底層 灰黄緑 5YR8/2	底層 明赤焼 5YR8/8	貝殻条痕文・ナデ・黒瓦陶片	ナデ	やや密	18m以下の赤色・透明粒を少量含む 18m以下の白色・灰色粒を少量含む	底層4.6cm、短径 4.3cm、(20.5g) 外：スス付
351	内面伏土製品	XVI	胴	S44	-	- 底層 5YR8/6	底層 7.5YR8/2	貝殻条痕文・ナデ・黒瓦陶片	ナデ	やや密	18m以下の赤色粒を多く含む 18m以下の黒色粒を少量含む 18m以下の透明粒を少量含む	底層4.5cm 短径4.3cm 24.9g

第16表 縄文時代中・後期土器観察表(8)

No.	種類	石材	取り上げ番号	出土位置	出土層位	距離(m)			法量(cm, g)			備考
						X	Y	Z	最大径	最大厚	最大寸	
352	打製石礫	チャート	2739	F3	Ⅱb	-78270.349	51366.965	77.248	(1.2)	(2.2)	(0.2)	一部破損
353	打製石礫	チャート	2461	F3	Ⅱ	-78275.373	51358.447	77.433	(1.4)	(3.3)	0.4	一部破損
354	打製石礫	チャート	749	D7	Ⅱ	-78317.230	51373.972	76.520	(1.9)	1.8	0.4	0.7
355	打製石礫	チャート	1219	D8	Ⅱ	-78291.303	51378.881	76.026	(1.8)	1.4	0.4	0.7
356	打製石礫	チャート	1572	F2	Ⅱ	-78263.842	51357.531	76.112	(2.0)	1.8	0.3	(1.7)
357	打製石礫	チャート	2021	D3	Ⅱa	-78270.604	51376.594	75.309	2.7	1.6	0.5	1.2
358	打製石礫	黒曜石4	937	D6	Ⅱ	-78301.798	51372.302	76.474	(1.0)	(1.2)	(0.3)	鋭形部、一部破損
359	打製石礫	黒曜石4	-	A1区	-	-	-	-	(1.8)	1.3	0.4	0.8
360	打製石礫	黒曜石5	988	D5	Ⅱ	-78293.939	51371.808	76.502	(2.1)	(1.7)	0.6	(1.2)
361	打製石礫	黒曜石5	-	A3-2区	Ⅱ	-	-	-	(2.2)	(1.5)	0.4	1.3
362	打製石礫	黒曜石2	-	A1-3区	Ⅱa	-	-	-	(1.9)	1.4	0.4	0.6
363	打製石礫	チャート	1302	C5	Ⅱ	-78291.949	51360.705	75.916	(1.4)	1.7	0.4	(0.8)
364	打製石礫	チャート	-	A5区	-	-	-	-	(1.6)	(1.7)	(0.3)	一部破損
365	打製石礫	チャート	3482	B4	Ⅱ	-78285.400	51394.030	74.576	2.9	1.7	0.4	0.9
366	打製石礫	チャート	1932	D3	Ⅱa	-78267.936	51369.761	75.763	2.9	2.2	0.5	2.2
367	打製石礫	黒曜石2	3240	C4	Ⅱ	-78261.221	51385.261	74.889	(2.0)	(1.7)	(0.3)	一部破損
368	打製石礫	安山岩	2254	D6	Ⅱ	-78305.038	51370.831	76.461	(2.3)	1.5	0.4	(1.4)
369	打製石礫	チャート	1430	C7	Ⅱ	-78314.193	51382.969	75.972	(1.9)	(1.1)	(0.3)	一部破損
370	打製石礫	チャート	1027	C5	Ⅱ	-78267.686	51378.815	76.025	(2.0)	(1.4)	(0.3)	(0.5)
371	打製石礫	チャート	813	E7	Ⅱ	-78313.276	51368.315	76.647	3.2	2.2	0.7	2.8
372	打製石礫	チャート	3738	C3	Ⅱb	-78275.468	51383.959	74.973	2.0	1.5	0.3	0.6
373	打製石礫	安山岩	1998	C5	Ⅱ	-78296.850	51382.779	75.806	1.8	1.4	0.3	0.6
374	打製石礫	チャート	849	D6	Ⅱ	-78299.282	51376.681	76.719	3.4	1.8	0.4	2.0
375	打製石礫	チャート	3278	C3	Ⅱ	-78272.844	51383.782	75.189	(1.7)	1.5	0.4	0.9
376	石匙	チャート	1229	C3	Ⅱ	-78293.862	51383.252	75.834	2.9	(4.0)	(0.9, 0.3)	黒石礫、一部破損
377	石匙	チャート	3926	D4	Ⅱ	-78286.294	51375.706	76.172	3.4	4.6	0.9	11.5
378	石匙	チャート	-	DH31	-	-	-	-	2.5	3.7	0.6	4.1
379	石匙	チャート	2791	C2	Ⅱa	-78275.185	51383.532	75.110	2.5	2.0	0.8	4.4
380	石匙	チャート	3446	B4	Ⅱa	-78283.890	51397.363	74.221	2.5	3.7	0.6	4.7
381	石匙	玉髄	1075	C6	Ⅱ	-78268.788	51384.271	76.024	(1.7)	(3.0)	0.8	(3.6)
382	石匙	安山岩	6	B4	Ⅱa	-78285.854	51384.330	74.485	3.9	5.1	0.9	14.1
383	石匙	チャート	710	D7	Ⅱ	-78317.766	51370.004	76.690	4.3	1.9	0.7	5.0
384	石鏝	ホルン	480	E6	Ⅱ	-78300.242	51360.032	77.435	10.1	6.6	2.0	164.8
385	石鏝	真硯	3877	C4	Ⅱb	-78280.265	51381.895	76.162	2.8	2.0	0.8	2.0
386	石鏝	チャート	-	A1区	Ⅱ	-	-	-	2.5	1.0	0.5	0.7
387	石鏝	黒曜石2	1787	D2T	Ⅱ	-78266.599	51376.170	75.674	4.4	3.3	1.0	10.3
388	石鏝	瑠璃瓦黄岩	3773	B4	Ⅱ	-78295.716	51396.879	74.259	3.5	4.0	1.3	21.7
389	石鏝	真硯	2255	E6	Ⅱ	-78302.650	51386.395	76.689	11.8	6.3	1.8	99.2
390	石鏝	真硯	-	A4区	-	-	-	-	8.3	5.2	1.4	79.7
391	石鏝	チャート	1603	D3	Ⅱ	-78271.351	51376.391	75.715	2.9	3.1	1.1	19.9
392	石鏝	チャート	1029	B4	Ⅱ	-78265.589	51391.537	74.570	3.9	4.5	1.1	16.2
393	石鏝	ホルン	1126	C5	Ⅱ	-78296.402	51382.551	75.819	(4.2)	(1.6)	0.7	(5.8)
394	打製石斧	砂岩	1928	C5	Ⅱ	-78297.538	51379.816	76.071	12.2	5.9	2.8	219.4
395	打製石斧	砂岩	1448	E3	Ⅱa	-78269.833	51367.370	75.971	11.8	4.9	2.3	146.2
396	打製石斧	砂岩	1930	C5	Ⅱ	-78264.510	51384.755	76.716	11.2	8.1	1.8	124.3
397	打製石斧	砂岩	-	A4区	-	-	-	-	10.4	6.1	2.2	133.8
398	打製石斧	ホルン	-	A2区	Ⅱ	-	-	-	(7.1)	(5.1)	(2.6)	(89.1)
399	打製石斧	砂岩	3878	C4	Ⅱ	-78279.800	51382.526	76.187	(7.0)	5.3	3.2	187.4
400	スクレイパー	真硯	1719	E3	Ⅱ	-78270.031	51369.141	76.821	8.0	7.7	1.1	88.3
401	スクレイパー	ホルン	3748	E2	Ⅱ	-78266.713	51365.461	76.903	8.8	13.1	2.2	177.9
402	スクレイパー	尾節	419	F5	Ⅱ	-78293.045	51385.483	77.650	6.2	8.4	3.0	179.7
403	スクレイパー	チャート	-	D5区	-	-	-	-	5.3	2.4	1.1	8.9
404	線器	尾節	483	F6	Ⅱ	-78303.241	51358.800	77.564	10.8	13.3	4.7	69.0
405	線器	尾節	1242	C6	Ⅱ	-78298.774	51381.895	75.955	8.3	12.1	3.4	222.0
406	線器	尾節	-	A1-4T	-	-	-	-	9.5	7.7	6.0	320.0
407	線器	尾節	2504	E3	Ⅱ	-78271.264	51366.105	77.085	11.8	7.9	6.1	858.0
408	線器	尾節	3237	C4	Ⅱ	-78261.342	51384.608	74.992	12.5	8.3	5.5	920.0
409	線器	砂岩	S94-5-11	S94-5	-	-	-	-	11.1	7.2	3.6	426.0
410	線器	尾節	3225	C4	Ⅱ	-78282.899	51384.795	74.963	10.3	8.0	5.0	739.0
411	線器	砂岩	3751	D8	Ⅱ	-78318.155	51372.830	76.441	18.6	10.8	6.0	1100.0
412	線器	砂岩	-	A2区	Ⅱ	-	-	-	10.1	11.0	3.2	476.0
413	線器	砂岩	199	F5	Ⅱ	-78290.047	51356.264	76.113	9.1	11.1	3.0	382.0
414	線器	砂岩	3803	E7	Ⅱ	-78314.611	51369.071	76.565	10.9	12.5	5.7	852.0
415	線器	砂岩	2262	D3	Ⅱ	-78273.751	51377.630	75.311	8.9	11.2	3.2	399.0
416	線器	砂岩	451	E6	Ⅱ	-78300.339	51360.162	77.338	12.6	11.5	6.7	972.0
417	線器	砂岩	3524	B4	Ⅱ	-78285.280	51390.839	74.691	11.1	13.3	2.8	526.0
418	線器	砂岩	391	C5	Ⅱ	-78290.054	51381.932	75.854	9.6	13.3	2.7	401.0
419	線器	砂岩	1104	C5	Ⅱ	-78299.768	51383.007	76.064	8.6	13.9	4.8	652.0
420	石核	黒曜石3	846	D6	Ⅱ	-78297.865	51372.555	76.554	2.6	2.0	0.1	8.6
421	石核	黒曜石2	1156	E2	Ⅱ	-78283.814	51361.673	76.013	3.7	3.8	2.4	35.2
422	石核	チャート	1440	C5	Ⅱ	-78295.900	51383.110	75.940	4.8	5.0	2.5	71.3
423	石核	瑠璃瓦黄岩	814	B4	Ⅱ	-78286.320	51380.091	77.456	4.5	5.5	2.1	49.8
424	石核	瑠璃瓦黄岩	1175	C5	Ⅱ	-78293.098	51381.518	76.057	5.8	4.6	1.8	41.8
425	石核	瑠璃瓦黄岩	1220	D5	Ⅱ	-78292.707	51378.225	76.088	4.5	3.5	2.3	49.2
426	石核	瑠璃瓦黄岩	1772	D2	Ⅱ	-78265.800	51371.567	75.446	8.9	6.2	3.7	162.2
427	石核	ホルン	-	A2区	-	-	-	-	6.9	7.0	3.3	211.2
428	石核	ホルン	-	D5区	-	-	-	-	5.8	4.5	3.7	76.1
429	石核	ホルン	3249	C4	Ⅱ	-78279.536	51386.317	74.871	4.7	8.9	4.9	198.5
430	石核	ホルン	2140	E2	Ⅱ	-78264.240	51360.602	75.957	12.7	11.3	5.6	760.0
431	石核	砂岩	1310	D5	Ⅱ	-78290.838	51378.467	76.017	11.6	8.9	3.0	449.0
432	石核	砂岩	1777	D4	Ⅱ	-78286.041	51374.904	75.830	10.5	8.6	4.4	334.0
433	石核	砂岩	2998	E4	Ⅱ	-78283.407	51366.244	76.871	8.9	6.9	2.7	153.8
434	石核	尾節	-	A1-2区	-	-	-	-	10.4	7.6	6.6	482.0
435	石核	尾節	503	E7	Ⅱ	-78308.165	51360.173	77.482	18.0	13.2	8.8	1700.0

第17表 縄文時代中・後期石器計測表(1)

No.	器種	石材	取り上げ番号	出土位置	出土層位	座標(m)			流量(cm, g)				備考
						X	Y	Z	最大長	最大幅	最大厚	重量	
521	石鏃	砂岩	1325	C5	Ⅲ	-78294.732	51382.883	75.882	4.50	5.50	1.5	47.8	
522	石鏃	砂岩	3955	D4	Ⅲ	-78265.661	51372.661	76.365	4.65	6.0	1.25	46.4	
523	石鏃	砂岩	1187	D3	Ⅲb	-78266.599	51370.170	75.674	3.75	7.1	1.3	59.6	
524	石鏃	砂岩	2189	E2	Ⅲb	-78261.288	51362.301	75.779	4.3	6.05	1.26	66.9	
525	石鏃	砂岩	3291	C3	Ⅲb	-78277.355	51365.631	75.043	(4.4)	4.5	2.2	(54.7)	一部破損
526	石鏃	珪質頁岩	2183	C3	Ⅲa	-78275.874	51366.478	75.610	(4.7)	3.85	2.08	(62.2)	一部破損
527	石鏃	尾節2	759	D7	Ⅲ	-78214.358	51371.454	76.579	4.5	7.15	1.8	62.1	
528	石鏃	砂岩	3956	D4	Ⅲ	-78265.355	51371.917	76.448	5.95	6.6	1.05	68.1	
529	石鏃	砂岩	1143	C5	Ⅲ	-78268.031	51383.825	75.824	6.7	8.0	1.45	111.2	
530	石鏃	砂岩	755	D7	Ⅲ	-78213.773	51372.581	76.474	7.65	8.8	1.85	193.5	
531	石鏃	珪質頁岩	3727	C3	Ⅲb	-78277.073	51360.492	75.139	5.5	9.6	2.15	173.7	
532	石鏃	尾節1	779	D7	Ⅲ	-78212.712	51372.832	76.357	7.3	9.7	2.8	289.0	
533	石鏃	尾節2	1234	C5	Ⅲ	-78295.969	51382.126	75.936	8.8	9.8	2.2	258.4	
534	石鏃	砂岩	3296	C3	Ⅲb	-78274.504	51360.040	75.190	4.0	11.7	2.23	156.6	
535	石鏃	砂岩	-	A4E	-	-	-	-	5.8	6.5	1.4	63.7	
536	石鏃	砂岩	-	調査区一帯	-	-	-	-	3.65	4.55	1.5	38.0	
537	石鏃	ホルン	788	D7	Ⅲ	-78211.472	51371.148	76.313	4.25	7.4	1.9	88.0	
538	石鏃	砂岩	1141	C5	Ⅲ	-78295.430	51383.121	75.892	5.2	5.6	1.6	72.4	
539	石鏃	砂岩	2278	D3	Ⅲa	-78270.373	51374.334	75.324	6.35	7.1	1.6	96.5	
540	石鏃	砂岩	-	A4E	Ⅱ	-	-	-	5.08	7.8	1.8	112.8	
541	石鏃	砂岩	3782	C3	Ⅲb	-78276.530	51381.662	75.140	6.7	7.45	2.3	170.6	
542	石鏃	尾節2	3831	C4	Ⅲ	-78281.836	51382.611	74.973	15.8	14.4	11.0	3594.3	
543	磨石	尾節1	1408	C8	Ⅲ	-78205.371	51383.810	75.974	9.45	8.9	3.8	481.5	
544	磨石	尾節1	4091	C5	Ⅲ	-78294.893	51384.734	75.647	11.7	10.3	3.95	718.8	
545	磨石	尾節1	3200	C4	Ⅲb	-78275.655	51383.112	75.112	8.6	7.85	4.0	628.1	
546	磨石	尾節1	3558	C4	Ⅲa	-78276.330	51381.818	76.138	10.2	10.0	4.8	711.8	
547	磨石	尾節2	3323	D3	Ⅲa	-78276.696	51376.201	75.286	10.55	8.9	4.5	704.3	
548	磨石	尾節1	1066	C6	Ⅲ	-78301.049	51379.833	76.053	11.2	10.45	5.2	1006.1	磨化
549	磨石	尾節1	5131	F7	Ⅲ	-78340.370	51360.030	76.807	13.8	11.8	6.2	1436.2	
550	磨・敲石	尾節1	3804	C4	Ⅲb	-78281.687	51386.309	74.710	12.1	11.0	5.7	1207.0	
551	磨・敲石	尾節2	3698	C4	Ⅲb	-78276.310	51381.790	75.129	12.0	10.4	4.9	990.2	
552	磨石	砂岩	2188	F2	Ⅲ	-78260.461	51354.115	76.200	14.35	8.15	4.5	825.5	
553	磨石	砂岩	2898	C4	Ⅲb	-78277.311	51381.792	75.143	12.7	8.8	5.8	878.6	
554	磨石	尾節2	2559	E4	Ⅲ	-78276.742	51365.181	77.282	13.2	7.6	5.1	788.5	
555	磨石	尾節1	3714	C3	Ⅲb	-78277.855	51380.886	75.165	13.5	8.4	5.6	879.2	
556	磨石	尾節1	2923	C4	Ⅲa	-78281.588	51381.652	75.265	-	-	-	-	
556	磨石	尾節1	3331	C4	Ⅲa	-78290.874	51376.736	76.311	13.5	8.55	5.3	742.3	スズ付磨 4点の磨合
			-	A3	-	-	-	-	-	-	-	-	
557	磨石	尾節2	3052	F3	Ⅲb	-78270.225	51365.535	77.268	12.3	7.0	5.0	721.9	
558	磨石	砂岩	3123	C3	Ⅲb	-78272.693	51381.827	75.078	10.9	9.4	4.6	722.2	
559	磨石	尾節1	3697	E4	Ⅲ	-78279.013	51359.763	77.280	10.5	9.2	4.0	601.8	
560	磨石	尾節2	3571	C4	Ⅲb	-78281.198	51382.811	75.053	11.05	8.9	3.9	640.4	
561	磨石	尾節2	3891	C3	Ⅲb	-78277.030	51382.081	76.132	11.8	9.4	4.0	737.8	
562	敲石	砂岩	455	F6	Ⅲa	-78304.069	51358.582	77.546	9.25	7.1	3.2	328.1	
563	敲石	砂岩	-	S149	-	-	-	-	7.65	6.25	3.4	247.6	
564	敲石	チャート	1012	C8	Ⅲ	-78298.697	51383.464	75.837	6.45	7.15	3.4	221.8	
565	敲石	チャート	475	E6	Ⅲ	-78302.038	51359.234	77.419	6.25	7.5	3.3	215.0	
566	敲石	ホルン	477	E6	Ⅲ	-78302.275	51359.614	77.419	8.25	7.1	4.0	202.2	
567	敲石	チャート	1225	C6	Ⅲ	-78298.024	51384.008	75.800	5.5	5.4	4.1	177.5	
568	敲石	頁岩	2549	S4	Ⅲ	-78283.378	51391.355	74.729	8.0	4.6	1.95	44.3	
569	敲石	SAC-23	-	S42	Ⅲ	-78312.985	51372.273	76.273	5.85	8.4	4.25	205.5	
570	敲石	砂岩	2714	E4	Ⅲb	-78278.283	51362.183	77.369	7.35	12.7	5.5	208.5	
571	敲石	砂岩	-	A3	Ⅲ	-	-	-	9.30	5.50	1.9	158.9	
572	敲石	砂岩	2539	E4	Ⅲ	-78284.125	51367.822	76.831	14.4	8.4	2.4	401.9	
573	敲石	砂岩	2442	F4	Ⅲ	-78281.903	51356.291	77.692	21.05	9.1	6.9	1326.2	
574	台石	尾節2	4003	C4	Ⅲ	-78284.179	51385.880	74.763	28.1	28.75	7.2	10000.0	
575	台石	尾節2	783	D7	Ⅲ	-78210.245	51373.302	76.382	18.8	20.6	8.85	5386.5	
576	台石	尾節1	2386	C3	Ⅲb	-78272.590	51380.658	75.198	26.15	15.7	6.9	4786.8	
577	台石	尾節2	214	E2	Ⅲ	-78318.994	51361.837	77.403	22.3	19.75	8.7	4635.5	
578	台石	尾節1	-	C4	Ⅲ	-	-	-	28.79	24.4	6.2	9000.0	
579	台石	尾節2	1052	C8	Ⅲ	-78299.879	51382.489	75.889	23.7	23.8	8.0	7300.0	
580	台石	尾節1	3703	C4	Ⅲ	-78279.426	51385.511	74.804	33.7	20.4	4.4	4222.4	

第19表 縄文時代中・後期石器計測表(3)

第7節

弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構と遺物 遺構

当該期の遺構としてはIVb層上面で堅穴建物跡を1軒検出した。遺構の検出を行った結果、この他に多数のピットを検出したが、複数の時代の遺構が混在している可能性が高く、出土した遺物から当該期の遺構と認定できるものも存在するが、配置や埋土分類から検討を加えたものの掘立柱建物跡などの検出には至らなかった。

SA1 (第64図)

C7・D7Gr.に位置し、II層直下のIVb層上面で検出した。弥生時代後期の堅穴建物跡である。現代の水田造成に伴う削平の結果、残存状況は非常に悪くほぼ床面直上で検出することとなった。このため、遺構の正確な形状はつかめなかったが、長軸約3.3m、短軸約2.0m+αの隅丸長方形を基本として、北と東側に長方形の張り出しが確認でき、西側にも有していたと思われる。張り出し部を含めた床面積は8.5㎡である。床面は明確な貼床は存在せず、やや強くしめる状態であった。床面でピットを10基検出し、このうち4基(P1～P4)は主柱穴である。床面からの掘り込み深度は20～30cmでそれぞれの間隔は1m40cm程度である。このような特徴から、堅穴住居としての機能があった可能性が高いと判断した。

遺物は全て床面直上から出土したものであり、弥生時代後期の土器片と、炭化材を3点検出した。581は甕である。口径と胴部最大径がほぼ同径で、全体に締まりがなく、頸部も明瞭な稜がない。口縁部は外反気味で、胴部上半から口縁部に煤の付着が目立つ。また、炭化材については樹種同定の結果、スダジイと判明し当時の住居に用いられた建材である可能性が高い。このことから、SA1は焼失住居と判断している。

SH234 (第64図)

C6Gr.に位置する。IVb層上面で検出した。長軸36cmの隅丸形状のプランで、深さは32cmである。埋土は2層に分かれ、柱痕跡状を呈すが周囲に関連する柱穴らしき掘り込みは確認できなかった。また、埋土の上

部から582と583が重なるように出土しており、埋土の堆積状況から遺構に伴うものと判断した。この土器の形式から弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての遺構と考えられる。

582は甕である。口縁部が直立気味で、頸部が弱く屈曲する。底部は平底である。外面は丁寧なナデ調整を行っており、僅かにその単位が確認できる程度である。また、頸部から胴部にかけて煤の付着が看取される。内面は指や工具で調整し、特に頸部から胴部にかけては斜方向に強い指ナデが見られる。583は鉢である。胴部が丸く球形で、底部は丸底である。頸部内面には、口縁との明瞭な稜線を持ち、口縁部はやや上方になるにつれ肥厚する。胴部から胴部最大径にかけて器壁は薄く、胎土は全体にぶい橙色を呈す。

遺物

III層中から出土した遺物を掲載する。土器の器種は甕が最も多く、鉢、高杯、長頸甕が確認された。なお、石器については当該期の遺物と判断できる資料のみ掲載した。

土器 (第65図584～608)

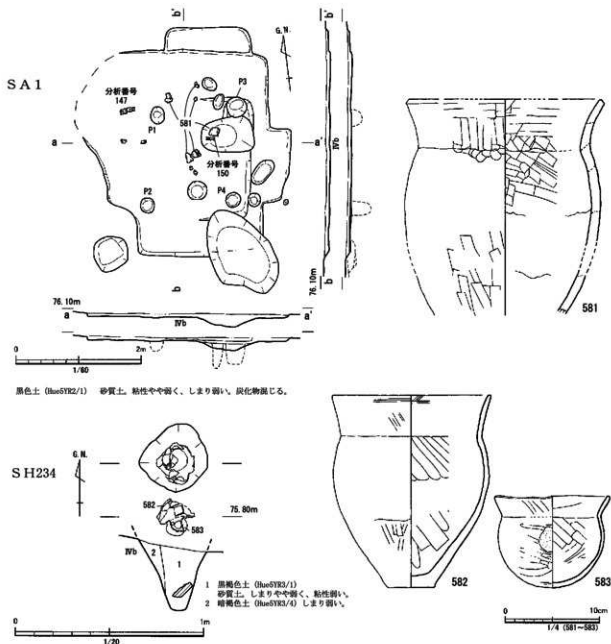
584の胎土は白色を呈す。外面の頸部直下には斜方向の刺突文が連続する。585は甕の口縁部であり、口縁部を強いナデで整形している。586はやや外反する口縁部で、先端部に向けて肥厚する。587は頸部がやや狭まり、口縁部全体に内湾気味に立ち上がり、口縁部の先端が尖る。588は口径よりやや胴部最大径が大きく頸部で締まり、口縁部は外上方へ丸みを持って広がる。外面調整は幅の太い単位のタクキではあるが、胴部から頸部まで細かく丹念に整形している。器壁はやや薄く、内面は横方向の工具ナデが施されている。589は口縁部が直線的に立ち上がる。内外面ともに工具ナデ調整である。590は、外面胴部上半に煤が付着する。底部は分厚くやや丸みを帯びるが、小さな平底である。589の胎土と似ており、同一個体の可能性がある。591・592はやや上げ底ぎみの底部で、外面の底や立ち上がり部分に指押さえがみられる。593の底部は平底であるが、やや膨らむ。594は平底の底部である。底部に明瞭な稜線があり、外上方へ胴部が開く。595

は底部の底の粘土を下から押し上げ、胴下半の外側と接合する。胎土は砂粒が少なく緻密である。596～598は平底で角張り、胴部が上へ向け開く器形で器壁が全体的に厚い。調整は工具ナデが主体である。599は598と似るが、胴部の器壁はやや薄く丸みを帯びる。600の胎土は薄い橙色を呈し、緻密である。免田式長頸壺の肩部上半の破片である。二重または複数の沈線の間を、半円状の重弧文が上下に等間隔に隙間なく描かれている。601は口縁部に丁寧な指ナデが確認できる。やや上方へ広がる口縁部である。602は短頸壺である。口縁部が短く、肩部は大きく広がりが器壁は厚い。603は鉢である。口径より胴部最大径が小さい扁平球で、口縁部は頸部で屈曲し上方へ開く。604の高杯の杯部

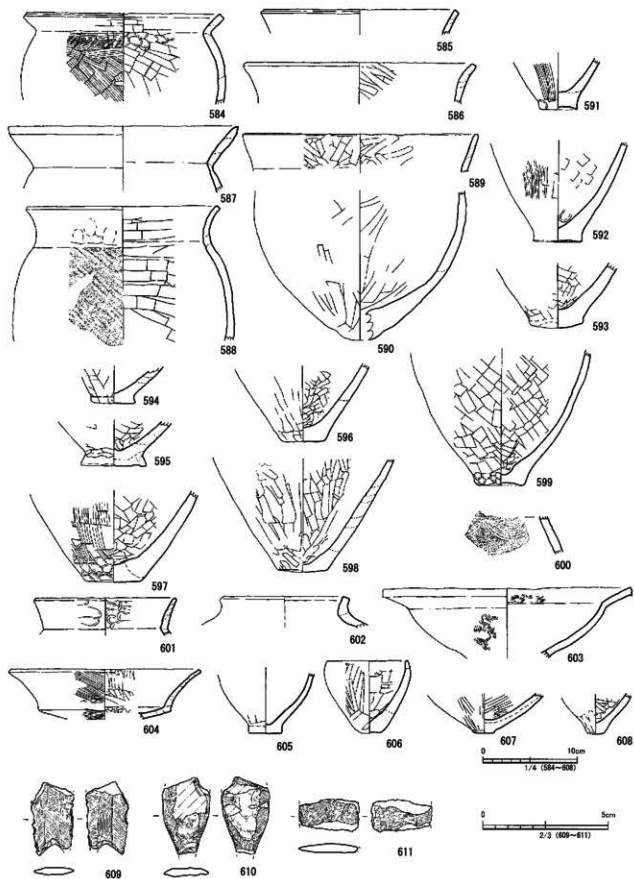
密で外面に丁寧なハケが施される。605は底部と胴部が明瞭に分かれる。606は小型の鉢で、胎土は橙色を呈す。全体を工具ナデで整形する。口縁は内湾気味で、やや丸みのある平底である。607は鉢の胴部から底部で、底部は径の小さい平底となる。608は底部が小さく厚い。607より全体に底部が狭く胴部径は小さい。胎土は橙色を呈す。

磨製石鏃 (第65図609～611)

3点出土し、全て図化した。いずれも頁岩製で、破損が見られる。610は緑色頁岩製で、先端が欠損する。丁寧な研磨により表・裏面に稜が見られる。やや浅い挟りを持つ。610・611は筋理の明瞭な褐色の頁岩製で



第64図 弥生時代後期～古墳時代初頭遺構及び出土遺物実測図 SA 1・SH 234



第65図 弥生時代後期～古墳時代初頭遺物実測図

No	器種	種別	部位	出土位置	出土層位	高さ (cm)	色別		器型		土質		状況	備考
							外周	内周	外周	内周	土質			
561	弥生 炊飯器	口→胴	SA1	-	口.(20.2)	にぶい黄緑 10YR6/4	暗灰黄 2.5Y5/2	工具ナデ・指押さえ・ナデ	工具ナデ・ナデ	やや中	5cm以下の白色粒を多く含む 2cm以下の灰白色を多く含む 1cm以下の透明・黒色粒を少量含む	良好	外・ス入付器	
562	弥生 炊飯器	口→底	C5	口.(14.4) 底.5.0 高.19.1	にぶい黄緑 2.5YR6/4	にぶい黄緑 10YR6/4	ナデ	ナデ・工具ナデ	やや中	7cm以下の白色粒を多く含む 5cm以下の灰白色を多く含む	良好	外・ス入付器 接合痕		
563	弥生 炊飯器	口→底	C5	口.(11.85) 底.5.75 高.5.75	にぶい黄緑 2.5YR6/4	暗2.5YR7/6	工具ナデ	工具ナデ	やや中	3cm以下の赤色・黒色粒を少量含む 3cm以下の白色・灰色・透明粒を微量に含む	良好	外・内 黒煎 黒成磁器		
564	弥生 炊飯器	口→胴	C5	口.(20.4)	にぶい黄緑 10YR7/3	淡黄緑 10YR8/4	工具ナデ ハケ→割取ス	工具ナデ 指ナデ・指押さえ	やや中	5cm以下の赤色粒・灰色粒を多く含む 2cm以下の白色粒を少量含む	良好	外・ス入付器		
565	弥生 炊飯器	口	C4	口.(20.2)	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/4	横ナデ	横ナデ	やや中	3cm以下の赤色粒を少量含む 1cm以下の黒色・白色・透明粒を微量に含む	良好			
566	弥生 炊飯器 →古墳 炊飯器	口	A1-3 区	口.(24.8)	暗2.5YR6/6	暗2.5YR6/6	ナデ	工具ナデ	やや中	1.5cm以下の赤色・黒色・灰色粒を微量に含む 1.5cm以下の白色粒・白色粒を少量含む	良好	外・ス入付器 弥生終末→古墳 初期		
567	弥生 炊飯器 →古墳 炊飯器	口→胴	C4	口.(24.2)	明黄緑 5YR6/6	明黄緑 10YR6/6	工具ナデ・ナデ	工具ナデ	やや中	2cm以下の白色粒・灰色粒を多く含む 1cm以下の透明・赤色粒を少量含む	良好			
568	弥生 炊飯器	口→胴	C4	口.(20.2)	にぶい黄緑 10YR7/4	淡黄緑 10YR8/4	工具によるナデ・斜方向の少ナ	工具による少ナ	やや中	4cm以下の赤色粒を多く含む 1cm以下の黒色・透明粒を微量に含む 3cm以下の白色・灰色粒を少量含む	良好	外・ス入付器 弥生終末→古墳 初期		
569	弥生 炊飯器	口	A1-3 区	口.(24.4)	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/4	工具ナデ	工具ナデ	やや中	3.5cm以下の赤色粒を少量含む 0.5cm以下の赤色粒を微量に含む 2cm以下の白色粒を少量含む	良好	外・黒煎 弥生末期		
570	弥生 炊飯器	胴	C3	口 -	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/4	工具ナデ	工具ナデ	やや中	4cm以下の赤色・灰色粒を少量含む 7cm以下の白色粒を多く含む 1cm以下の透明粒を微量に含む	良好	外・黒煎 弥生末期		
571	弥生 炊飯器	胴→底	F4	口.3.7	にぶい黄 2.5Y6/4	黒煎2.5Y2/3	ハケ・指押さえ・ナデ	ナデ・指押さえ	やや中	2cm以下の黒色・白色粒を少量含む 1cm以下の透明粒を多く含む	良好	内・黒煎 弥生後期後半		
572	弥生 炊飯器	胴→底	B4	口.(5.0)	明黄緑 10YR7/6	にぶい黄緑 10YR7/3	工具ナデ・指押さえ・ナデ	工具による少ナ	やや中	3cm以下の白色・灰色粒を少量含む 1cm以下の透明粒を多く含む	良好	外・黒煎 弥生後期		
573	弥生 炊飯器	胴→底	C4	口.(5.4)	淡黄2.5Y6/4	淡黄2.5Y7/3	工具ナデ・ナデ	工具ナデ	やや中	3cm以下の白色粒・灰色粒を多く含む 2cm以下の赤色・透明粒を少量含む	良好	外・黒煎 弥生後期		
574	弥生 炊飯器	底	B4	口.4.8	にぶい黄緑 10YR6/4	にぶい黄 2.5Y5/3	工具ナデ	工具ナデ	良好	2cm以下の黒色・灰色粒を少量含む 6cm以下の白色粒を多く含む 1.5cm以下の透明粒を微量に含む	良好	外・黒煎 弥生後期		
575	弥生 炊飯器	胴→底	B4	口.(7.0)	にぶい黄緑 2.5YR6/4	黄灰2.5Y4/1	工具ナデ・ナデ	工具ナデ・指押さえ	やや中	3cm以下の白色粒を多く含む 1cm以下の灰色粒を少量含む 2cm以下の赤色粒を微量に含む	良好	接合痕あり 弥生後期		
576	弥生 炊飯器	胴→底	B4	口.4.8	にぶい黄緑 10YR6/4	にぶい黄 2.5Y5/3	工具ナデ	工具ナデ	やや中	3cm以下の赤色・黒色粒を少量含む 2.5cm以下の白色粒を多く含む 4cm以下の灰白色を少量含む	良好	外・内 黒煎 弥生後期 注底資料14		
577	弥生 炊飯器	胴→底	A→E7	口.(8.0)	にぶい黄緑 2.5YR6/4	暗2.5YR6/6	ハケ(工具)ナデ・指押さえ・指ナデ	工具ナデ	やや中	7cm以下の白色粒を多く含む 2cm以下の黒色・灰色・透明粒を少量含む	良好	弥生後期 注底資料15		
578	弥生 炊飯器	胴→底	C4	口.(5.4)	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/3	工具ナデ	工具ナデ	やや中	5cm以下の赤色粒を微量に含む 1.5cm以下の黒色粒を微量に含む 3cm以下の白色・灰色粒を少量含む	良好	外・内 黒煎 弥生後期		
579	弥生 炊飯器	胴→底	A1-3 区	口.(4.8)	淡黄2.5Y6/4	淡黄2.5Y6/2	工具ナデ・指ナデ・指押さえ・ナデ	工具ナデ・指押さえ	やや中	4cm以下の白色・赤色粒を多く含む 7cm以下の灰色粒を多く含む 1cm以下の透明粒を少量含む	良好	弥生後期後半		
600	弥生 炊飯器	胴	C5	-	暗2.5YR7/6	にぶい黄緑 10YR7/4	黄灰黄 10YR7/4	黄灰黄	ナデ?	やや中	0.5cm以下の赤色・黒色粒を少量含む 2cm以下の灰色・透明粒を微量に含む	良好	弥生後期 注底資料16	
601	弥生 炊飯器	口	C3	口.(14.8)	にぶい黄緑 10YR6/4	にぶい黄緑 10YR6/4	指ナデ	指ナデ	やや中	1cm以下の赤色・黒色・白色粒を微量に含む 1.5cm以下の灰色・透明粒を微量に含む	良好	弥生後期		
602	弥生 炊飯器	口	C6	口.(12.5)	にぶい黄緑 10YR6/4	にぶい黄緑 10YR6/3	ナデ	ナデ	やや中	3cm以下の白色粒を少量含む 1cm以下の灰色粒を微量に含む	良好	外・内 黒煎 口(注底資料)		
603	弥生 炊飯器?	口→林	B4	口.(26.1)	明黄緑 10YR6/6	暗2.5YR7/6	工具ナデ→縦2.5Y7/6	工具ナデ→3Y7/6	やや中	5cm以下の赤色粒を多く含む 1cm以下の黒色・灰色粒を少量含む 3cm以下の白色粒を少量含む	良好	外・内 黒煎 注底資料14		
604	高坪 炊飯器	坪	C3	口.(19.8)	にぶい黄緑 10YR6/3	暗黄緑 10YR5/2	ハケ目	工具ナデ	やや中	0.5cm以下の赤色粒を微量に含む 1cm以下の白色粒を少量含む	良好	弥生後期		
605	弥生 炊飯器	胴→底	B4	口.(3.8)	にぶい黄緑 10YR7/4	淡黄2.5Y7/4	ナデ・工具成・横ナデ	横ナデ・指押さえ	やや中	1cm以下の透明・黒色粒を多く含む 1→2cmの白色粒を少量含む	良好	内・黒煎 弥生後期		
606	弥生 炊飯器	口→底	E2	口.(8.55) 底.2.05 高.(7.85)	暗2.5YR6/6	にぶい黄緑 2.5YR6/4	工具ナデ	工具ナデ	やや中	1cm以下の赤色・黒色・透明粒を少量含む 3cm以下の白色粒を多く含む	良好	外・黒煎 弥生後期		
607	漢 鉢	胴→底	C4	口.2.3	淡黄緑 10YR6/4	にぶい黄緑 10YR7/4	E7ナデ	E7ナデ	良好	2cm以下の赤色・黒色・白色粒を少量含む 1cm以下の灰色粒を少量含む	良好	外・ス入付器 弥生後期		
608	弥生 炊飯器	胴→底	G5	口.1.9	暗2.5YR6/6	にぶい黄緑 10YR5/3	ナデ	工具ナデ	やや中	4cm以下の黒色・白色粒を少量含む 2cm以下の灰色・透明粒を多く含む	良好	弥生後期		

第20表 弥生→古墳時代土器観察表

No	器種	石材	取り上げ番号	出土位置	厚 (mm)			長さ (cm)			備考		
					X	Y	Z	最大長	最大幅	重量			
								最大	最大				
609	磨製石器	磨製片岩	1650	D2	8a	-7826.503	81373.219	75.560	(2.8)	(1.7)	(0.3)	(1.7)	片岩埋込
610	磨製石器	頁岩	3307	C3	8b	-78275.181	81379.258	75.129	(2.0)	(1.9)	(0.5)	(2.8)	有蓋
611	磨製石器	頁岩	-	A3-3区	8a	-	-	-	(1.5)	(2.4)	(0.5)	(1.2)	

第21表 弥生→古墳時代石器計測表

第8節 その他の遺物

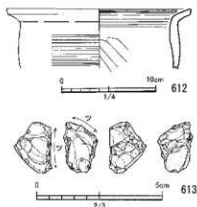
古墳時代以降の遺構は確認できなかったが、古代～近世までの土器片が出土した。これらの土器片は出土した遺物の割合の中では極めて少量であるため、紛れ込みである可能性は否定できない。

当該期の遺物は土器1点、石器1点のみを図化した(第66図)。このため、文書中に見所見を書き記し、観察表は掲載していない。

612は古代の甕である。口縁部から頸部までの資料である。土器外面の口縁から頸部にかけては丁寧な横ナデで調整し、胴部は横方向または斜方向のハケ目が見られる。内面胴部はヘラ削りである。

613はチャート製の火打石で白～灰色を呈す。重量4.0gであり、石器の角や縁辺端部に複数箇所が潰れが見られる。

その他、中世の土師器が少量出土した。残存部位は底部片であり、糸切り痕が確認できる資料もあるが、全体の器形は不明であるため詳細な時期については不明である。また、近世陶磁器片については播鉢、唐津焼、青磁碗などが僅かに出土しているが、いずれも小片のものばかりであった。これらはI層及びII層から出土したものであり、現代において繰り返し耕作が行われた結果、小片化したものと考えられる。



第66図 その他の遺物実測図

第9節 植物遺体の分析

1 フローテーション作業について

III層を掘削する過程で、F4Gr.周辺において2cm程度の炭化した種実が多量に出土する範囲(以下、集中区とする)があることが判明した。当初は、これらの遺物が貯蔵穴などの遺構に伴うものと考えていたが、周辺を精査した結果、遺構らしき掘り込みを確認することが出来なかった。この集中区において、より微細な種実が存在した場合、通常の掘削方法では回収することが出来ないため、包含層の土を採集しフローテーション作業を行うこととした。

資料の採集については、F4のグリッド杭を中心として周辺を1m四方の小グリッドに分割し行った(第67図)。土量は1グリッドに対し、おおそコンテナ1箱分を調査することとした。しかし、この集中区が確認された場所については現地形で宅地であったため、一部の遺物包含層に削平がみられ、また部分的にトレンチ状の攪乱を受けていた。このため、採集した土量は一定ではない。

また、第6節で報告したように、SA2、SA3の埋土内及びその周辺(A3-2集中区)でも炭化種実が確認されていることから、植物遺体の回収を目的としてフローテーション作業を実施した。なお、遺構内埋土においては炭化種実が出土した層位や、床面直上の層を中心に資料を採集している。

以下、フローテーション作業手順を記す。なお、採集土量と作業結果については、第22表を参照されたい。

作業手順

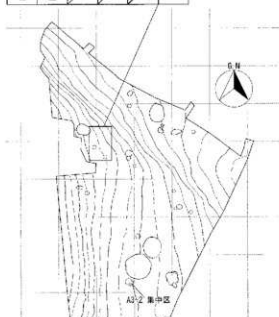
- ①移植ゴテを使用し1グリッドごとに採取。異なるサンプルを採取する場合は、コンタミネーションを起こさぬよう使用した道具をその都度水洗した。また、金属以外の道具や素手で作業を行わぬよう心がけた。
- ②資料を風通しの良い場所に安置し乾燥させる。
- ③乾燥後、土量の計測を行う。
- ④フローテーションマシン(2mm・1mm・0.425mmの金属製メッシュ)を使用して土を水洗し、遺物及び残渣を回収する。
- ⑤センターに持ち帰り乾燥させる。
- ⑥金属製メッシュ(0.1mm・0.425mm)で軽く篩に掛け、

資料を3つに分けた後、土器・石器・炭化物に選別（一次選別）し、砂粒については廃棄する。

- ⑦一次選別した資料の中で炭化物については実体顕微鏡を用いて種実及びその可能性が高いものと、それ以外（木片など）に選別（二次選別）する。

作業の結果

一連の作業の結果得られた遺物は、炭化種実、炭化材、チップ、土器片などである。特に炭化種実は8～13mm程度の比較的大型のものが多く、堅果類の子葉であろうと推定した。土器片については小片資料が多く、また摩滅が激しいため、詳細な時期については不明である。なお、堅穴建物跡から採集した資料からも同様の結果を得られた。



第67図 F4Gr. 周辺土壌サンプリング箇所

資料名	土量 (kg)	層	出土遺物			自然科学分析		備考
			土器片	陶器片	炭化物	方法	番号番号	
F4-1	2.75	Ⅲ	-	黒曜石2・チャート	○	種実	123	
F4-2	3.35	Ⅲ	-	黒曜石2	○	種実	124	
F4-3	3.10	Ⅲ	-	チャート	○	-	-	
F4-4	3.85	Ⅲ	-	-	○	-	-	
F4-5	4.60	Ⅲ	-	珪質頁岩	○	種実	125	
F4-6	未実施	-	-	-	-	-	-	コンタミネーションの可能性があるため廃棄
F4-7	3.00	Ⅲ	-	-	○	-	-	
F4-8	5.80	Ⅲ	○	-	○	-	-	
F4-9	3.65	Ⅲ	-	チャート	○	種実	128	
F4-10	5.25	Ⅲ	○	黒曜石2	○	種実	127	
F4-11	4.50	Ⅲ	-	安山岩、玉髄	-	-	-	
F4-12	3.80	Ⅲ	○	-	○	種実	129	
F4-13	2.70	Ⅲ	-	珪質頁岩	○	種実	130	
F4-14	5.00	Ⅲ	-	黒曜石	○	種実	131	
F4-15	7.70	Ⅲ	-	-	○	種実	132	
F4-16	7.00	Ⅲ	-	チャート	○	種実	133	
F4-17	3.35	Ⅲ	-	黒曜石	○	種実	-	
F4-18	4.75	Ⅲ	-	-	○	種実	134	
F4-19	4.10	Ⅲ	-	-	○	種実	135	
F4-20	6.35	Ⅲ	○	-	○	種実	136	
F4-21	5.40	Ⅲ	○	珪質頁岩	○	種実	137	
F4-22	3.78	Ⅲ	-	チャート	-	-	-	
F4-23	4.35	Ⅲ	-	チャート	○	種実	138	
F4-24	3.45	Ⅲ	-	黒曜石2, チャート	○	種実	139	
F4-25	3.05	Ⅲ	-	-	○	種実	140	
F4-26	未実施	-	-	-	-	-	-	コンタミネーションの可能性があるため廃棄
F4-27	3.25	Ⅲ	○	-	○	種実	141	
F4-28	5.05	Ⅲ	○	-	○	種実	142	
F4-29	未実施	-	-	-	-	-	-	コンタミネーションの可能性があるため廃棄
F4-30	3.70	Ⅲ	-	-	○	種実	143	
F4-31	1.95	Ⅲ	-	-	○	-	-	
F4-32	2.15	Ⅲ	-	-	○	種実	144	
F4-33	3.00	Ⅲ	-	-	○	種実	145	
F4-34	4.00	Ⅲ	-	チャート	○	-	-	
F4-35	3.15	Ⅲ	-	チャート	○	種実	146	
A2 Ⅱ中區	31.70	Ⅲ	-	珪質頁岩	○	種実	117	
SA3-NE	4.23	Ⅰ	○	黒曜石1, チャート	-	種実	99~100	
SA3-E	4.00	Ⅰ	-	チャート	-	種実	101	
SA2 a	3.90	-	-	-	-	種実	94	
SA4 Ⅱ上	3.20	Ⅱ	-	-	-	種実・年代測定	102~103	
A3-2 Ⅱ中區	35.90	Ⅲ	○	黒曜石1, チャート	-	種実	118~122	
SA3 a	6.15	2	-	-	-	種実	95	
SA3 b	6.15	2	-	石英, チャート	-	種実	96	
SA3 c	9.65	2	-	安山岩, チャート	-	種実	97	
SA3 d	7.50	2	○	-	-	種実	98	
A1-36	35.20	Ⅲ	○	黒曜石2, チャート	○	種実	116	

第22表 フローレーション作業結果一覧表

2 自然科学分析の結果

前述のとおり、発掘調査において炭化した堅果類と思われる遺物を多数回収した。そして、これらの遺物は出土状況から当遺跡の主体時期である縄文時代後期に存在した遺構に伴う可能性が高いと判断できる。であるとすれば、当時の植物質食料に関わる重要な資料となりうる。そこで、種実同定による遺物の分類、あるいは科学的な分析によって、より具体的な遺物の性格を把握することを目的に分析を実施した。また、SA1・SA2・SA3の埋土中から出土した炭化材は堅穴住居跡の建材である可能性を考慮し、樹種同定を実施した。

各分析に使用した資料及び分析方法・結果等については下記のとおりである。

(1) 試料

種実同定試料は、堅穴建物跡(SA1~5)、集石遺構(SI7)、土坑(SC2)などの遺構や遺物包含層から出土した種実146点(分析番号1~146)964個(第23・24表)である。このうち、分析番号55(遺構・遺物番号3089 IIIb層 出土位置F4Gr.)の2点、分析番号102(SA4床土サンプル 出土位置D3Gr.)、分析番号122(A3-2集中区 III層)の計5点は、年代測定試料とされていたことから測定前に種類を確認した結果、全てイチイガシの子葉に同定された。

樹種同定試料は、堅穴建物跡(SA1~3)から出土した炭化材4点(分析番号147~150)である(第25表)。分析番号147は長さ約1.5cmの破片、分析番号148は長さ約4cm、幅約1.5cmの板目板状、分析番号149は直径約1.2cmの芯持丸木、分析番号150は長さ・幅が約2.5cmの破片である。

(2) 分析方法

種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。分析後は、種実等を種類毎に容器に入れて保管する。

樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を製作し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)、伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

放射性炭素年代測定

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N)により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すがが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。試料は、種実であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(3) 結果

種実同定

木本5分類群(広葉樹のイチイガシ、コナラ属、ツブラジイ、アワブキ属?、ミミズバイ) 903個、草本2分類群(コキンバイザサ、タデ属) 14個、計917個の種実が同定されたほか、炭化材15個、不明2個、菌類の菌核54個、土粒12個が確認された。種実遺体群は、常緑高木のイチイガシの子葉325個、コナラ属の子葉432個、コナラ属-シイ属の子葉53個、ツブラジイの果実1個、子葉90個、常緑または落葉の高木または小高木のアワブキ属?の核?1個、常緑小高木のミミズバイの核1個、草本のコキンバイザサの種子12個、タデ属の果実2個から成る。イチイガシを含むコナラ属が全体の約9割を占め、ツブラジイがこれに次ぐ(約1割)。なお、ツブラジイは、SA3で比較的多く確認されている。

種実遺体の状態はほぼ炭化しており、黒色を呈すが、分析番号128~130、144~146 (F4Gr. III層)で確認されたコキンバイザサ12個には炭化が認められない。分析番号130、134 (F4Gr. III層)で確認されたタデ属2個は、元々黒く硬い果皮をもつため、炭化の判断は難しい。以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

イチイガシ (*Quercus gilva* Blume) ブナ科コナラ属アカガシ亜属

子葉は炭化しており黒色、長さ1.1-1.5cm、径0.7-0.9cm程度の楕円-広卵体。2枚からなる子葉は極端に不揃いで、合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。幼根は頂端からずれた位置にある。表面には、1本の深い溝が基部から頂部に向かい、2/3程度まで発達している。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部には小さな孔(主根)がある。

岡本(1979)は、日本産ブナ科植物の子葉について、イチイガシには子葉の離れにくさ、著しい異形性、頂端が尖らず幼根の位置がずれている、中軸の圧痕が確認できるなどの特異性があることから、イチイガシのみが種まで同定できる場合があることを述べている。今回確認された325個は、これらの特徴を典型的に示していることから、イチイガシに同定されると判断し

た。なお、イチイガシの特徴が明瞭に確認されない432個を、コナラ属(*Quercus*)にとどめているが、これらもおそらくはイチイガシに由来すると思われる。

ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunb. ex Murray) Schottky) ブナ科シイ属

炭化しており黒色。果実は長さ9mm、径7.5mm程度の広卵体で頂部は尖る。スタジイ(*C. sieboldii* (Makino) Hatusima ex Yamazaki et Mashiba)よりも丸く小さい。果実頂部は尖り、基部を占める着点は円状不定形で維管束の穴が不規則な輪状に並ぶ。果皮表面には細く浅い溝が縦列する。子葉は長さ6-8cm、径5-6mm程度の広卵体で頂部は尖る。子葉の合わせ目に沿って割れた半分以下の破片のみみられる。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。子葉合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部に小さな孔(主根)がある。なお、コナラ属とシイ属の判別が難しい子葉の破片は、両者をハイフォンで結んでいる。

アワブキ属 (*Meliosma*)? アワブキ科

核(内果皮)と思われる破片は、炭化しており黒色。長さ3.5mm、径3.9mm程度の歪な球体。破片は縦に一周する稜に沿って半割した1片である。内果皮は硬く、表面には浅い大型の凹凸がある。ヤマビワ(*M. rigida* Sieb. et Zucc.)に似る。

ミミズバイ (*Symplocos glauca* (Thunb.) Koidz.)

ハイノキ科ハイノキ属

核は炭化しており黒色、長さ1.3cm、径0.7cm程度の倒卵状長楕円体。頂部は孔があり、3室がみられる。内果皮は木質で表面には浅い縦隆条が配列する。

コキンバイザサ (*Hypoxis aurea* Lour.) キンバイザサ科コキンバイザサ属

種子は灰-黒褐色、長さ1.3-1.5mm、径1.2mm程度の広楕円体。基部の片側から下方へ曲がる突起がある。種皮表面には短い円錐状突起が密生する。

タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実は黒色、長さ2.0mm、径1.3mm程度のやや扁平な広卵形。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は粗面である。

樹種同定

炭化材は、針葉樹1分類群(マツ属複雑管束亜属)と広葉樹2分類群(スダジイ・スイカズラ属)に同定された(第25表)。分析番号147、150(SA2)はスダジイ、分析番号148(SA1)は複雑管束亜属、分析番号149(SA3)はスイカズラ属であった。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

マツ属複雑管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*)

マツ科

軸方向組織は、仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急〜やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセルウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10細胞高。

スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高で、観察した範囲では集合〜複合放射組織は認められない。

スイカズラ属 (*Lonicera*) スイカズラ科

散孔材で、小径の道管が単独または4-5個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔および単穿孔を有する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

放射性炭素年代測定

イチイガシ子葉5試料について同位体効果による補

正を行った測定結果(補正年代)は、分析番号55(遺構・遺物番号3089 IIIb層 出土位置F4Gr.)の2点が3,475±20 BP、3,530±25 BP、分析番号102(SA4床 上サンプル 出土位置D3Gr.)が3,485±25 BP、分析番号122(A3-2集中区 III層)の2点が3,640±25 BP、3,705±25 BPを示す(第26表)。補正年代に基づく暦年較正結果(測定誤差 σ)は、分析番号55の2点がcalBC1, 874-1, 747、calBC1, 911-1, 779、分析番号102がcalBC1, 877-1, 755、分析番号122の2点がcalBC2, 032-1, 963、calBC2, 138-2, 039である(第27表)。

(4) 考察

竪穴建物跡などの各遺構や包含層から出土した種実遺体は、木本5分類群(イチイガシ、コナラ属、ツブラジイ、アワビキ属(?)、ミミズバイ)、草本2分類群(コキンバイザサ、タデ属)が確認され、竪穴建物跡から出土した炭化材は、針葉樹1分類群(マツ属複雑管束亜属)と広葉樹2分類群(スダジイ、スイカズラ属)が確認された。また、IIIb層、SA4、A3-2集中区III層のイチイガシ子葉の測定年代は、5試料とも縄文時代後期前葉〜中葉の年代値を得ており、発掘調査所見を支持する結果と言える。なお、A3-2集中区III層の年代は、2点とも他3点よりもやや古い値を示す。

種実遺体で最も多く確認されたイチイガシや、次いで確認されたツブラジイは、本地域に分布する照葉樹林の主要構成種で、子葉が生食可能な有用植物である。特にイチイガシは、湿润、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する種で、現在は、紀伊半島、四国、九州の山麓地に広く分布する。また、イチイガシの堅果はコナラ属の中でも渋みが少なく、アク抜きせずに生食可能で収量も多いため、遺跡出土例も多い(渡辺, 1975; 岡本, 1979など)。各遺構から出土した炭化子葉は、当時の本遺跡周辺域の照葉樹林から遺構内に持ち込まれた植物質食糧であることが示唆され、何らかの理由で火熱を受けたことが推定される。

その他の木本種実は、A3-2集中区のIII層から常緑または落葉の高木あるいは小高木のアワビキ属(?)、SA3から常緑小高木のミミズバイが確認され、上記照葉樹林内に生育していたものに由来すると考えられる。草本種実は、F4Gr.のIII層からタデ属と暖地の山地

に生育する多年草のコキンバイザサが確認され、調査区周辺域に生育していたものに由来すると考えられる。ただし、コキンバイザサは炭化していないため、後代より混入したものである可能性が高い。

竪穴建物跡SA1から出土した炭化材は、2点ともスダジイであった。スダジイは、イチイガシヤツブラジイと共に本地域の常緑広葉樹林の主構成種となる常緑高木で、木材は比較的強度が高い。SA2から出土した炭化材は、マツ属複雑管束東亜属であった。複雑管束東亜属は二次林などを構成する常緑高木で、木材は強度・保存性が比較的高く、建築・土木材として有用である。SA3から出土した炭化材は、常緑～落葉のつる植物または低木のスイカズラ属で、木材の用途はあまり知られていない。

各炭化材の出土位置などの詳細は不明であるが、遺構によって樹種が異なる結果となっている。比較的強度が高く、大径木になるスダジイや複雑管束東亜属は、住居の構築部材などに利用されていた可能性がある。一方、つる植物あるいは低木のスイカズラ属は、直径約1.2cmの芯持丸木であること等から、スダジイや複雑管束東亜属とは異なる用途が想定されるが、現状で具体的な利用状況は不明である。今後、出土状況も含めた用途の検討とともに、類例の蓄積が望まれる。

引用文献

- 林昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所。
- 石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会 328p。
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』 31 京都大学木質科学研究所 81-181。
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』 32 京都大学木質科学研究所 66-176。
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』 33 京都大学木質科学研究所 83-201。
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』 34 京都大学木質科学研究所 30-106。
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』 35 京都大学木質科学研究所 47-216。
- 中山至大・井之口希秀・南谷 忠志 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会 642p。
- 岡本素治 1979 「遺跡から出土するイチイガシ」『大阪市立自然史博物館年報』 第230号 31-39。
- Richter H.G. Grosser D. Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 70p. [Richter H.G. Grosser D. Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 176p。
- 渡辺誠 1975 『縄文時代の植物食』雄山閣出版 187p。
- Wheeler E.A. Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修) 海青社 122p. [Wheeler E.A. Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

分析番号	出土位置	出土層位	分類群	部位	状態	個数	備考
118	A3-2	Ⅱ	イテイガシ	子葉	破片	2	
			コナラ属	子葉	破片	1	
119	A3-2	Ⅱa	イテイガシ	子葉	完形	2	
			イテイガシ	子葉	破片	2	半分
			コナラ属	子葉	破片	3	
120	A3-2S	Ⅲ	イテイガシ	子葉	完形	1	
			イテイガシ	子葉	破片	2	半分
121	A3-2 集中区	Ⅲ	イテイガシ	子葉	完形	24	
			イテイガシ	子葉	破片	68	17個半分
			コナラ属	子葉	破片	221	5個半分
			コナラ属-シイ属	子葉	破片	6	
			ツブラソイ	子葉	完形	3	
			ツブラソイ	子葉	破片	25	18個半分
			アブツクミカ?	核?	破片	1	
不明	破片	1					
炭化材	破片	4					
土粒	1						
122	A3-2 集中区	Ⅲ	イテイガシ	子葉	破片	1	年代測定(11399-4.0.13g)
			イテイガシ	子葉	破片	1	年代測定(11399-5.0.18g)
123	F4-1	Ⅲ	イテイガシ	子葉	破片	1	
			ツブラソイ?	子葉	破片	1	径4.5mm/1.2mmの半分(約1/4個)
124	F4-2	Ⅲ	炭核	1	1		
125	F4-5	Ⅲ	炭核	2	1		
126	F4-8	Ⅲ	炭核	1	1		
127	F4-10	Ⅲ	コナラ属-シイ属	子葉	破片	1	
			炭核	3			
128	F4-11	Ⅲ	コクニバイザサ	種子	完形	2	
			炭核	1			
129	F4-12	Ⅲ	土粒	1	1		
			コナラ属	子葉	破片	3	
			コナラ属-シイ属	子葉	破片	1	
			コクニバイザサ	種子	完形	2	
			炭核	8			
130	F4-13	Ⅲ	コナラ属	子葉	破片	1	
			コクニバイザサ	種子	完形	2	
			タデ属	葉実	完形	1	
			炭核	4			
131	F4-14	Ⅲ	コナラ属	子葉	破片	2	
			コナラ属-シイ属	子葉	破片	2	
			ツブラソイ	子葉	破片	1	半分

分析番号	出土位置	出土層位	分類群	部位	状態	個数	備考
132	F4-15	Ⅲ	炭核			2	
133	F4-16	Ⅲ	コナラ属-シイ属	子葉	破片	1	
134	F4-18	Ⅲ	イテイガシ	子葉	完形	1	
			イテイガシ	子葉	破片	3	半分
			コナラ属	子葉	破片	2	
タデ属	葉実	完形	1				
135	F4-19	Ⅲ	イテイガシ	子葉	完形	1	
136	F4-20	Ⅲ	コナラ属	子葉	破片	4	
			炭化材			破片	4
137	F4-21	Ⅲ	コナラ属	子葉	破片	6	
138	F4-23	Ⅲ	炭化材			破片	1
			炭核			1	
139	F4-24	Ⅲ	イテイガシ	子葉	破片	1	半分
			コナラ属	子葉	破片	2	
炭化材			破片	1			
炭核			1				
140	F4-25	Ⅲ	イテイガシ	子葉	完形	3	
			イテイガシ	子葉	破片	10	3個半分
			コナラ属	子葉	破片	36	3個半分
141	F4-27	Ⅲ	イテイガシ	子葉	完形	1	
			コナラ属	子葉	破片	12	
炭核			1				
142	F4-28	Ⅲ	コナラ属	子葉	破片	1	
			炭核			4	
143	F4-30	Ⅲ	イテイガシ	子葉	破片	1	
			コナラ属	子葉	破片	2	
			不明			破片	1
144	F4-32	Ⅲ	コクニバイザサ	種子	完形	2	
			炭核			1	
145	F4-33	Ⅲ	コクニバイザサ	種子	完形	2	
			炭核			3	
146	F4-35	Ⅲ	コクニバイザサ	種子	完形	2	
			炭核			2	

第24表 種実同定結果(2)

分析番号	遺物・遺構番号	出土位置	重量(g)	状態	種類
147	SA1-12	D7	0.3	炭化材	スタグソイ
148	SA2b	-	6.2	炭化材	マツ葉脈精曹東果属
149	SA3-212	-	1.7	炭化材	スイカズラ属
150	SA1-11	D7	4.5	炭化材	スタグソイ

第25表 樹種同定結果

分析番号	遺物・遺構番号	出土位置	出土層位	同定結果				補定年代 BP	δ 13C (‰)	Code No.
				分類群	部位	状態	個数			
55	3089	Ⅱb	F4	イテイガシ	子葉	炭化	破片	3475±20	-23.63±0.15	11399-1
55	3089	Ⅱb	F4	イテイガシ	子葉	炭化	破片	3530±25	-26.26±0.18	11399-2
102	SA4床下サンプル	-	D3	イテイガシ	子葉	炭化	破片	3485±25	-25.59±0.18	11399-3
122	A3-2 集中区	Ⅲ	-	イテイガシ	子葉	炭化	破片	3640±25	-27.44±0.17	11399-4
122	A3-2 集中区	Ⅲ	-	イテイガシ	子葉	炭化	破片	3705±25	-26.71±0.22	11399-5

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5693年)を用いた。

2) BP年代値は、1,950年を基点として紀年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差(測定値の0.4%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第26表 放射年代測定

分析番号	遺物・遺構番号	出土位置	分類群(部位)	補定年代(BP)	暦年較正結果(cal)						相対比	Code No.	
					α	cal BC	cal BP	cal AD	cal BP	cal AD			
55	3089	Ⅱb	イテイガシ(子葉)	3473±22	α	cal BC 1.874	-	cal BC 1.843	cal BP 3.824	-	3.793	0.390	11399-1
					cal BC 1.817	-	cal BC 1.789	cal BP 3.767	-	3.749	0.203		
					cal BC 1.779	-	cal BC 1.747	cal BP 3.729	-	3.697	0.407		
2σ	cal BC 1.882	-	cal BC 1.739	cal BP 3.832	-	3.689	0.994						
2σ	cal BC 1.700	-	cal BC 1.700	cal BP 3.653	-	3.620	0.006						
55	3089	Ⅱb	F4 イテイガシ(子葉)	3530±25	α	cal BC 1.911	-	cal BC 1.874	cal BP 3.961	-	3.924	0.440	11399-2
					cal BC 1.843	-	cal BC 1.816	cal BP 3.793	-	3.766	0.225		
					cal BC 1.789	-	cal BC 1.779	cal BP 3.749	-	3.729	0.233		
2σ	cal BC 1.936	-	cal BC 1.771	cal BP 3.986	-	3.721	1.000						
2σ	cal BC 1.877	-	cal BC 1.842	cal BP 3.827	-	3.792	0.406						
102	SA4 床下サンプル	-	D3 イテイガシ(子葉)	3484±23	α	cal BC 1.822	-	cal BC 1.786	cal BP 3.772	-	3.748	0.308	11399-3
					cal BC 1.782	-	cal BC 1.735	cal BP 3.732	-	3.705	0.285		
					cal BC 1.883	-	cal BC 1.746	cal BP 3.833	-	3.696	1.000		
2σ	cal BC 2.032	-	cal BC 1.863	cal BP 3.982	-	3.713	1.000						
122	A3-2 集中区	Ⅲ	イテイガシ(子葉)	3640±23	α	cal BC 2.126	-	cal BC 2.089	cal BP 4.078	-	4.039	0.118	11399-4
					cal BC 2.045	-	cal BC 1.938	cal BP 3.995	-	3.889	0.882		
					cal BC 2.138	-	cal BC 2.117	cal BP 4.088	-	4.067	0.252		
122	A3-2 集中区	Ⅲ	イテイガシ(子葉)	3706±25	α	cal BC 2.098	-	cal BC 2.039	cal BP 4.048	-	3.999	0.746	11399-5
					cal BC 2.197	-	cal BC 2.180	cal BP 4.147	-	4.118	0.094		
					cal BC 2.148	-	cal BC 2.028	cal BP 4.098	-	3.978	0.906		

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.1(Copyright 1989-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。

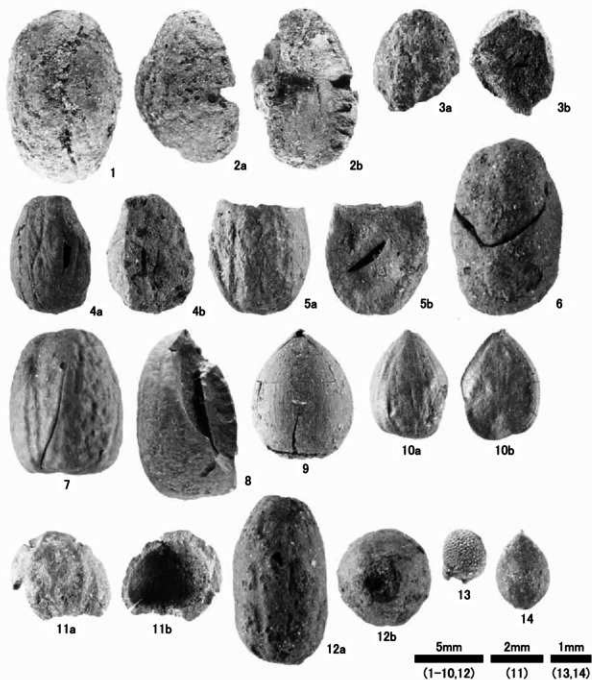
2) 計算には表に示した丸のみの値を使用している。

3) 標目を丸のみの値が異なる場合は、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが校正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1個目を丸めていた。

4) 統計的に真の値が入る確率は2σは95%、2σは99%である。

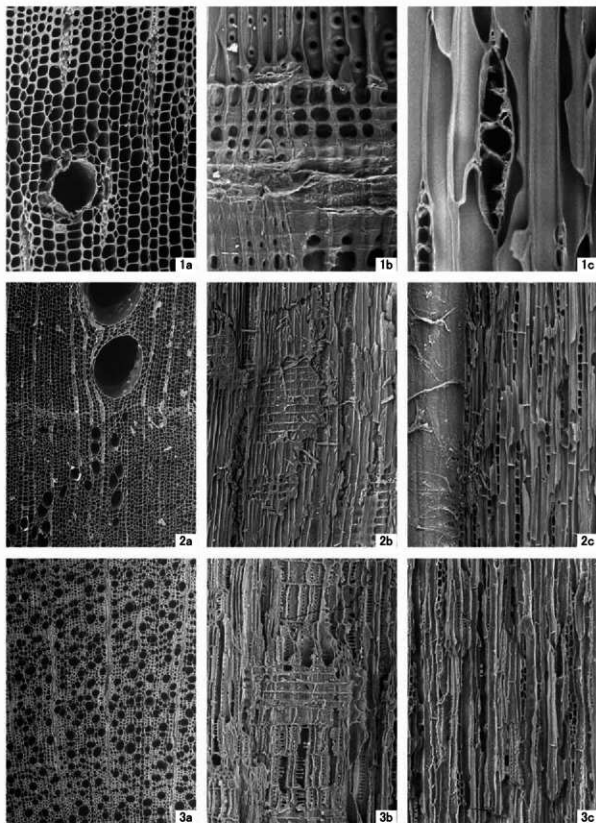
5) 相対比は、α、2σのそれぞれを1とした場合、相対的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第27表 暦年較正結果



- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1. イチイガシ 子葉(分析番号55) | 2. イチイガシ 子葉(分析番号55) |
| 3. イチイガシ 子葉(分析番号102) | 4. イチイガシ 子葉(分析番号122) |
| 5. イチイガシ 子葉(分析番号122) | 6. イチイガシ 子葉(分析番号49) |
| 7. イチイガシ 子葉(分析番号121) | 8. イチイガシ 子葉(分析番号121) |
| 9. ツブラジイ 果実(分析番号101) | 10. ツブラジイ 子葉(分析番号121) |
| 11. アワブキ属? 核?(分析番号121) | 12. ミズバイ 核(分析番号72) |
| 13. コキンバイザサ 種子(分析番号146) | 14. タデ属 果実(分析番号134) |

第68図 内野々遺跡出土の種実遺体



1. マツ属複維管束亜属(分析番号148)

2. スダジイ(分析番号150)

3. スイカズラ属(分析番号149)

a:木口,b:柱目,c:板目

200 μ m:2-3a

200 μ m:1a,2-3b,c

100 μ m:1b,c

第69図 遺構埋土出土の炭化材

3 内野々遺跡の土器圧痕について

前項で触れたように、当遺跡では集落跡の主体時期である縄文時代後期前葉～中葉にかけて多数の植物質食料が遺跡内に持ち込まれた可能性があるという結果が得られた。そこで、これらが土器の成形段階で土器に付着する可能性を考慮し、また、調査中及びフローテーション作業の結果では回収できなかったその他の微細な植物遺体・動物遺体の痕跡を探索することで、前項に加え、さらに具体的な資料を提示することが可能となる。

土器圧痕調査に係る作業の方法及び結果については以下のとおりである。

(1) 作業の方法

選別作業

土器の接合（接点確認）終了時点で、内野々遺跡から出土した土器片全点（17,521点）を対象に1点ずつ確認し、種子や植物片、昆虫類などの圧痕資料の可能性のあるものを、その場で実体顕微鏡（Nicon・ネイチヤースコープ・ファープル）を用いて20倍の倍率で観察した。その後、10～63倍まで拡大可能な実体顕微鏡（Nicon pxf）を用いて、付着箇所についてより詳細な観察を行った。このうち、微細な礫や火山灰等の含有物が剥落したと思われるものを除いた84点について圧痕土器資料とし、残存位置の撮影を行った上で、同機にデジタルカメラを装着して圧痕の拡大画像の撮影を行った。

なお、圧痕土器探査に係る作業方法については当センター報告書第154集「吉牟田遺跡」第IV章第2節第8表を参考にされたい。

レプリカ法による転写作業

圧痕は土器の外・内面及び断面に「窪み」として残る。そのため、何らかの材料を流し込んで型を取り、反転させた元の状態で観察する必要がある。当遺跡ではシリコン樹脂を印象材としてレプリカを作成した。なお、一連のレプリカ法による転写作業で使用した溶剤・手順については、比佐・片多氏の論考を参照されたい。

走査型電子顕微鏡（SEM）による観察と結果

反転した圧痕資料はSEM（HITACHI S-3000-N）を用いて表面組織や詳細な形状の観察・記録を行った。この際、画像の記録は20～40倍に拡大して行った。なお、表面に特徴的な組織が観察できた一部の資料についてはこの限りではない。

(2) 観察の結果（第28表、第70図～第72図）

レプリカを作成した84点の資料のうち、検出部位は土器の口縁部14点（うち、口唇部1点）、頸部4点、胴部51点、底部12点・土製円盤3点であり、そのうち19点については土器断面にみられた。

観察の結果については、以下の4種類に分類して報告する。なお、今回検出した圧痕資料の同定作業には植物学・植物解剖学的見地からの考察が必要であるが、現時点では困難な点が多いため、これ以上の考察は差し控えたい。

- ◎：植物種子の圧痕で、同定が可能と思われる資料であり、13点検出した。
- ：植物種子の圧痕であるが、同定が困難と思われるもので、28点検出した。
- △：植物種子の可能性が低いと思われるものである。25点検出した。
- ×：植物遺体以外の何らかの圧痕で、微細な石粒痕の可能性が高いものを含む。12点検出した。
- ：動物遺体や植物片の圧痕で6点検出した。

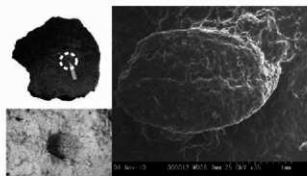
参考文献

- 柳田裕三 2006 「吉牟田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第154集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 丑野毅・田川裕美 1991 「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』1324日本文化財保存学会
- 比佐陽一郎・片多雅樹 2006 「土器圧痕のレプリカ法による転写作業」福岡市埋蔵文化財センター

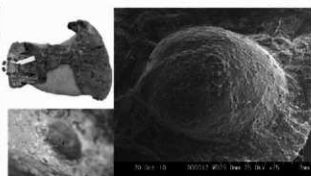
№	資料№	注記	区分	位置	通算(年)	所属	主な色番	備考	通算見一番号		
1	HUCN-091	SA3-7	◎	3.55	1.65	-	統一	新	にんしん機	練習用車、半自動機、中央に違いあり	
2	HUCN-092	5A4	×	2.19	1.29	-	統一	新	外	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる	
3	HUCN-093	04 02	◎	2.05	1.24	-	統一	新	内	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる	
4	HUCN-094	011 0234	×	2.05	1.42	-	統一	新	内	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる	
5	HUCN-095	04 01	◎	2.75	1.32	-	統一	新	内	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる	
6	HUCN-096	05 08	◎	3.24	2.23	-	統一	新	内	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる	
7	HUCN-097	07 01	◎	5.02	3.43	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
8	HUCN-098	07 02	◎	2.18	0.83	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
9	HUCN-099	07 03	◎	0.83	0.83	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
10	HUCN-100	07 04	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
11	HUCN-101	07 05	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
12	HUCN-102	07 06	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
13	HUCN-103	07 07	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
14	HUCN-104	07 08	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
15	HUCN-105	07 09	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
16	HUCN-106	07 10	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
17	HUCN-107	07 11	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
18	HUCN-108	07 12	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
19	HUCN-109	07 13	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
20	HUCN-110	07 14	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
21	HUCN-111	07 15	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
22	HUCN-112	07 16	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
23	HUCN-113	07 17	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
24	HUCN-114	07 18	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
25	HUCN-115	07 19	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
26	HUCN-116	07 20	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
27	HUCN-117	07 21	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
28	HUCN-118	07 22	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
29	HUCN-119	07 23	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる
30	HUCN-120	07 24	◎	5.87	1.26	-	統一	新	内	にんしん機	練習用機、半自動機で機体がわずかに異なる

№	資料№	注記	区分	位置	通算(年)	所属	主な色番	備考	通算見一番号	
41	HUCN-121	02 08	◎	2.63	2.59	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
42	HUCN-122	02 09	◎	2.18	2.73	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
43	HUCN-123	02 10	◎	5.30	2.89	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
44	HUCN-124	02 11	◎	2.24	1.40	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
45	HUCN-125	02 12	◎	3.98	2.25	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
46	HUCN-126	03 02	◎	1.28	1.28	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
47	HUCN-127	03 03	◎	2.20	1.60	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
48	HUCN-128	04 01	◎	2.88	2.78	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
49	HUCN-129	03 04	◎	2.23	1.48	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
50	HUCN-130	03 05	◎	2.18	1.55	1.12	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
51	HUCN-131	03 06	◎	5.33	2.14	2.14	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
52	HUCN-132	03 07	◎	2.24	1.74	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
53	HUCN-133	03 08	◎	-	-	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
54	HUCN-134	03 09	◎	4.38	2.65	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
55	HUCN-135	04 02	◎	5.31	2.88	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
56	HUCN-136	04 03	◎	2.47	1.58	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
57	HUCN-137	04 04	◎	2.48	2.20	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
58	HUCN-138	04 05	◎	5.04	4.41	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
59	HUCN-139	04 06	◎	3.78	2.81	1.83	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
60	HUCN-140	04 07	◎	7.88	2.78	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
61	HUCN-141	04 08	◎	2.89	2.88	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
62	HUCN-142	04 09	◎	5.12	4.82	4.82	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
63	HUCN-143	04 10	◎	5.12	2.20	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
64	HUCN-144	04 11	◎	6.04	3.58	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
65	HUCN-145	04 12	◎	5.48	2.87	1.93	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
66	HUCN-146	04 13	◎	4.83	2.10	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
67	HUCN-147	04 14	◎	2.87	2.12	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
68	HUCN-148	04 15	◎	7.49	2.36	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
69	HUCN-149	04 16	◎	2.42	1.69	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
70	HUCN-150	04 17	◎	4.28	2.26	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
71	HUCN-151	04 18	◎	3.02	2.28	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
72	HUCN-152	04 19	◎	2.88	1.47	1.56	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
73	HUCN-153	04 20	◎	2.88	1.78	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
74	HUCN-154	04 21	◎	4.88	2.40	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
75	HUCN-155	04 22	◎	4.10	2.40	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
76	HUCN-156	04 23	◎	1.48	1.20	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
77	HUCN-157	04 24	◎	2.80	1.98	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
78	HUCN-158	04 25	◎	2.31	2.28	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
79	HUCN-159	04 26	◎	5.37	1.73	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
80	HUCN-160	04 27	◎	2.54	1.74	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
81	HUCN-161	04 28	◎	2.88	2.43	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
82	HUCN-162	04 29	◎	3.84	2.43	-	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある
83	HUCN-163	04 30	◎	6.77	4.79	4.03	統一	新	内	練習用機で機体は中央に違いがある

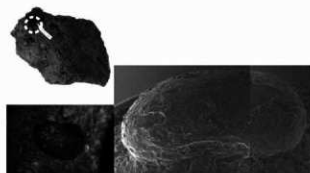
第28表 圧痕土器観察表



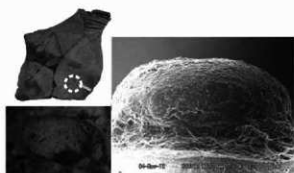
資料 1



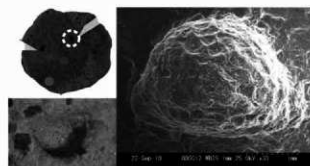
資料 6



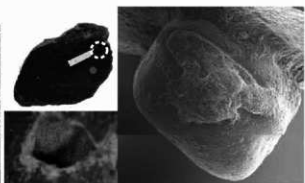
資料 7



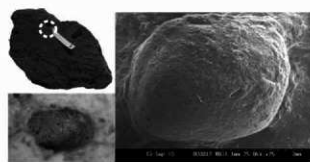
資料 13



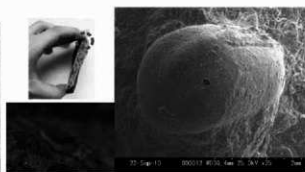
資料 29



資料 27

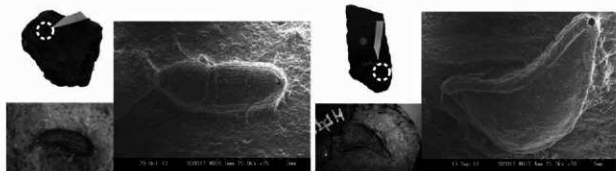


資料 28



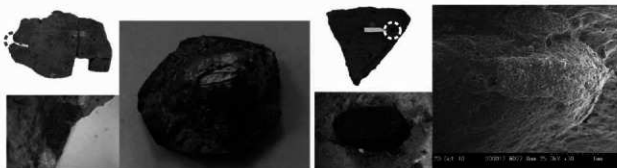
資料 29

第70図 圧痕土器写真(1)



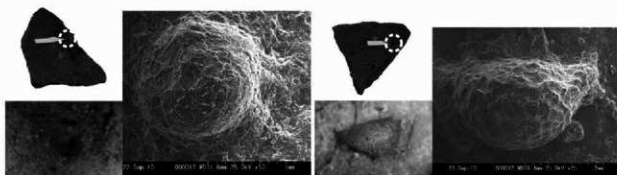
資料30

資料32



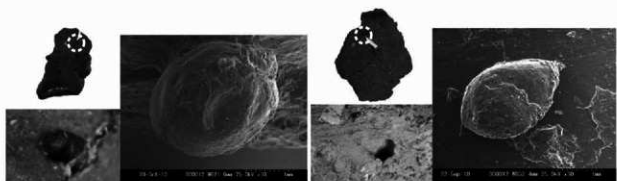
資料35

資料38



資料40

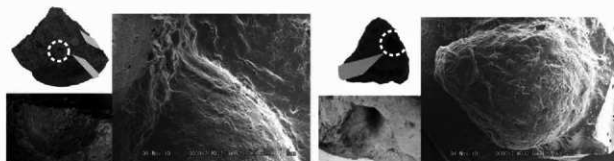
資料45



資料48

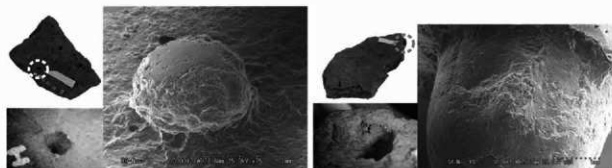
資料50

第71圖 圧痕土器写真(2)



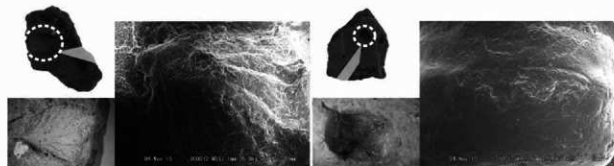
資料53

資料58



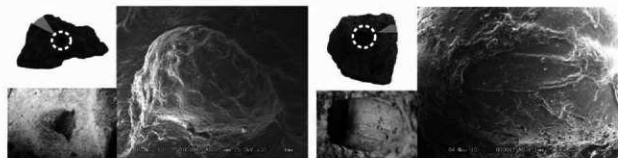
資料61

資料62



資料64

資料65



資料72

資料84

第72図 圧痕土器写真(3)

第10節 まとめ

内野々遺跡の発掘調査では、縄文時代から古墳時代初頭にかけての各種遺構やこれに伴う多量の遺物が確認された。特に、縄文時代の遺構・遺物が出土したことは、調査例が少なく現在まで不明確な点の多い都農町の該期遺跡を考察する上で、また、他地域の遺跡と比較をする上で非常に重要な成果となった。

本節では、今回の調査結果を周辺の地域で見つかった遺跡との比較を行いながら時期ごとに整理し、まとめとしたい。

1 縄文時代

(1) 早期

早期に該当する遺構は集石遺構のみであり、同様の遺構は都農町内でも数多く検出され始めている。今回の調査で検出した5基の集石遺構はいずれも掘込みを有し、礫が充填した検出状況であったが配石や散礫については確認できなかった。また、構成礫が尾鈴山酸性岩類に限られることは遺構の造り方を考えるうえで注目すべき点である。

遺物について

土器は包含層中から少量であるが出土した。1の前平式土器は早期前半の貝殻文系円筒土器である。また、出土量としては下菅生B式や早水台式に相当する土器(2~8)など、早期前半から中葉にかけての押型文土器が最も多い。そして早期中葉の手向山式土器(9)以降、前期末に至るまでの土器は認められない。この間を補充する土器として、平山下原遺跡では手向山式土器に後続する妙見式が出土しており、童ヶ平第1遺跡、黒石遺跡、内野々第4遺跡などでは塞ノ神式や、前期の轟B式・曾畑式土器の出土があるものの、周辺遺跡を見ても依然資料が少ない状況である。以上を踏まえると、当遺跡において早期の中心は前半~中葉前後の押型文土器の時期にかけてであり、この終焉と併に一時の空白期間が推定される。

石器も出土量は少量であり、中・後期の石器組成と比較すると、磨石や台石などの礫石器を除いて大きな差は見られない。尾鈴山酸性岩類製の石器がほとんど出土しないという事実は、より良質な石材が豊富に存在していたのか、あるいは石材として適当ではないと

考えた結果なのかは判断できない。ただし、隣接する内野々第2遺跡では当該期の同石材の石核が出土していることから、何らかの利用はされていたのであろう。

(2) 前期末~中期

今回の調査では、明確に当該期に相当するものといえる遺構は検出されていない。また、周辺遺跡からの出土もわずかである。しかし、今回の調査により出土遺物は少量であるが良好な土器資料が得られた。このうち、147・150・151は深浦式日本山段階の可能性があり、152・153は田野町宮崎市天神河内第1遺跡のD類土器に類例をもち尾田式土器に類似した文様を有する土器であり、これらは前期末に相当する。

縄文時代中期の土器について、I類122・136~140や多角形状の底部であるⅢ類154は船元I式に相当する。船元式に共通した特異な胎土からは畿内系の影響あるいは土器そのものの流通が想定される。また、II類141~145は高鍋町下耳切第3遺跡出土の土器群との対比によると、春日式土器北手牧段階に相当する。148・149は深浦式被谷段階と考えられる。

(3) 後期

遺構について

遺構は堅穴建物跡、集石遺構、土坑を検出し、これらは遺構に伴う土器から後期前半~中葉を主体とした遺構と判断できる。

都農町内で当該期の堅穴住居跡を伴う集落跡の調査事例は1例のみであり、今回の調査において堅穴住居跡の全容を把握できる調査に至ったことは、貴重な調査事例といえる。また、宮崎県では当該期の集落跡は台地上の平坦地での発見例が多いが、当遺跡のように丘陵裾の河岸段丘上に立地する遺跡は少なく、当時の集落形成を考慮する上で貴重な検出例である。

検出した4軒の堅穴住居跡から、集落の様相について以下のように考えることができる。先述のとおり、SA2・3とSA4・5では出土した土器の形式から、前者は後期前半、後者は後期中葉に比定される。この考えは、遺構に伴う炭化種実の炭素年代測定の結果により補強された。結果、集落としての画期は二時期存在したと考えられる。なお、SA2とSA3は密接す

ることから、本来切り合い関係にあると思われるが検出状況や土層断面の観察では先後関係は確定できなかった。一方で、SA2、SA3で出土したV類土器は一部を除いて市来式に相当し、37・38・40・41の口縁形態・施文はやや新しい要素を持つことから、SA3を当遺跡最古の堅穴建物跡として位置付けたい。

集石遺構を構成する礫は早期と同様に尾鈴山酸性岩類を主体としており、配石を伴う遺構も2基検出している。なお、3基の土坑は埋土の状況や、出土した遺物がSA4に共通することから、同時期の遺構と理解している。

遺物について

都農町内での当該期の遺物については非常に希薄な状況にある。わずかに新別府川原遺跡で貝殻痕文土器片と、打製石鏃・打製石斧・磨製石斧が出土したほか、三日月原遺跡で靴式土器や石鏃が出土したにとどまっている。しかし、今回の調査によって多量の遺物を得ることができた。なかでも土器は、当地域の指標になり得るほど変化に富んだものであった。

まず、縄文時代後期土器であるIV～VII類土器について土器編年と型式に沿って整理したい。

出土した土器は北部九州系の磨消縄文土器と南九州系の貝殻痕文土器が主体であり、後期前半～後半頃のものであった。IV類は、太沈線と明瞭な縄文を施した小池原上層式、沈線で鈎手文・渦文を描く鐘崎式、これらに後続する北久根山式などの磨消縄文系土器群である。V類は一部を除き、貝殻により施文・調整する土器群は概ね市来式に相当し、IV類土器と共存関係が認められる。このほか、192は市来式に先行する出水式に、188・168～170・173・188は北久根山式の深鉢に相当する可能性があり、Ve類には緑帯文系土器の流れを汲む土器などが確認できる。VI類219・220は明確ではないが、胎土やナデで調整する点および貼付突帯の形状から北久根山式に前後する可能性がある。221は宮崎市の右葛ヶ追遺跡で出土した土器に類例があり、阿高系土器に相当すると考えられる。

土器の出土量としては後期中葉頃の貝殻痕文系土器の深鉢が最も多く出土しており、VII類が特に顕著であった。VII類は市来式最終段階の丸尾式土器で、前迫亮一氏の細分によればBタイプに相当する。丸尾式の特徴

である頸部施文について、そのほとんどが一例のみである点は、同型式における末期と考えられる。また、X類274・275は施文や胎土に共通点が認められることからVIII類に併行する器形と考えられる。VII類深鉢の施文・調整は頸部の屈曲が緩く変化するにつれて粗くなり、後続する納屋向式(131か)へ次第に変化したと考えられる。また、VIII類の一部(102・245～247)については、102の同一個体(未図化)の頸部に同様の文様があり丸尾式に属する土器と考えられるが、きわめて丁寧な調整を施す(246)ことや頸部から胴部にかけて膨らむ(247)点は、併行関係にある磨消縄文系土器の影響を受けた結果と思われる。なお、XI・XII類中で胎土が橙～明赤褐色を呈し、貝殻痕文を施されたものは概ねVIII類に伴う土器群と考えてよいだろう。

後期後半から末にかけてはVIII類を境に貝殻痕文系土器が減少する傾向にあり、代わって辛川式や西平式などの磨消縄文系の影響を受けた土器(264～270)が台頭し、後続する磨研土器(XIII類)の太郎迫式(207)・鳥井原式(315・316)へと変遷する様相が伺える。

その他、XII類土器のうちキャリバー状を呈する土器(309・310・313)は門川町の門川南町遺跡や宮崎市右葛ヶ追遺跡などで出土例があり、後期初頭とされている遺物と類似する。XII類は型式不明であり明確な時期は特定できないが、沈線・凹線文とナデによる調整が主体であることから後期前半に前後する可能性がある。

以上を踏まえ、県内の当該期遺跡で出土した遺物の傾向を概観すると、丸尾式のうち口縁部が屈曲したAタイプの欠落などは宮崎平野以北の日向灘沿岸の遺跡にみられる類似点であり、当遺跡周辺もこの地域に含まれると考えられる。

石器は打製石鏃や石匙、石鏃といった小型の製品にチャートや黒曜石などのガラス質石材を利用している。黒曜石は遠隔地石材の利用が認められ、中でも大分県姫島産の黒曜石の出土点数が比較的多く、石核と微細剥片が伴うことは、遺跡内で石器を製作した結果と考えられる。中～大型の礫石器については、打製石斧、スクレイパー、削器など刃部を持つもの他に、磨石、石鏃、台石などが認められた。これらの素材には砂岩、尾鈴山酸性岩類が多く利用されることは、器種によって石材を選択した様子が伺える。なお、石器について

は遺跡の主体である縄文時代後期に相当すると思われるが、後期以降の石器が混在する可能性は高い。

植物遺体について

発掘調査およびフローテーション作業の結果、多数の植物遺体を回収した。特に、シイ・カシなど照葉樹林帯に生息する堅果類の子葉が顕著に出土した、中でも生食が可能なイチイガシは製粉することでより長期間の保存が可能で、食料として有用なものである。これらの遺物に係る自然科学分析から得た結果は、当時の植物質食料を考察する上で貴重な成果であると評価したい。また、集中して出土したという事実からは採集生活の一端を伺い知れ、食料用として集積されたものと考えられる。

2 弥生時代後期～古墳時代初頭

検出された堅穴住居跡は1軒のみであるが、調査結果から調査区東側へ遺跡が広がる可能性は高く、複数の住居が存在した小規模な集落跡であったと考えられる。集落の成立時期は、出土した遺物により弥生時代後期から古墳時代初頭と考えられる。SA1は大半が削平された状態であったため、全容の把握には至らなかった。また、残存するプランからは複数の長方形の張り出し部が確認できるが間仕切りは持たず、構造的に花弁状住居とは断言できない状況である。このほか、床面直上ではスダジイの炭化材が出土しており、SA1は焼失住居跡であると判断している。

周辺の弥生時代後期遺跡としては初頭の又猪原遺跡、後半の境ヶ谷第1遺跡、末の岩山遺跡・中原遺跡・新別府下原遺跡などの調査事例がある。特に、新別府下原遺跡では後期末の堅穴住居跡が7軒確認されており、これら全てが方形または隅丸方形に近い平面プランで、間仕切りを持たない遺構である。また、東九州自動車道に伴い調査を実施している木戸平第2遺跡で堅穴建物跡（住居跡か）が確認されるなど、都農町においては弥生時代後期以降に集落が増加する傾向が伺え、当遺跡もこの範疇に属するものと考えられる。

遺物について

出土した土器はSA1の時期に前後するもので、後期～後期末の古墳時代への過渡期である庄内式併行期の土器のほか、一部は古墳時代初頭に位置付けられる

土器が出土した。

ここでは、瀬戸内・畿内系の土器、特に免田式長頸壺について取り上げてみたい。この土器は弥生時代後期前半から末期まで存続する土器で、胴部がソロバン玉状に屈曲し、特徴的な重文が施文される長頸壺である。残念ながら遺物包含層中からの出土であるが、同グリッドでは瀬戸内系土器の特徴をもつ584が出土しており相伴するものと考えられる。石川悦雄氏はこの土器の特徴として、野尻町大萩遺跡を境として大淀川上流域と下流域で、胎土及び色調が明確に異なると指摘している。そのうえで、下流域のものは黄褐色を呈し焼成も軟質であり、重文の形態については「下向きの重文もしくは、平行沈線を挟んで上下に波状文的に施文されること」としており、当遺跡で出土した資料にも該当する特徴である。都農町内での出土例は現在のところこの資料のみであり、新別府下原遺跡ではA-1区1号堅穴住居跡から胴部がソロバン玉状に横に張る長頸壺が出土しているが、重文は施されない。当地域の瀬戸内・畿内系文化の流入を考慮するうえで重要な資料である。

石器は磨製石鏃3点を得た。このうち610は有茎式の磨製石鏃であり、宮崎県での出土例の少ない資料である。また、609は緑色頁岩製であり、周辺の遺跡では新別府下原遺跡、日向市東郷町の樋田遺跡、川南町の尾花A遺跡などで出土している。しかし、当遺跡ではこの剥片素材が出土しない点を勘案すると、石器の消費地であったと考えられる。なお、水田耕作に必要な石器類は出土していない。当時も現在の土地活用にみられるように水の利便性が良好な環境にあったと想定できるが、調査結果から当時の生業について言及できる状況に至らなかった。

3 古代以降

遺構は確認できなかった。出土した遺物や周辺住民への聞き取り調査などから、現在の地形へと続く土地利用の原点は近世以降と考えられる。

4 尾鈴山酸性岩類の利用について

尾鈴山酸性岩類は門川町の遠見半島から尾鈴山地まで分布するおよそ1,500年から始まる火山活動により

噴出した溶岩が凝固したものの総称である。内野々遺跡付近はこの尾鈴山酸性岩類層が侵食された開折扇状地上に立地するため、比較的容易に入手が可能な環境にある。また、当遺跡の北端に小規模河川が存在することは、居住地として、かつ尾鈴山酸性岩類の採取地として最適な環境であったに違いない。

調査の結果検出した集石遺構は長期の時間的空白を挟むに関わらず、利用する石材は尾鈴山酸性岩類にほぼ限定される。また、磨石や台石などの礫石器にも石材としての利用が多く見られることから、生業に関連した使用頻度の高い遺構・遺物に対し労せず獲得できた石材を多用する事は想像に難くない。

さて、宮崎県下で尾鈴山酸性岩類の利用について触れた論考は、児湯郡高鍋町に位置する唐木戸第4遺跡や川南町に位置する市納上第2遺跡の発掘調査報告書に新しい。この中で尾鈴山酸性岩類の剥片を石器として利用する様相が認識され、県内遺跡での出土例を集成している。特に、市納上第2遺跡では縄文時代後期から弥生時代の包含層から尾鈴山酸性岩類の剥片が多量に出土し、多数の接合資料を得ている。また、発掘調査において、尾鈴山酸性岩類の礫層を確認し、遺跡周辺でも礫層・露頭が確認できることなどから、原産地遺跡の可能性があるとしている。では、本遺跡はどうかというと、遺跡の立地・環境、出土層位、石器利用などの観点からも多くの共通点を見出すことができ、尾鈴山酸性岩類の原産地遺跡といえる。さらに、課題とする点も同様で、剥片の出土量に比べて製品の出土が圧倒的に少ないことも挙げられる。つまり、労力を割いて剥片を作出する意図が不明確であり、疑問が残る結果であった。尾鈴山酸性岩類に限らず、原産地遺跡の石器組成を元に、更なる検討が必要であろう。

5 粗製剥片石器について

ここでは、出土した石器について発掘調査・整理作業時に気付いたことを触れたい。砂岩・尾鈴山酸性岩類製の粗製剥片石器については、計199点確認しており、出土層位や共存する土器から考慮して、縄文時代後期の遺物と思われる。形態的に同一規格であるが、使用痕が全く見られない遺物も多く、通常の剥片との分類が困難な場合が多い。宮崎県下で同様の資料に着目し

た報告として、蔵座村遺跡や吉牟田遺跡が挙げられる。蔵座村遺跡ではこの石器を「蛤形剥片石器」と呼称し、宮田栄二氏の呼称する「鎌形剥片石器」に類似するものとして、その機能については不明としながらも削器に近い使用方法を推定している。なお、宮田氏は鎌形剥片石器を植物質食料の採集・収穫あるいは生産に関与する遺物としての位置付けを考えている。しかし、これらの報告では石器を縄文時代早期に比定しており、当遺跡の推定時期とは異なる。一方で、吉牟田遺跡では縄文時代後期～晩期の遺物包含層であるVb～IV層（中世までの遺物を含む）にかけて「粗製剥片石器」が出土しており、同層から出土した土器の特徴からこの石器は縄文時代後期中葉から晩期にかけての遺物と考えられることから、時間的には概ね一致する。また、剥離工程・剥片形態からI～IV類に分類しており、I類の中に当遺跡で出土した粗製剥片石器I類に類似点が見られる。すなわち、砂岩を主体とした剥片であること、表面全体に自然面を残す第一剥片であること、明確な使用目的がみあたらないことなどである。これらの石器は、発掘調査においてかなりの割合で出土していると思われるが、出土量が少量なために単なる剥片として特別視されないことが多く、報告例はわずかである。そのため、現時点では石器としての使用方法は不明確な点が多い。

当遺跡で出土した粗製剥片石器は、前述のとおり刃部に組織的な剥離を有するものや潰れが確認できるものなどがあることから、多目的な刃器としての使用が考えられる。そして、剥離・使用痕の無いものについては、以下の三点を想定している。第一に、刃器の替刃としての剥片である。現在使用している折れ刃型のカッターナイフのように使用の結果欠損したり、切味が悪くなった場合に切り換えたりするための石器である。第二に、石器素材としての剥片である。この石器を使用した何らかの作業には砂岩製の石器が適しているが、内野々遺跡周辺では母岩を採取できないことから、遺跡付近の河川の下流域で剥片に加工した上で遺跡内に持ち込んだ可能性がある。その上で、用途別に二次加工を施すことが考えられる。第三に、土器の器面調整具としての使用である。会田容弘氏は縄文土器の調整具としての石器利用として、小型磨石をミガキ

工具、刃部の摩耗した剥片をケズリ工具の可能性があると指摘している。また、蔵座村遺跡で「蛤」の名を冠するように、当遺跡でも蛤型の形状を呈するものがみられ、453のように表面全面に磨減面を有する剥片があるなど、貝殻と同様あるいはこれに準じる工具としての可能性を考えている。しかし、これらは実証に至る確認作業を行っていないため、あくまで可能性の提示に留めたい。

この剥片の作出については、接合資料がわずかであることから上記第二が想定されることの他に、129や534～541など磨石や石錘の機能に必要な無剥離面を有する石器にみられるように、製品から剥離することが考えられる。これは、母岩(円礫・楕円礫)→磨石・敲石(凹石)→粗製剥片石器の石核→石錘(石核→石錘は逆転することもあるであろう)という石器としては時期、用途についても不明確な点が多く、今後検討すべき課題の多い遺物である。

5 土器圧痕について

土器圧痕の調査の結果、フローテーションでは得られなかった動植物遺体の痕跡を検出することができた。特筆すべきはマメ科の圧痕(資料7、11、13、27～29、38、65、84)であろう。小畑弘己氏によると、縄文時代において栽培化の可能性のあるマメ科種子についてはダイズ属とアズキ亜属のみ考慮すればよいとした。さらに、これらはヘソの構造、特に厚膜の有無によってダイズ属・アズキ亜属を同定することが可能であるとしている。このことから、資料7・13はダイズ属種子、資料27～29・39・65・84はアズキ亜属の種子圧痕と考えられる。また、38・62についてはヘソの構造が不明確な圧痕資料であるが、前者はダイズ属、後者はアズキ亜属の可能性がある。

縄文時代における初期農耕論が展開されるなかで、これらの資料はレプリカ法導入により蓄積が進み、栽培の可能性を秘めたものとして有力視されている。その意味でも、当遺跡で得られた資料の蓄積は有意なものである。また、宮崎県でレプリカ法を実施した遺跡は現在までに37遺跡を数え、資料数は増加しつつあるが、同定まで至らない資料も多い。当センターのみで

実施するには限界があり、今後、当遺跡の資料を含めて、他機関と連携しつつ作業を進める必要性があろう。

参考文献

- 都農町編 1998『都農町史』通史編
前迫 亮一 1992『異系統土器文化の一接点 一南九州における縄文時代後期中葉の一樣相・丸尾式土器の提唱』『南九州縄文通信』No.6
2004『南の北久根山式土器-干道遺跡出土資料の位置づけ』『鹿児島考古』第38号
富田 浩一 1996『北久根山』肥後上代文化研究会
金丸 武司 2006『本野原遺跡三』『宮崎市文化財調査報告書』第53集
2009『九州の縄文後期集落』『考古学ジャーナル』584
石川 悦雄 1983『日向における外來系土器の伝播とその地域性(1)-瀬戸内・畿内系土器の流入とその展開』『研究紀要第九号』宮崎県総合博物館
甲斐 貴光 2002『蔵座村遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第53集 宮崎県埋蔵文化財センター
今嵐屋 毅行・都成 量・永田 和久 2006『下耳切第3遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第125集 宮崎県埋蔵文化財センター
立神 勇志・岡田 論 2008『市納上第2遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第170集 宮崎県埋蔵文化財センター
柳田 裕三 2007『吉牟田遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第154集 宮崎県埋蔵文化財センター
小畑 弘己 2008『マメ科種実同定法』『植東史時代の穀物3』熊本大学
2010『縄文時代におけるアズキ・ダイズの栽培について』『先史学・考古学論』V 上巻 龍岡考古会
水ノ江 和同 2006『九州の縄文後期集落』『西日本縄文文化の特徴』第1回 西日本縄文文化研究会
新東 晃一 2005『南九州の縄文時代早期土器形式の諸問題』『南九州の早期前葉の貝殻式系陶器土器と早期前葉の土器形式列について』『西日本縄文文化の特徴』第1回 西日本縄文文化研究会
宮田栄二 1991『鎌形剥片石器-南九州縄文早期の特殊な石器』『南九州縄文通信』No.4 南九州縄文研究会
林 潤也 2002『北久根山式土器をめぐる諸問題』『四国とその周辺』の考古学』大塚徹夫先生古稀記念論集刊行会
会田 容弘 2008『器面調整』『総覧縄文土器』
森田 浩史・金丸 武司 2006『本野原遺跡三』『宮崎市文化財調査報告書(田野町文化財調査報告書第53集)』宮崎市教育委員会
宮崎県教育委員会編 1991『天神河内第1遺跡』『大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県教育委員会
相美 伊久雄 2010『九州南部における中前期土器の現状と課題』『第20回 九州縄文研究会佐賀県大会発表要旨・資料集』九州縄文研究会

第三章 内野々第2・第3遺跡

第1節 遺跡の立地と環境

内野々第2・第3遺跡は、宮崎平野北部に位置する尾鈴山東麓の山間地を流れる心見川と支流沿いに形成される小さな段丘上(椎原面)に立地する。この小段丘は開析谷や小河川によって寸断され、やつで状の丘陵へと発達している。これらの丘陵は、内野々第4遺跡が立地する狭小な沖積地に向けて細長い尾根線を形成する。この尾根線上に内野々遺跡第2・第3遺跡が位置する。

本章では、内野々第2遺跡と内野々第3遺跡の調査成果を一括して報告する。内野々第3遺跡では遺物のみの出土であったことと、内野々第2・第3遺跡間には小さな開析谷で隔てられるが地形的には一連の遺跡と捉えられることによる。

第2節 発掘調査と整理作業の経過

内野々第2遺跡の発掘調査は、平成21年12月7日から平成22年1月25日にかけて、内野々第3遺跡は平成22年5月17日から同年5月24日まで期間で実施した。整理作業及び報告書作成作業は、平成22年4～10月の期間で当センターにて進めた。

第3節 内野々第2遺跡

1 調査の概要

遺構や遺物包含層の残存状況や層序を把握する必要から調査区全体にトレンチ(以下Trと略称)を設定し、重機及び人力による掘削作業を進めた。丘陵尾根部の大半は基本層序(第1表)でいうVI層の中途まで失われた上に厚くII層が堆積する状況であった。II層は昭和期の土地造成に伴う盛土である。斜面部はIII層(造成以前の表土)以下の各層が残存するが、層厚は薄く遺物の包含は認められなかった。

遺構と遺物が良好に残存していたのは、内野々第3遺跡に隣接する尾根鞍部付近(第1図)で、さらに拡張して精査を行い、V層において縄文時代早期の遺構や遺物を認めることができた。VI層以下の堆積層では、遺構や遺物は認められなかった。

層番号	層名
I	表土
II	造成土
III	黒色土(旧表土)
IV	K-Ah層
V	にぶい褐色土(縄文早期)
VI	灰褐色土
VII	明褐色土
VIII	裸層/岩盤

第1表 内野々第2遺跡の基本層序

なお、調査区第2トレンチ(2Tr)の土層壁面(第2図)にて各層より堆積物を採取し、テフラ分析を実施した。分析結果の詳細は第5節に掲載した。

2 縄文時代早期の遺構と遺物

集石遺構は3基、基本層序のVI層直上において検出された。遺物はV層中とVI層の直上にかけて出土した。出土遺物の内容は縄文土器深鉢と石器類である。石器類は剥片や石核など合計35点が出土した。これらの遺構と遺物は、検出された層位と土器の年代から縄文時代早期に位置付けられる。

集石遺構(第3図)は、3基がまとまりをもって検出された。大きさは長軸長0.4～0.7mと小ぶりでS I 2のみは掘り込みを有する。遺物はS I 1より磨石(第5図の5)、S I 2で石核・剥片(同図6・7)、S I 3からは剥片(同図8・9)が出土した。また、集石遺構を中心とする散礫も認められ、長軸長6m、短軸長4mにわたり赤化した破砕礫が分布していた。破砕礫は、集石遺構と同じく砂岩や尾鈴山酸性岩類で、段丘礫層の構成礫と同じである。

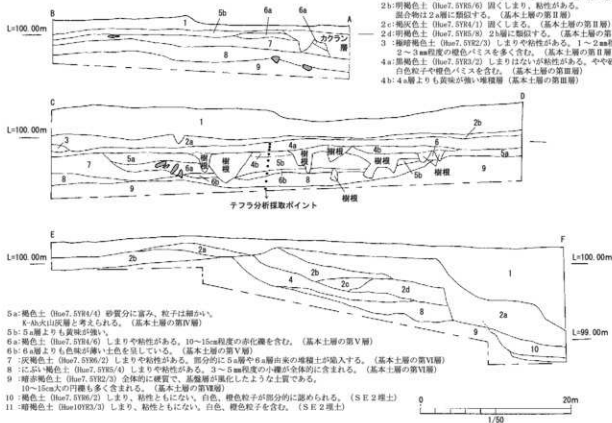
遺物は、尾根鞍部(平坦面)上に点在している。出土分布は散礫の範囲とも重なる(第8図)。

縄文土器は深鉢が出土したが、小破片化が著しく2点のみ図化・掲載した(第4図1・2)。2は縄文時代早期後半の田村式土器相当と考えられる。

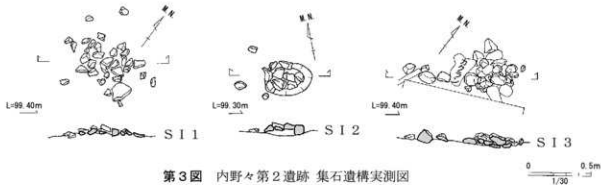
石器は、石核(第5～6図12・15～18)と剥片(第7図20～26)を主体として出土している。接合関係は



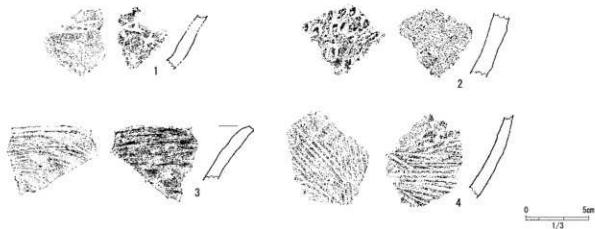
第1図 内野々第2遺跡 調査区平面図



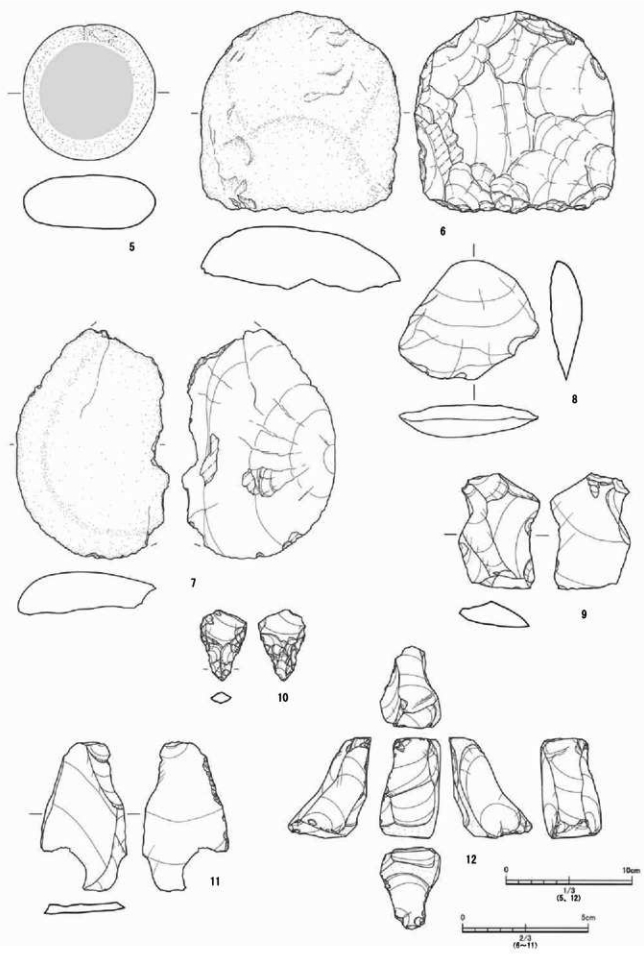
第2図 内野々第2遺跡 調査区土層断面図



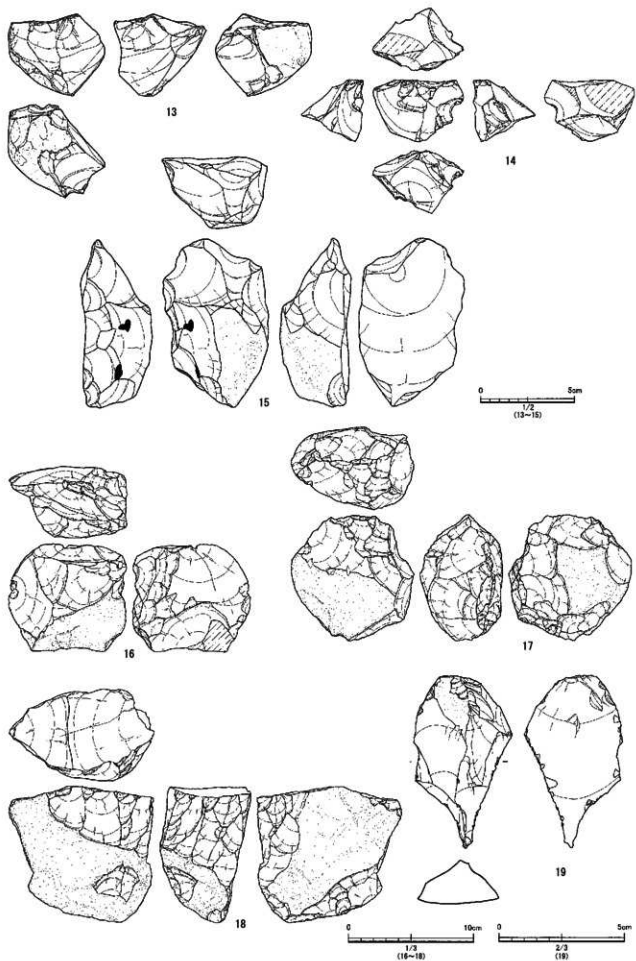
第3図 内野々第2遺跡 集石遺構実測図



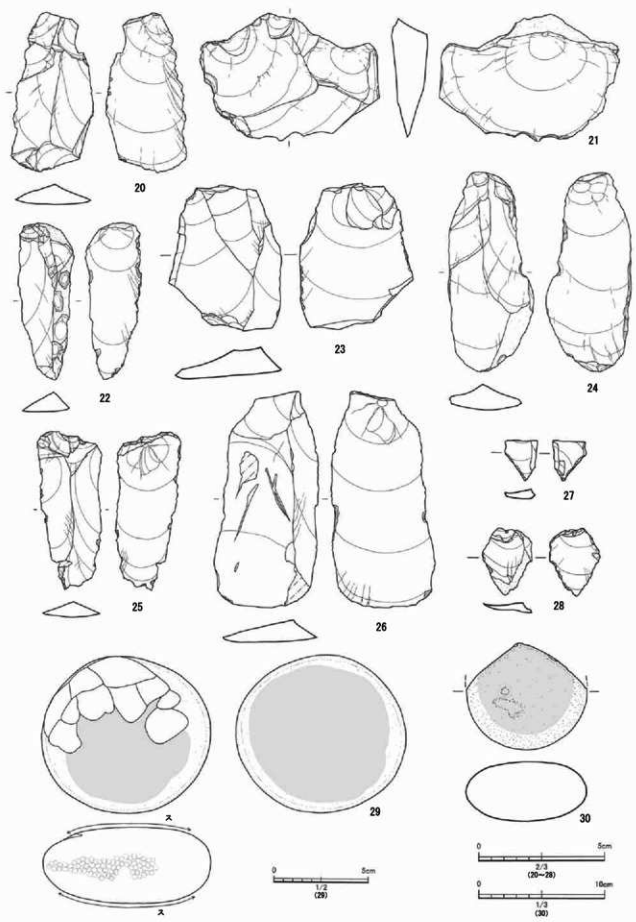
第4図 内野々第2遺跡 土器実測図



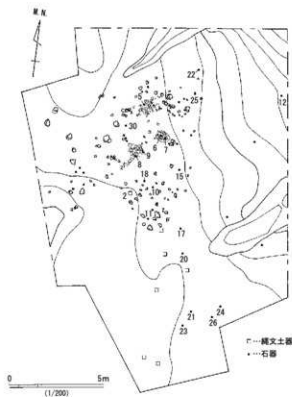
第5図 内野々第2遺跡 石器実測図(1)



第6図 内野々第2遺跡 石器実測図(2)



第7图 内野々第2遺跡 石器実測图 (3)



第8図 内野々第2遺跡 出土遺物分布図

められなかった。石材は、流紋岩・頁岩（珪質）・ホルンフェルス・尾鈴山酸性岩類で、集石遺構出土の石核・剥片類も同様である。剥片類は縦長剥片が多く不定形ものは少ない。

この石器相は、縄文時代早期というよりも後期旧石器時代に所属する可能性があることを示す。しかし、縄文土器と同一層位の出土であることを尊重して縄文時代早期の石器としておきたい。

その他、石錐（第5図10）、微細刺彫のある剥片（同図11）、磨石（第7図29・30）も出土した。

3 その他の遺構と遺物

溝状遺構が2条検出された。基本層序のIV層面にて東側斜面に向かって延びる（SE1・2）。埋土中より石器類や縄文時代後期の土器、近世陶磁器等が出土した。溝状遺構は人為的な遺構ではなく、丘陵を開析する谷の頂部と考えられる。

遺物は、溝状遺構および調査区内から12点出土した。このうち7点を図化・掲載した。第4図の3・4は溝状遺構より出土した縄文土器深鉢で、縄文時代後期に属する。また、溝状遺構出土の石核（第6図13）や調査区内より出土した石核（同図14）や剥片（同図19）等は、V層出土石器と石材や刺彫調整の手法が共通している。（今塩屋）

第4節 内野々第3遺跡

調査にあたって、まず遺構や遺物包含層の状況を把握するために先行トレンチを設定したが、丘陵頂上部が大きく流出・削平を受けており、II層直下が基盤相のIX層となった。内野々第2遺跡との境にある谷部分ではIII～VII層の堆積が認められた。

このVII層中からはチャート製剥片2点、砂岩製剥片1点、頁岩製磨製石錐1点、土器片9点が出土し、石器類を全て図化・掲載した（第9図）。（谷口）

層番号	層名
I	暗褐色粘質土（表土）
II	黄褐色土（造成土）
III	黒褐色シルト土
IV	褐色粘質土
V	暗褐色シルト土
VI	黒色粘質土（ブロック状にK-Ahが混入）
VII	黒色粘質土（遺物包含層）
VIII	灰黄褐色粘質土
IX	浅褐色粗砂を含む礫層

第2表 内野々第3遺跡の基本層序

第5節 自然科学分析

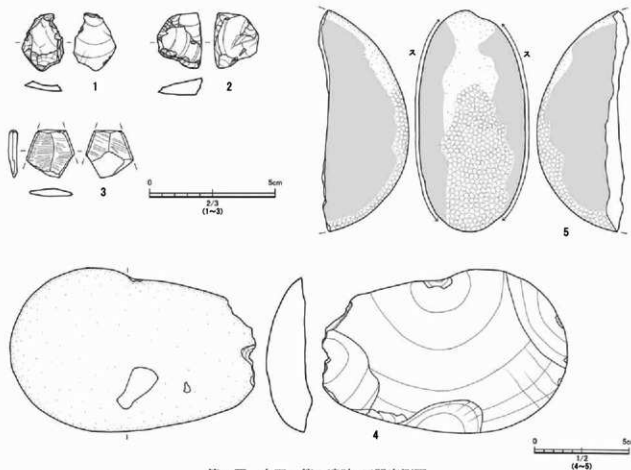
内野々第2遺跡の調査では、降灰層準を推定して遺物包含層の年代や層序に関する基礎的な情報を得るために、縄文時代早期の遺物包含層とその前後の堆積層から試料を採取して層序対比の指標となる広域テフラ（火山灰）の分析を委託実施した。

この分析結果を一部抜粋・編集して以下に記す。

a) 試料

調査区2Tr土層断面より9点の試料を採取した。基本土層のIII～VII層と対応する。V層およびVI層には、発掘調査見および試料の肉眼観察により火山ガラスの含有が認められた。

さらに、V層以下の各層には径数ミリ程度の灰白色岩片が微量～少量含まれている。これは、尾鈴山地を構成する溶結凝灰岩などの基盤岩由来するものと考えられる。



第9図 内野々第3遺跡 石器実測図

掲載番号	器種	部位	出土層位	取り上げ番号	調整		色調		粘土	構成
					外面	内面	外面	内面		
1	深鉢	胴部	V層	19	貝殻糸痕文	ナデ	橙 (7. SYR6/6)	橙 (10YR/7.4)	3mm以下の灰白色、1mm以下の褐色・透明光沢粒を少し含む	良好
2	深鉢	胴部	V層	32	横内押型文	ナデ	橙 (SYR6/6)	橙 (7. SYR7/6)	5mm以下の灰白・にぶい赤褐色、3mm以下のにぶい褐色・黒色光沢粒を含む	良好
3	深鉢	口縁	SE2	-	貝殻糸痕文	にぶい横	にぶい横 (7. SYR5/4)	明赤褐 (SYR5/6)	2mm以下の灰白・褐色、1mm以下の透明光沢粒を含む	良好
4	深鉢	胴部	SE2	-	貝殻糸痕文	横灰	横灰 (SYR4/7)	橙 (SYR6/6)	6mm以下の赤褐色、3mm以下の透明褐色、2mm以下の灰白色・透明光沢粒を含む	良好

第3表 内野々第2遺跡 縄文土器観察表

掲載番号	器種	石材	出土層位	度量				取り上げ番号
				長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	
5	磨石	尾崎山酸性岩類	S11	10.7	10.3	4.2	721.5	1
6	石核	ホルンフェルス	S12	7.9	8.9	2.6	196.7	-
7	剥片	尾崎山酸性岩類	S12	9.1	6.1	1.7	102.9	-
8	剥片	流紋岩	S13	4.8	5.6	1.3	16.7	-
9	剥片	砂岩	S13	4.6	3.2	1.0	12.1	-
10	石核	流紋岩	V層	2.6	1.6	0.5	2.1	2
11	骨髄刺繍ある剥片	埴貫頁岩	V層	5.9	3.9	0.4	12.1	18
12	石核	埴貫頁岩	V層	5.6	2.6	2.6	59.4	21
13	石核	埴貫頁岩	SE2	4.2	4.7	4.3	29.7	-
14	石核	埴貫頁岩	調査区一帯	3.2	4.5	2.7	20.5	-
15	石核	ホルンフェルス	V層	8.9	5.6	3.0	190.8	23
16	石核	尾崎山酸性岩類	V層一帯	8.5	9.2	5.6	465.8	-
17	石核	尾崎山酸性岩類	V層	9.9	9.5	6.5	644.1	5
18	石核	尾崎山酸性岩類	V層	10.3	11.3	11.5	971.0	25
19	剥片	流紋岩	調査区一帯	6.6	4.9	1.9	37.1	-
20	剥片	流紋岩	V層	6.2	3.1	0.8	15.9	22

第4表 内野々第2遺跡 石器計測表 (1)

編號番号	器種	石材	出土層位	法量				取り上げ番号
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
21	割片	流紋岩	V層	4.9	7.0	1.3	29.1	15
22	割片	流紋岩	V層	6.1	2.0	0.9	11.7	20
23	割片	流紋岩	V層	5.8	4.5	1.2	20.1	16
24	割片	ホルンフェルス	V層	7.9	3.3	1.3	31.7	13
25	割片	ホルンフェルス	V層	6.2	2.3	0.7	10.9	29
26	割片	ホルンフェルス	V層	8.5	4.0	0.9	26.7	14
27	割片	チャート	調査区一層	1.3	1.6	0.4	3.1	-
28	割片	流紋石	調査区一層	2.9	1.9	0.4	4.2	-
29	礫石	砂岩	V層一層	8.3	9.0	4.0	412.5	-
30	礫石	流紋山酸性岩類	V層	8.3	9.4	4.7	507.3	1

第5表 内野々第2遺跡 石器計測表(2)

編號番号	器種	石材	出土層位	法量		
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)
1	割片	チャート	III層	2.3	1.7	0.6
2	二次加工割片	チャート	III層	2.2	1.8	0.6
3	磨製石鏃	流紋	III層	1.9	1.9	0.5
4	割片	砂岩	III層	8.6	13.0	2.1
5	磨製石	流紋山酸性岩類	III層	11.0	4.5	5.0

第6表 内野々第3遺跡 石器計測表

b) 分析方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定した。火山ガラス、斜方輝石および角閃石の屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

c) 分析結果

○重鉱物組成および火山ガラス比 (第10図)

重鉱物組成は、III層からVII層まで不透明鉱物の多い組成であるが、VII層下部には微量の斜方輝石が含まれ、III層上部まで上位に向かって斜方輝石が増加し、不透明鉱物が減少する傾向が認められる。また、微量の単斜輝石も伴われ、量は少ないが斜方輝石と同様に上位に向かって増加傾向を示す。

火山ガラス比では、VII層下部に微量のバブル型が含まれ、III層上部まで上位に向かって増加する傾向が認められる。軽石型は、バブル型よりも量比が少ないが、同様にVII層下部からV層上部まで上位に向かって増加する傾向が認められる。IV層以上の火山ガラスには、褐色を帯びたものも少量認められる。

○屈折率 (第10図)

上述した遺跡の重鉱物組成および火山ガラス比結果に基づき、主に火山ガラスと斜方輝石屈折率の測定対

象とした。火山ガラスの屈折率は、III層上部からVII層下部まで、レンジは概ね $n_1.505-1.510$ 、モードは $n_1.507-1.509$ である。斜方輝石の屈折率は、V層上部からVII層中部まで、概ね $n_1.705-1.711$ というレンジを示す。

d) 考察

分析結果から、III層およびIV層には火山ガラス質テフラが含まれていることは明らかである。

これらの火山ガラスは、V層上部からVII層下部までほぼ同様の屈折率を示したことから、各層の火山ガラスは同一のテフラに由来するものと判断される。この火山ガラスの濃集層準は明瞭ではないが、早津(1988)の言う濃集層準の下限、すなわち降灰層準はIV層中部と推定される。

その火山ガラスは、K-Ahに由来すると考えられる。すなわちK-Ahの降灰層準はIV層中部にあると推定される。この推定はV層およびVI層上面を縄文時代早期遺物包含層とし、VI層以下を旧石器時代相当層とする発掘調査所見とも整合する結果といえる。

なお、VII層下部の火山ガラスではATに由来すると見られる火山ガラスが検出されなかったことから、ATの降灰層準はVII層下部よりもさらに下位にあることが推定される。

さらに、III層からVII層までの斜方輝石については、ほぼ同様の屈折率を示し、Kr-Kbに由来する斜方輝石が混在しているものと推定される。(今塩屋)

重鉱物・火山ガラス

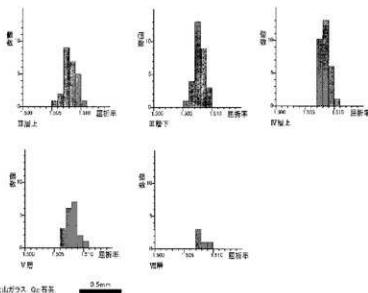


内野々第2遺跡 重鉱物 IV層上



内野々第2遺跡 K-Anの火山ガラス 下部下

Qz: 石英
Cpx: 輝石
Hbl: 角閃石
Cp: 輝石
Vg: 火山ガラス
Qtz: 石英
Pl: 斜長石



第10図 内野々第2遺跡 自然科学分析関連図

文献

- 福沢仁之, 1995, 天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物, 第四紀研究, 34, 135-149.
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別, 地質学雑誌, 101, 123-133.
- 早津賢治, 1988, テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフラコロノジー—ATIにまつわる議論に關係して—, 考古学研究, 34, 18-32.
- 池田晃子・奥野 亮・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫, 1995, 南九州, 始良カルデラ起源の大規模降軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代, 第四紀研究, 34, 377-379.
- 木村克己・巖谷敏光・三村弘二・佐藤喜男・佐藤信生・鈴木祐一郎・坂巻幸雄, 1991, 尾鈴山地帯の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)地質調査所, 137p.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗, 1987, 始良Tn火山灰の14C年代, 第四紀研究, 26, 79-83.
- 宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎, 2001, 始良Tn火山灰のC-14年代のクロスチェック(演習), 地球惑星科学国際学会合同大会予稿集(CD-ROM), 2001, Qe-010.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦, 1993, 四国沖ヒストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデム加速器質量分析法による浮遊性有孔虫の14C年代—, 地質学雑誌, 99, 787-798.

第6節 まとめ

内野々第2遺跡では、尾根上のわずかな平坦面に部分に集石遺構と遺構群を中核として環状に分布する赤化礫が認められた。出土遺物から縄文時代早期後半頃の時期が与えられる。

この縄文時代早期における遺跡の様態は、都農川以南のテーブル状台地で空間の開けた地形とは異なる規模と立地のあり方を示す。今回の調査成果は、狭隘な沖積地と丘陵尾根が卓越する地形での遺跡立地とその構造の一端を明らかにすることができた。

東九州自動車道建設に伴う発掘調査により、都農町内における縄文時代早期の遺跡事例は大きく増加している。内野々第2遺跡を含む内野々遺跡群でも、本書の第II・IV章で報告された塞ノ神式土器や押型土器を伴う集石遺構の検出例が知られている。

さらに内野々第2遺跡のような丘陵尾根部の遺跡のみならず、小河川沿いの河岸段丘面上(内野々遺跡)や沖積地と丘陵部の接点に広がる緩斜面上(内野々第4遺跡)といった立地の多様さも把握可能となった。これは縄文時代早期の人間活動の広範さを示すとともに、その実態と復原が今後の課題となる。

内野々第3遺跡では、丘陵頂部平坦面に遺構や遺物の存在が予想されたが、かなりの削平を受けていた。しかし、調査区北斜面から谷部での堆積土中より土器片と石器が得られた。これらの遺物はかつて調査区内に後期旧石器時代～弥生時代の遺物を包含していたことを示し、調査区周辺には遺構や遺物が存在する可能性も指摘できる。(今塩屋・谷口)

第IV章 内野々第4遺跡

第1節 発掘調査の概要と経過

内野々第4遺跡は、都農町大字川北字宮原に所在する。本遺跡は、内野々遺跡～同第3遺跡と平山下原遺跡の立地する丘陵部に挟まれた狭隘な平坦地に位置している。現況は水田面が広がるが、本来は南東から北西へと下る斜面地や谷地形で、耕地整理事業に際して大規模な造成がなされたという。

現地調査は平成21年5月11日から開始し、調査箇所を引き渡し待ちや工事設計の変更等による中断期間を挟みながら平成22年1月7日に終了した。

調査は、まず調査対象区全体の土層堆積状況をトレンチで把握した。さらに遺物や遺構や集中する箇所は、面的に広げて精査する順序で進めた。

その結果、縄文時代早期と前期の集石遺構と遺物が確認された。特に球状耳飾の出土は重要な調査成果の一つである。さらに、造成土や表土中も、石鏃や火打石等といった他種多様な遺物が出土した。

第2節 整理作業の方法と経過

整理作業は平成22年1月から9月まで当センターにおいて実施した。なお、石器の一部については実測委託をしている。

報告書に掲載する遺物の選択にあたっては、包含層はもとより表土・造成土中出土のものも対象とした。これは包含層出土遺物の補足資料や遺跡の性格や位置づけを考察するため、必要な遺物を抽出し図化・掲載した。

第3節 基本層序と土層堆積

I層(表土)・II層(造成土)中には石鏃や土器といった遺物が多く混入する。III層は、アカホヤ火山灰の二次堆積層で、縄文時代前期を中心とした遺物が包含している。さらにIII層より下は暗褐色土層(IV層)で、黒みが強い上層をIV a層とした。IV層は縄文時代早期の遺物包含層で集石遺構も検出された。

V層やVI層は後期旧石器時代およびそれ以前の堆積層で、無遺物層である。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

1 概要

調査対象区の一部において、アカホヤ火山灰二次堆積層(III層)より下層の暗褐色土層(IV a・IV b層)中から遺物の出土が認められた。さらに面的に精査した結果、IV a・IV b層それぞれに集石遺構が検出され、土器・石器類も出土した(第1・2図)。

遺物の時期と包含層の層序的な対比から、IV a・b層は縄文時代早期の遺物包含層と判断される。

IV層堆積時は、土層断面の観察から南西から北東へかけて緩やかに下る斜面を形成する地形であったことが考えられる。

ここでは、IV a層とIV b層で確認された遺構と遺物について以下に記述する。

2 IV b層の遺構と遺物

集石遺構(S 1)

調査区の北隅付近で集石遺構を1基(S I 2)が検出された(第4・6図)。規模は長軸長約2m、短軸長約1mで、構成礫は南北方向に楕円形状に広がる。礫の大きさは、ほぼ人頭大以下からこぶし大である。石材は、尾鈴山酸性岩類と砂岩が中心である。なお、掘り込みや配石、炭化物は認められていない。

なお、第6図中の■マークは、集石遺構を構成する赤化礫の分布を示す。また、▲はそれ以外の赤化礫の分布を示す。

出土遺物(第7～第9図)

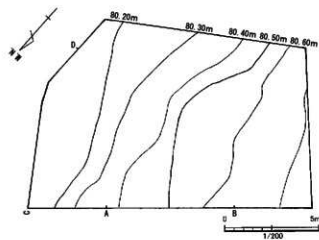
遺物は、IV b層より縄文土器片36点、打製石鏃5点、削器1点、石核2点、砕片・剥片71点(接合資料を含む)、搬入礫2点が出土した。このうち15点を図化・掲載した。第5図は土器の平面分布図、第6図は石器の平面分布図である。

縄文土器 1～2は深鉢である。1は胴部で外面は貝殻条痕文である。内外両面から補修孔かと思われる孔が穿たれているが、未貫通である。2は無文土器の胴部である。

石器 3～7は打製石鏃であり、4以外はいずれも小



第1図 調査区の位置図



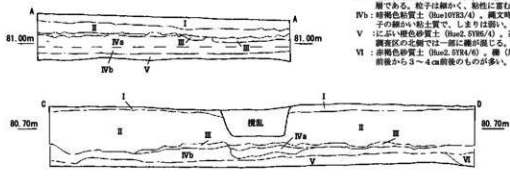
第2図 調査区平面図

層別	層名	色調	備考
I	耕作土	—	—
II	造成土	—	—
III	黄褐色砂質土	10YR 5/6	K-Ah火山灰二次堆積層
IVa	暗褐色土	10YR 3/3	縄文時代早期層
IVb	暗褐色粘質土	10YR 3/4	—
V	にぶい橙色砂質土	2.5Y 6/4	後期旧石器時代相当層
VI	赤褐色砂質土(裸混)	2.5Y 4/6	—

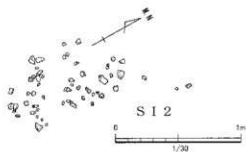
第1表 基本層序

土層の内容

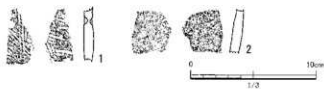
- I : 木田の耕作土。下部には遺物を含む。
- II : 造成土。下部は層上との層界が不明瞭な部分があり、遺物を含む。
- III : 黄褐色砂質土 (Mn10YR5/6)。K-Ah火山灰の二次堆積層で、縄文時代前期以降の遺物を含む層である。非化石を含む。K-Ah由来の細かい粒子が主体である。IVa層との層界が不明瞭な箇所がある。
- IVa : 暗褐色土 (Mn10YR3/3)。IVb層よりも黒みが強い。縄文時代早期の遺物を含む層である。粒子は細かく、粘性に重むがしよりは弱い。非化石や礫が混入する。
- IVb : 暗褐色粘質土 (Mn10YR3/4)。縄文時代早期の遺物を含む層である。水分に重む粒子の細かい粘土質で、しよりは弱い。礫や非化石が混入する。
- V : にぶい橙色砂質土 (Mn2.5Y6/4)。赤色や橙色の目の粗った粗砂が主体である。調査区の北側では一部に礫が混入する。
- VI : 赤褐色砂質土 (Mn2.5Y4/6)。礫 (尾跡山酸性岩類) 主体の層で、直径は15cm前後から3~4cm前後のものが多い。その隙間に赤褐色の砂質土が入り込む。



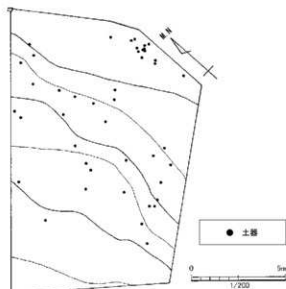
第3図 調査区土層断面図



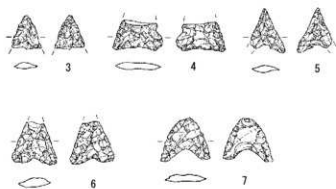
第4図 集石遺構 (IVb層) 実測図



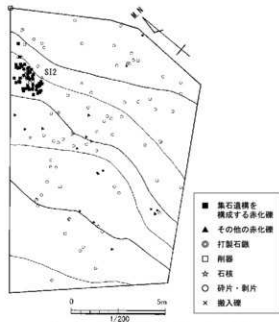
第7図 IVb層出土の土器実測図



第5図 土器出土分布図 (IVb層)

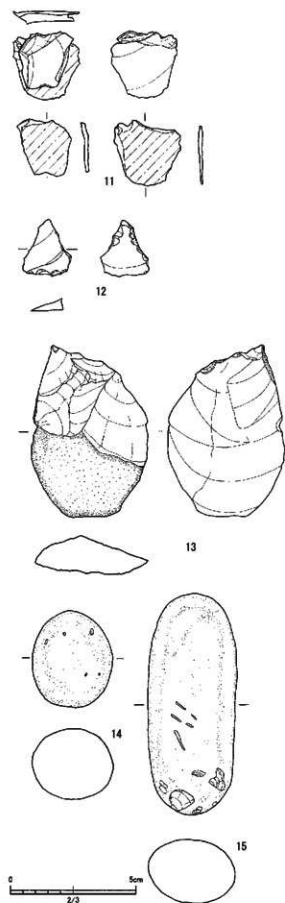


第8図 IVb層出土の石器実測図 (1)



第6図 石器出土分布図 (IVb層)

- 集石遺構を構成する赤化礫
- ▲ その他の赤化礫
- 打製石器
- 附屬
- ☆ 石核
- 碎片・製片
- × 掘入層



第9図 IVb層出土の石器実測図(2)

型である。3～6の平面形は二等辺三角形で、7は正三角形に近いが丸みを帯びた形状である。4～6の基部は浅く、7は深く抉られている。

8はチャート製の削器である。周縁を剥離調整して、さらに下部を刃部として調整している。

9・10は石核である。9は姫島産黒曜石製で、10は珪質頁岩製で節理面や自然面が残る。

11は頁岩剥片の接合資料である。12・13は剥片である。12はチャート製で、側縁に微細な調整が施されるので二次加工剥片の可能性はある。13は砂岩の自然礫を石材とする。

14は尾鈴山酸性岩類の、15は砂岩の搬入礫である。14は磨石に、15は敲石に各々形状が同じだが、ともに使用痕がないため、未使用の搬入礫とみなした。

3 IVa層の遺構と遺物

集石遺構(S1)

調査区の南隅付近で、集石遺構が1基(S11)検出された(第10・12図)。S12とは対角線上の位置にある。規模は長軸長約2m、短軸長約1.5mで、構成礫は北方向に扇形に広がる。礫の大きさや使用石材はS12と同様である。なお、掘り込みや配石、炭化物は認められていない。

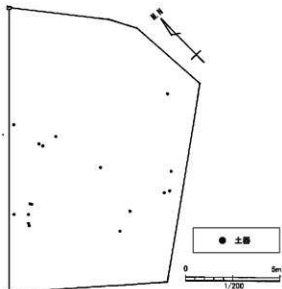
第12図の■マークは、集石遺構を構成する赤化礫の分布を示す。▲はそれ以外の赤化礫の分布を示す。

出土遺物(第13・第14図)

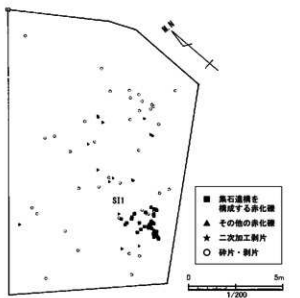
IVa層からは縄文土器片18点、二次加工剥片1点、砕片・剥片41点が出土した。このうち4点を図化・掲載した。第11図は土器の平面分布図、第12図は石器の平面分布図である。

縄文土器 16～18は塞ノ神式の深鉢である。16は口縁部で、外面の隆帯文には刻目が施される。胎土は白色を呈する比較的大きな粒子を多く含む。塞ノ神式でもの古相のタイプと考えられる。17は口縁部である。外面と端部には貝殻腹縁による刺突文が施されている。18は頸部で、外面には横位の貝殻腹縁連続刺文が施される。

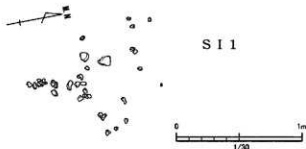
石器 19は二次加工剥片である。剥片に対して、特に裏面に2次的な加工・調整が施されている。チャートに近い質感を持つ珪質頁岩製である。



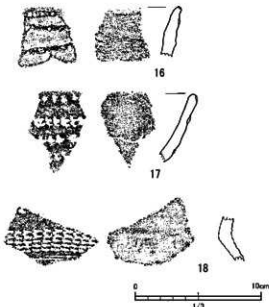
第11図 土器出土分布図 (IVa層)



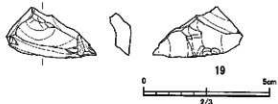
第12図 石器出土分布図 (IVa層)



第10図 集石遺構 (IVa層) 実測図



第13図 IVa層出土の土器実測図



第14図 IVa層出土の石器実測図

視観番号	種別	器種	出土層位	部位	調査		色調		出土	備考
					外面	内面	外面	内面		
1	深鉢	縄文土器	IVa	胴部	斜方向の黒方向具短条横文	斜方向の黒縦条横文	7.5YR5/6橙	10YR2/6銅黄褐	2~3mmの灰色粒をわずかに含む。微細な光沢粒を多く含む。	外面、内面に稀砂痕か(赤貫通)
2	深鉢	縄文土器	IVa	胴部	ナズか(風化が著しい)	ナズか(風化が著しい)	7.5YR5/6銅褐	5YR5/6橙	2mm以下の透明光沢粒を多く含む。1mm以下の灰色光沢粒、1mm以下の黒色光沢粒を少し含む。	
16	深鉢	縄文土器	IVa	口縁	口縁縁部に貝殻破片による二重の刷目、ヨコナズか	ケズリ状のヨコナズ	7.5YR7/6橙	10YR1/4に近い黄褐色	4mm以下の白色粒を多く含む。1mm以下の黒色粒、微細な光沢粒を少し含む。	底ノ神式
17	深鉢	縄文土器	IVa	口縁	口縁縁部に貝殻破片による押圧刷目、貝殻破片の連続刷目、ナズ	横ナズ	7.5YR5/6橙	5YR5/6橙	2mm以下の透明光沢粒を多く含む。1mm以下の灰色光沢粒、灰色粒をわずかに含む。	底ノ神式
18	深鉢	縄文土器	IVa	胴部	横ナズ、貝殻破片の連続刷目、貝殻条横文	横ナズ	7.5YR5/6銅褐	7.5YR7/6橙	2mm以下の透明光沢粒、黒色光沢粒、灰白色を多く含む。	底ノ神式

第2表 IV層出土の土器観察表

発掘番号	出土層位	器種	石材	測定				備考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
3	IVb	打製石鏃	鹿ノ木津産黒曜石	1.5	1.1	0.3	0.31	
4	IVb	打製石鏃	鹿ノ木津産黒曜石	3.1	1.1	0.6	0.73	
5	IVb	打製石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.2	0.6	0.40	
6	IVb	打製石鏃	チャート	2.0	1.6	0.7	1.09	
7	IVb	打製石鏃	安山岩	2.0	1.8	0.8	0.78	
8	IVb	網罟	チャート	5.1	5.2	1.6	40.79	
9	IVb	石塊	姫島産黒曜石	2.7	1.7	1.0	3.83	
10	IVb	石塊	瑠璃貝殻	5.5	4.7	2.4	57.40	
11	IVb	削片	黒岩	2.7	2.6	0.6	3.23	検査資料
12	IVb	削片	チャート	2.3	1.9	0.8	1.85	
13	IVb	削片	砂岩	2.1	4.9	1.9	37.28	
14	IVb	鏃	姫島山麓産燧石	4.2	4.2	2.8	115.90	個人蔵
15	IVb	鏃	砂岩	17.0	4.8	3.8	285.90	個人蔵
19	IVa	二次加工削片	瑠璃貝殻	3.6	2.2	1.2	4.10	

第3表 IV層出土の石器計測表

第5節 縄文時代前期以降の遺物

1 概要

アカホヤ火山灰の二次堆積層(Ⅲ層)中で轟B式や曾畑式土器といった遺物の出土が認められた。Ⅲ層中からは、土器片37点、打製石鏃6点、球状耳飾1点、砕片・剥片99点が出土した。出土レベルはおもにⅢ層の中・下位とⅡ層との層界付近にわかれる。

Ⅲ層は遺物の時期と層序的な対比から、縄文時代前期以降の堆積層と判断される。第15図は土器の平面分布図、第16図は石器の平面分布図である。

2 出土遺物(第17図)

土器 20～23は縄文土器の深鉢、24は浅鉢、25は土師器である。20は口縁部外面に横位の刺突列点文が施され、両面に丁寧な貝殻条痕文がある。轟B式土器と考えられる。21は外面にミズ腫れ状突帯文が施される。22・23は曾畑式土器で、22の外面は縦位と横位の沈線文で区画され、縦位沈線文の間に縦位の刺突文が施される。内面も同様な縦・横位の沈線文による区画に刺突文が施文される。23の外面は縦位で折衷文と思われる「V」字状の沈線文に横位の沈線文を組み合わせて施文されている。以上、20～23は縄文時代前期の土器である。

また、縄文時代晩期の黒色磨研土器(24)や、土師器皿(25)も出土した。この2点は、Ⅱ層(造成土)との層界付近で出土した遺物で他の土器や石器との出土レベルとは異なる。

石器 26～31は打製石鏃である。26・27は二等辺三角形で凹基の形状をなす。石材は姫島産黒曜石である。28の石材はチャート、鎌身部が長い特徴的な形状である。29は正三角形に近い形状で、一部が欠損する。石

材は西北九州系の黒曜石である。30は正三角形状で、チャート製である。31は正三角形で平基である。石材は南九州系の黒曜石である。

32は球状耳飾で、石材は頁岩製である。左側が欠損している。平面形は円形で孔は中心に位置する。粗雑なつくりで、断面の厚さは部位により差がある。

第6節 その他の遺物

内野々第4遺跡内の耕作土や造成土より2,815点を数える遺物が得られた。造成土は自然堆積層を重機で掘削したかのような大きい土塊からなる。

遺物の主な内訳は、後期旧石器時代～近現代にかけての土器や石器で、縄文・弥生土器、陶磁器、打製石鏃、石匙、石盾丁、削器、礫器、両面加工石器、研磨痕剥片、二次加工剥片、火打石などである。このうち、96点を図化・掲載した(第19～22図)。

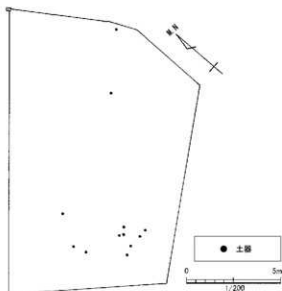
土器 33～39は縄文土器深鉢である。33は塞ノ神式土器の口縁部である。36は胴部で貝殻条痕文地に「V」字または「X」字様に施文される。胎土に光沢性の粒子を多く含む。37～38は縄文施文の胴部で、縄文原体は単節RLである。39は押引文の胴部である。

40～42は弥生土器である。40は壺の口縁部、41は胴部、41は底部である。43は土師器杯の底部である。底部はヘラ切りである。

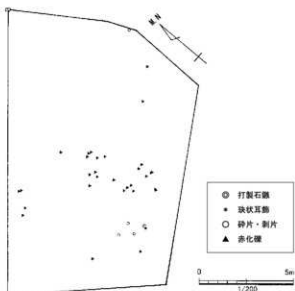
土製品 44は輪の羽口である。外面にはナデ調整が施され、また上部は被熱により変色している。内面もナデ調整が施されている。

陶磁器 45は瀬戸美濃焼のおろし皿の口縁部である。内面下部におろし目がある。14世紀後半に属するか。

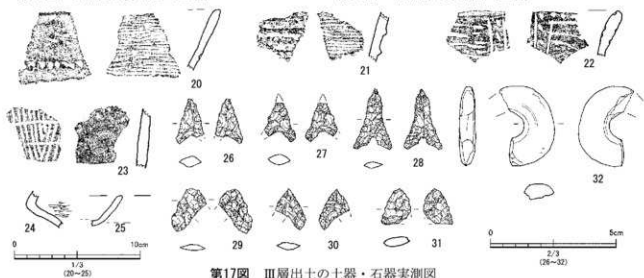
46は青磁碗の体部である。外面は片切彫の蓮弁文が施された龍泉泉産であり、15世紀末葉から16世紀初頭



第15図 土器出土分布図(Ⅲ層)



第16図 石器出土分布図(Ⅲ層)



第17図 Ⅲ層出土の土器・石器実測図

発掘番号	種類	群種	出土層位	形状	調査			出土	備考
					用途	内面	外面		
20	陶文土器	深鉢	口縁	内面染成文のあとと子ナ、刺突刺点文	縁方向の真鍮染成文	1976/4明黄緑	1976/3明黄緑	2m以下の白色粒を多く含む。	唇口部か、外蓋又は付着
21	陶文土器	深鉢	胴部	2条のミズバハシ状突刺。ヨコナナ	縁方向の真鍮染成文	1976/4明	1976/3黄緑	1m以下の白色粒を多く含む。1m以下の黒色粒をわずかに含む。	外蓋又は付着
22	陶文土器	深鉢	口縁	縁位と縁位の浅線文で区隔した中に刺突文、ヨコナナ	縁位・縁位の浅線文、連続刺突文	1976/4にふい黄緑	1977/4にふい黄緑	1m以下の黒色光沢粒。半透明粒。白色粒を少し含む。	唇口部
23	陶文土器	深鉢	胴部	縁位の斜方向への真鍮染成文に縁位の浅線文	丁寧な横ナナ	1976/4にふい黄	1976/3明黄緑	2m以下の透明沢沢粒。1m以下の白色光沢粒を多く含む。	唇口部
24	陶文土器	深鉢	胴部	横ナナに横ミナナ	ミナナか(炭化著し)	1977/3にふい黄緑	2.577/1灰白	1m以下の透明粒。炭粒粒を多く含む。	黒色磨研土器(黒川式)
25	土師器	小深鉢	口縁～底脚付近	ヨコナナ	ヨコナナ	1976/3黄黄緑	1976/4にふい黄緑	1m以下の白色粒を少し含む。	

第4表 Ⅲ層出土の土器観察表

発掘番号	出土層位	器種	石材	法量			
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
26	Ⅲ層	打製石器	板島産黒曜石	1.8	1.1	0.5	0.40
27	Ⅲ層	打製石器	板島産黒曜石	1.5	1.1	0.8	0.45
28	Ⅲ層	打製石器	チャート	2.5	1.4	0.3	0.56
29	Ⅲ層	打製石器	西北九州高嶺産石	1.8	1.2	0.5	0.40
30	Ⅲ層	打製石器	チャート	1.5	0.9	0.6	0.35
31	Ⅲ層	打製石器	南九州高嶺産石	1.6	1.0	0.4	0.55
32	Ⅲ層	砕状石器	頁岩	3.2	2.0	0.8	4.62

第5表 Ⅲ層出土の石器計測表

のものと思われる。47は播鉢の胴部で、内面は播り目が全面に施されている。胎土には白い粒子が含まれることから近世の関西系播鉢と思われる。

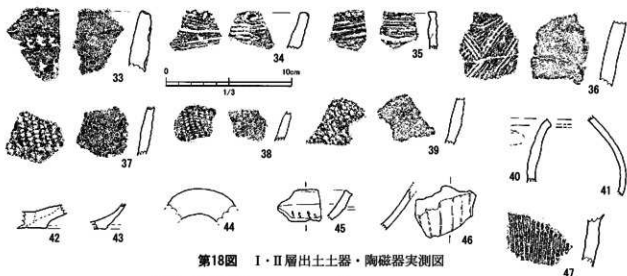
石器 48～50は、後期旧石器時代に属する遺物と考えられる。48は細石刃で霧島産黒曜石製とみられる。49・50は二次加工剥片で左側縁部に細かく剥離が施される。51は剥片である。

52～99は打製石鏃である。52～79は、平面二等辺三角形で凹基である。挟りが深いもの(52～76)と浅く湾曲気味なもの(79)がある。80～95は、正三角形の平面で凹基である。脚部を作りだすもの(80)や挟りの深いもの(81～90)、浅いもの(91～95)がある。96～99は正三角形で平基の部類である。

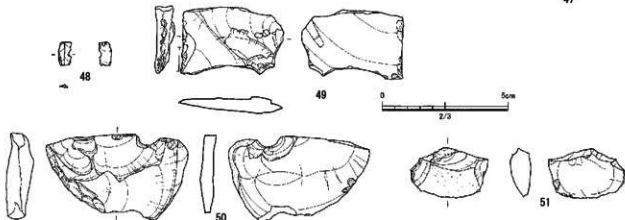
なお、77・78は基部にほとんど挟りがなく、脚部が形成されていないこと、全面に調整がなされないことから未製品の可能性がある。100～102は全体形や剥離調整のあり方から石鏃未製品とみなした。

その他、石匙(103・104)、両面加工石器(105)、異形石器(106)、礫器(107)、スクレイパー類(108・109)、二次加工剥片(110～117)、研磨痕剥片(118)、剥片(119～121)、石核(122・123)、石庖丁(124)および火打石(126～129)を掲載した。

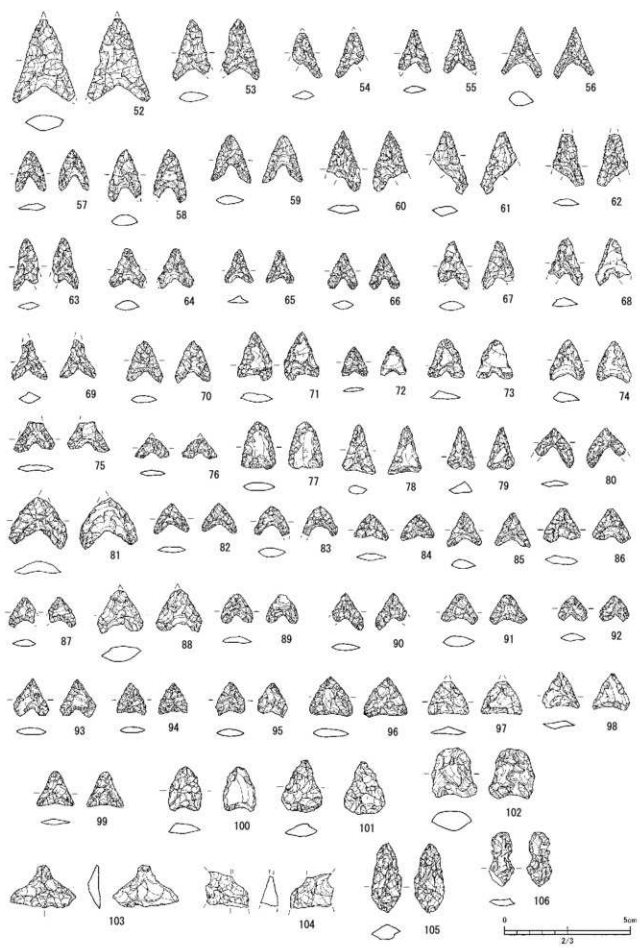
105は全面に調整が施され、縦長に形作られ、中央よりやや上部から先端に向かって胴部が細くなる。106の中央部はくびれ、両端の側縁は外湾している。いわゆるリボン状異形石器で、石材は三船産黒曜石である。108はサイドスクレイパーで、刃部は右側縁に表裏両面からの剥離調整で成す。109はエンドスクレイパーで、刃部は主に下側縁に表裏両面からの剥離調整で形成されている。118の中央部分には、研磨痕が認められる。124は大半を欠損していたが、穿孔が2箇所を確認できる。石材は頁岩である。火打石は、いずれも角や稜線の突出した部分に使用痕が認められる。125は鹿児島産玉髄製、126～129チャート製である。



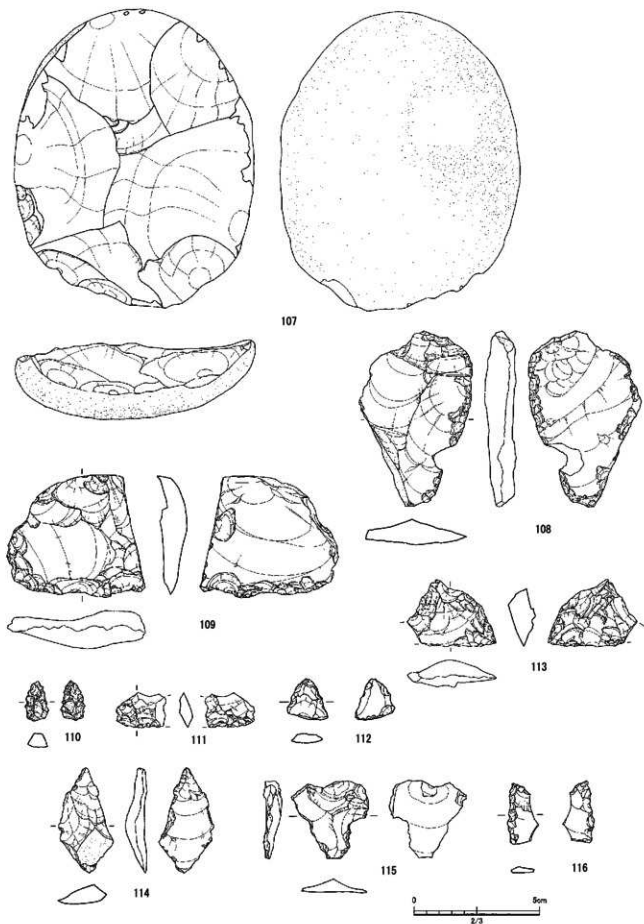
第18図 I・II層出土土器・陶磁器実測図



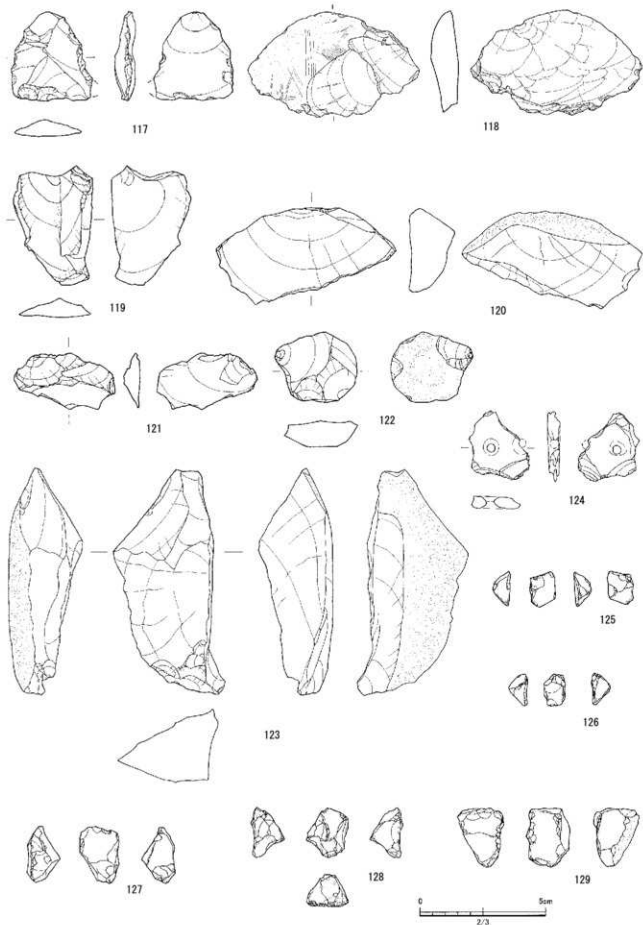
第19図 I・II層出土石器実測図(1)



第20図 I・II層出土石器実測図(2)



第21图 I・II層出土石器実測图(3)



第22图 I·II層出土石器实测图(4)

編號 番号	種別	産地	出土層位	部位	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
32	縄文土器	深鉢	-	口縁	貝殻骨髄による濃緑 刺文	黒ナテ	1.5YR6/9にぶい黄	1.5YR6/9にぶい黄	1cm以下の透明状夾雑を含む。1cm以下の黒色 夾雑粒を多く含む。	黒ノ神式
34	縄文土器	深鉢	1層	口縁	口縁部に濃緑赤江 刺文。貝殻骨髄文	貝殻骨髄文	0YR6/4黒	10YR17/2黒褐	1cm以下の黒色夾雑粒を少し含む。	
35	縄文土器	深鉢	1層	口縁か	口縁部に貝殻骨髄に よる濃緑赤江刺文。 貝殻骨髄文	貝殻骨髄文	0YR6/3にぶい黄緑	5YR5/3緑	1cm以下の褐灰色。濃褐色をわずかに含む。	
36	縄文土器	深鉢	2層	胴部	部位の見出し文。 ナテ	ナテ	2.5YR6/3赤褐	2.5YR6/4にぶい黄緑	2cm以下の透明状夾雑。1cm以下の黒色夾雑 粒。自然粒を多く含む。	
37	縄文土器	深鉢	1層	胴部	縄文刺文	黒ナテ	10YR7/3にぶい黄緑	10YR3/3にぶい黄褐	2cm以下の褐灰色。灰白粒をわずかに含む。	
38	縄文土器	深鉢	1層	胴部	縄文刺文	黒化で調整不明	10YR7/4にぶい黄緑	5Y5/1灰	2cm以下の灰白色を含む。	
39	縄文土器	深鉢	1層	胴部	縄文か(黒化が著し い)	黒化で調整不明	10YR7/4にぶい黄緑	10YR3/3にぶい黄褐	2cm以下の褐灰色。1cm以下の灰白色。黒色 夾雑粒をわずかに含む。	
40	弥生土器	蓋	2層	口縁	黒ナテ	ヨコナテ	1.5YR6/8緑	10YR1/0黄褐色	4cm以下の赤褐色。3cm以下の白色粒をわず かに含む。1cm以下の夾雑粒を少し含む。を 1cm以下の黒色粒を多く含む。	
41	弥生土器	蓋	-	胴部	黒化のため調整不明	黒化で調整不明	5YR5/6明赤褐	1.5YR6/4橙	2cm以下の灰白色。1cm以下の黒色粒を多く 含む。	
42	弥生土器	蓋	-	底面	ヨコナテ	黒化で調整不明	1.5YR7/4にぶい黄	2.5Y5/2暗灰黄	4cm以下の灰白色。2cm以下の黄褐色。暗褐 色。1cm以下の透明粒をわずかに含む。	足跡深さ 4.0cm
43	土師器	外	-	底面	細粒ヨコナテ	細粒ヨコナテ	1.5YR7/6緑	1.5YR6/4橙	1.5cm以下の黒色粒をわずかに含む。	底面は細粒へう切り
44	土師器	輪の 郭口	2層	-	ナテ。加焼による変 色	ナテ	1.5YR6/3明赤褐	1.5YR6/3明赤褐	細小の夾雑粒を含む。	
45	陶器	おろし 皿	1層	口縁	緑釉。黒釉	黒釉	10YR7/3にぶい黄緑	2.5YR7/3灰黄	緑色	瀬戸式黒漬
46	青磁	碗	1層	胴部	黒赤文。黒釉		10Y7/2緑山	10Y1/2ナリーブ灰	緑色	黒赤黒漬
47	陶器	深鉢	2層	胴部	ロク目	ナリ目	2.5YR6/8緑	2.5YR6/3明赤褐	1cm以下の淡黄緑粒をわずかに含む。2cm以 下の褐灰色。灰粒を多く含む。	関西系少

第6表 土器・陶磁器観察表

編號番号	出土層位	器種	石材	諸量			
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
48	I	磨石刃	磨石産黒曜石	1.0	0.9	0.1	0.60
49	I	二次加工割片	磨石産	4.2	2.7	1.0	9.60
50	I	二次加工割片	水戸シラネルス	5.7	3.3	1.2	17.60
51	I	割片	磨石産	3.0	2.0	1.2	6.00
52	I	打製石鏢	磨石産黒曜石	3.5	2.4	0.7	2.72
53	I	打製石鏢	磨石産黒曜石	2.6	1.4	0.4	0.75
54	I	打製石鏢	磨石産黒曜石	2.6	0.8	0.7	0.47
55	I	打製石鏢	磨石産黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.37
56	I	打製石鏢	チャート	2.1	1.5	0.6	0.77
57	I	打製石鏢	磨石産黒曜石	1.8	1.0	0.6	0.40
58	I	打製石鏢	チャート	2.0	1.3	0.5	0.83
59	I	打製石鏢	チャート	2.0	1.5	0.5	0.74
60	I	打製石鏢	チャート	2.2	1.3	0.7	0.85
61	I	打製石鏢	チャート	2.6	1.0	0.7	0.85
62	I	打製石鏢	チャート	2.2	1.0	0.7	0.60
63	I	打製石鏢	轟ノ水窪野産黒曜石	2.2	0.9	0.5	0.49
64	I	打製石鏢	磨石産黒曜石	1.7	1.4	0.4	0.44
65	II	打製石鏢	東北九州黒曜石	1.5	0.9	0.5	0.21
66	II	打製石鏢	磨石産黒曜石	1.5	1.1	0.4	0.32
67	I	打製石鏢	磨石産黒曜石	2.0	1.2	0.4	0.46
68	I	打製石鏢	磨石産黒曜石	2.0	1.1	0.6	0.51
69	I	打製石鏢	チャート	1.7	1.3	0.8	0.52
70	I	打製石鏢	磨石産黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.44
71	I	打製石鏢	チャート	2.0	1.4	0.7	0.85
72	I	打製石鏢	チャート	1.2	1.0	0.2	0.16
73	I	打製石鏢	水戸シラネルス	1.7	1.1	0.7	0.80
74	I	打製石鏢	安山岩	1.7	1.4	0.5	0.64
75	I	打製石鏢	轟ノ水窪野産黒曜石	1.8	1.7	0.6	0.47
76	-	打製石鏢	磨石産黒曜石	1.0	0.8	0.4	0.17
77	I	打製石鏢	磨石産黒曜石	2.0	1.4	0.4	0.84
78	I	打製石鏢	チャート	2.1	1.1	0.4	0.54
79	I	打製石鏢	安山岩	1.8	1.0	0.7	0.53
80	I	打製石鏢	東北九州黒曜石	1.8	1.1	0.5	0.31

第7表 石器計測表(1)

図録番号	出土部位	種類	石材	法量			
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
81	I	打製石礫	船島産黒曜石	2.7	2.1	0.6	1.41
82	I	打製石礫	船島産黒曜石	1.5	1.3	0.4	0.78
83	I	打製石礫	船島産黒曜石	1.3	1.2	0.4	0.34
84	I	打製石礫	船島産黒曜石	1.5	0.9	0.4	0.30
85	II	打製石礫	船島産黒曜石	1.5	1.3	0.6	0.41
86	I	打製石礫	船島産黒曜石	1.9	1.3	0.4	0.50
87	I	打製石礫	船島産黒曜石	1.3	1.0	0.3	0.21
88	I	打製石礫	船島産黒曜石	1.8	1.7	0.7	1.22
89	I	打製石礫	西北九州系黒曜石	3.3	1.2	0.5	0.31
90	I	打製石礫	チャート	1.6	1.0	0.3	0.21
91	I	打製石礫	チャート	1.4	1.2	0.5	0.55
92	I	打製石礫	チャート	1.1	1.0	0.3	0.78
93	I	打製石礫	望山館	1.6	1.2	0.3	0.32
94	I	打製石礫	チャート	1.4	1.0	0.3	0.78
95	I	打製石礫	チャート	1.5	1.1	0.4	0.38
96	II	打製石礫	チャート	1.7	1.0	0.4	0.76
97	II	打製石礫	栗山館	1.7	1.3	0.5	0.50
98	II	打製石礫	望山館	1.5	1.3	0.5	0.40
99	I	打製石礫	チャート	1.5	1.4	0.5	0.43
100	I	石礫未成形品	チャート	1.8	1.3	0.6	1.56
101	I	石礫未成形品	チャート	2.0	1.4	0.7	1.80
102	I	石礫未成形品	チャート	2.1	1.0	1.1	2.90
103	I	石礫	船島産黒曜石	2.2	2.0	0.8	1.20
104	I	石礫	チャート	1.8	1.3	0.8	1.54
105	I	両面加工石礫	チャート	2.7	1.1	0.9	1.80
106	I	両面石礫	三船産黒曜石	2.2	1.0	0.6	0.70
107	II	礫	砂	16.1	12.9	3.6	975.00
108	I	磨製	透賢貝	6.3	4.6	1.3	31.65
109	II	スクレイパー	透賢貝	5.2	5.0	1.8	33.15
110	I	二次加工製片	船島産黒曜石	1.0	0.9	0.9	0.80
111	I	二次加工製片	針尾産黒曜石	2.0	1.5	0.9	1.50
112	I	二次加工製片	チャート	1.8	1.4	0.7	1.10
113	I	二次加工製片	チャート	3.0	2.7	1.3	7.20
114	-	二次加工製片	チャート	4.1	2.0	1.1	4.70
115	I	二次加工製片	透賢貝	2.0	1.3	0.6	1.00
116	I	二次加工製片	透賢貝	3.2	2.9	1.0	4.60
117	II	二次加工製片	市川シフェルス	3.6	2.3	1.1	8.90
118	I~II	磨製儀製片	貝	5.7	4.5	1.3	29.05
119	-	製片	市川シフェルス	4.8	3.2	1.2	11.50
120	-	製片	透賢貝	2.0	2.5	2.1	32.60
121	-	製片	透賢貝	4.0	2.2	1.0	6.00
122	-	石核	船島産黒曜石	2.7	2.7	1.4	9.58
123	II	石核	市川シフェルス	9.5	4.4	2.9	95.00
124	I	石核丁	貝	2.0	2.2	0.8	3.42
125	I	火打石	船島産黒曜石	1.3	1.2	0.8	1.06
126	II	火打石	チャート	1.1	0.6	1.1	0.69
127	I	火打石	チャート	2.2	1.5	1.4	4.82
128	I	火打石	チャート	1.9	1.0	1.3	3.51
129	I	火打石	チャート	2.5	1.9	1.9	7.87

第8表 石器計測表(2)

第7節 まとめ

内野々第4遺跡では、縄文時代早期と縄文時代前期以降の遺構と遺物を認めることができた。また、表土・造成土中からも多くの石器類が出土した。本節ではこれらの成果を振り返ってまとめたい。

1 縄文時代早期の遺構と遺物

基本土層のIV層は土色等からIV a・IV b層に細分され、集石遺構や遺物も各層に認められた。IV a層からは塞ノ神式土器が主体的に出土するので、IV b層も含めてIV層の遺構や遺物は、概ね縄文時代早期後半の時期にあたる。

内野々第4遺跡は、戸次山と牧内山の間を縫う心見川支流の小河川が平山地区で合流し本流となる付近に位置するだけでなく、狭大な沖積地の起点部という立

地である。こうした立地にも縄文時代早期の人間活動が読み取ることができた。

このように、心見川流域の縄文時代早期の遺跡は、本遺跡や内野々遺跡や平山下原遺跡のように、河川を望んだ緩やかな斜面と、内野々第2遺跡のように丘陵部に立地するあり方が認められた。

さらに同時性や共時性、相互の関連性を検討していく必要がある。

2 縄文時代前期の遺物

基本土層のIII層はアカホヤ火山灰を主体とする層で、二次堆積と判断される。この層からも遺物が出土した。出土遺物には縄文時代晩期の浅鉢や土師器皿も含まれるが、轟B式や曾畑式土器の深鉢片が出土土器の主体となる。従ってIII層は縄文時代前期を中心とした遺物

包含層と考えておきたい。

アカホヤ火山灰の降灰は、南部九州の縄文時代早期文化に壊滅的な打撃を与えたとされる。本遺跡では火山灰降灰後も再び人間活動の痕跡を見出した。また、宮崎県下の縄文時代前期の資料はそれほど多いわけではなく、その意味でも重要な調査成果である。

さらに、特筆すべき遺物として夔状耳飾(32)が挙げられる。下村智氏の集成によると、2009年段階で宮崎県内では9遺跡10点の出土が確認されるという(下村2010)。

なお、藤木晶子氏(宮崎市教育委員会)によると、この夔状耳飾は頁岩製でいわゆる非美石石材を使用し、完成形に近い襷を素材とするが、成形が不十分なために襷面にかなり近い部分が認められるという。本来の平面形は、やや横に長いタイプと推定された。中心孔が側縁の幅よりも小さく、切目も短く孔内面上部に切目突出が認められると指摘されている。出土層位より縄文時代前期に属する可能性が高いが、形状・形態からは早期の可能性も考えられる。

3 異形石器について

表土層より異形石器(106)が出土した。この石器は、中央がくびれ状に狭れて先端部が尖っており、また一部が振れているという特徴がある。独鈎形異形石器、リボン状異形石器などと呼ばれる一群にあたると思われる。南部九州でも、宮崎県右葛ヶ迫遺跡、尾花A遺跡、上猪ノ原遺跡1・2遺跡、鹿児島県桐木耳取遺跡などの類例が知られている。このうち、尾花A遺跡、清武上猪ノ原遺跡、桐木耳取遺跡では縄文時代早期相当層からの出土が層位的に確認されている。

なお、溝上くみ氏は、異形石器は縄文時代前期に近畿地方とその周辺に、中期以降に東北地方に限られるとされており、さらなる検討が必要になろう。

4 内野々第4遺跡周辺の遺跡立地

調査区の表土や造成土中より多くの遺物が出土した。土器・陶磁器類は縄文時代早期～近世にかけての幅広い時期を示すが、縄文時代が中心である。細石刃は後期旧石器時代終末期であるが、スクレイパー類や二次加工剥片等には、後期旧石器時代に属するものが含ま

れると考えられる。石籤は形態的特徴から縄文時代早期に認められる資料が多く、火打石は中～近世に属するとみられる。

耕地整理以前の内野々第4遺跡周辺は、沖積面と丘陵部が接する地形であったとされる。現在の地形は、この丘陵斜面を階段状に造成して水田面に、その掘削土を低所に埋め立てたという。このことから、遺物を含んだ表土や造成土は水田造成時に調査地周辺の丘陵斜面を削平した土砂が由来と推定される。

従って内野々第4遺跡は、丘陵と沖積地の境に広がる丘陵斜面に立地する複合遺跡であったと想定される。調査地は丘陵裾部にあたる位置と考えられる。その周辺にも遺構や遺物が存在する可能性が高いことを指摘してまとめたい。(原口)

参考文献

- 日高広人編2000「右葛ヶ迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第21集 宮崎県埋蔵文化財センター
溝上くみ2003「神鍋遺跡の独鈎形異形石器」『神女大史学』第20号 神戸女子大学史学会
長野眞一編2005「桐木耳取遺跡Ⅱ」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第92集 鹿児島県立埋蔵文化財センター
井田篤ら編2008「清武上猪ノ原遺跡-1-」『清武町埋蔵文化財調査報告書』第24集 清武町教育委員会
井田篤ら編2009「清武上猪ノ原遺跡-2-」『清武町埋蔵文化財調査報告書』第26集 清武町教育委員会
出山真次ら編2009「尾花A遺跡Ⅰ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第185集 宮崎県埋蔵文化財センター
下村智2010「九州出土の夔状耳飾に関する基礎的研究」『先史学・考古学論究 V』上巻 龍田考古会

圖 版



D区早期集石遺構検出状況（西から）



S I 15~16検出状況（西から）



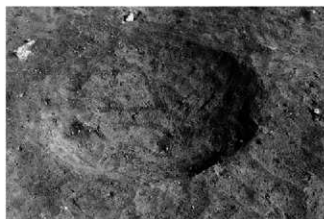
S I 15~16半截状況（東から）



S I 17検出状況（西から）



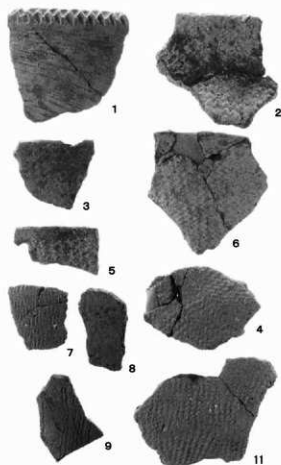
S I 17半截状況（西から）



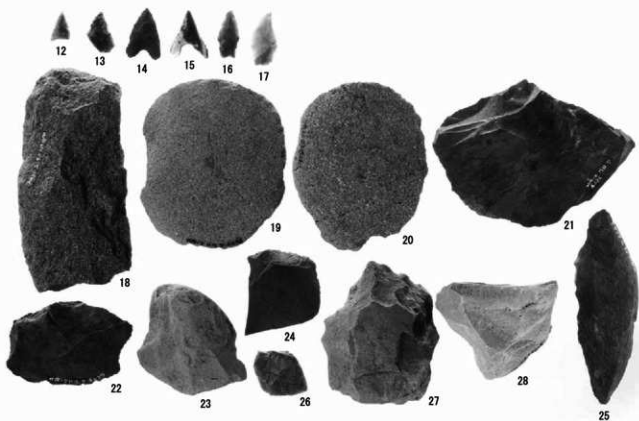
S I 17完掘状況（西から）



S I 18検出状況（北西から）



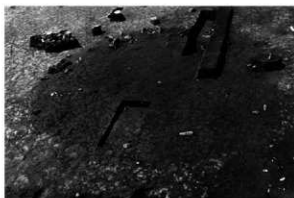
縄文時代早期土器



縄文時代早期土器



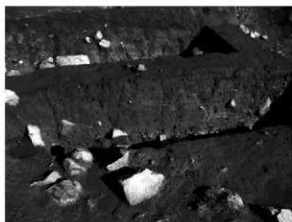
SA 2・3検出状況(北東から)



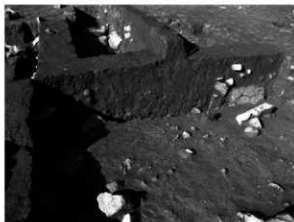
SA 2検出状況(東から)



SA 2・3完掘状況(東から)



SA 2西側土層断面(南から)



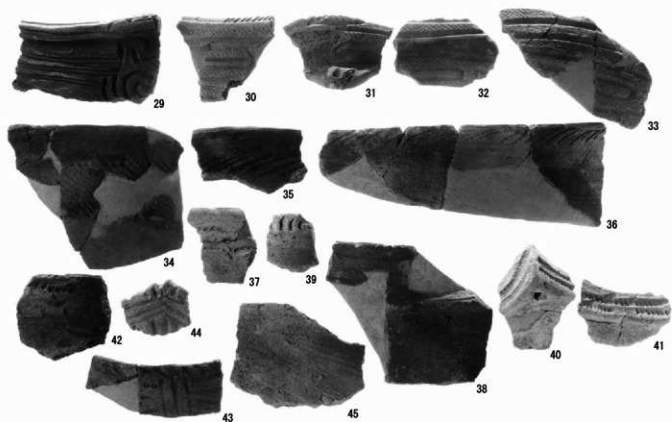
SA 2西側土層断面(南から)



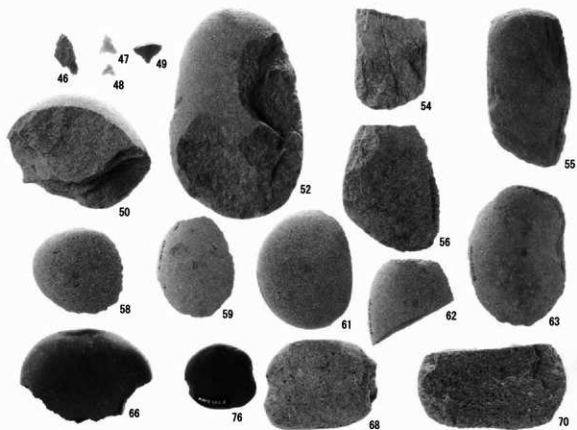
SA 3南北土層断面(東から)



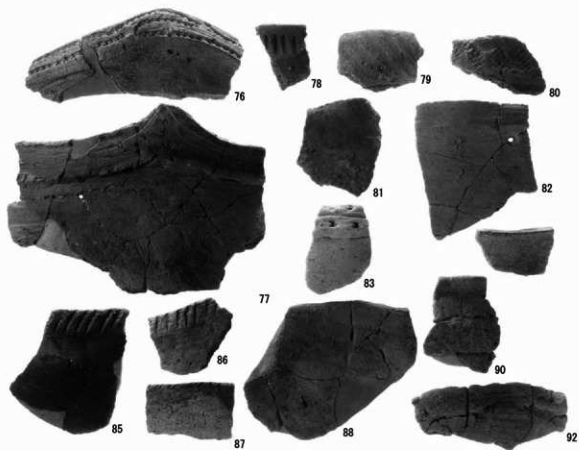
SA 3西側土層断面(北東から)



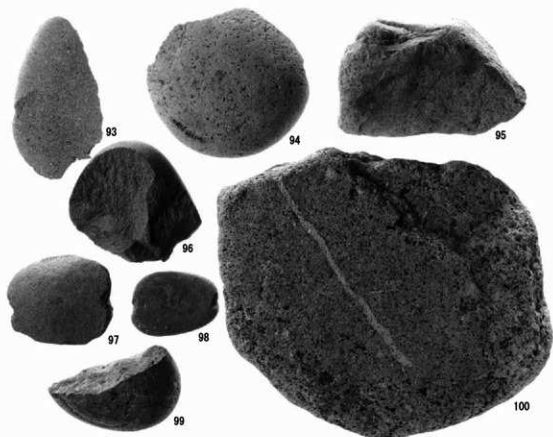
SA 2 出土土器



SA 2 出土石器



SA 3 出土土器



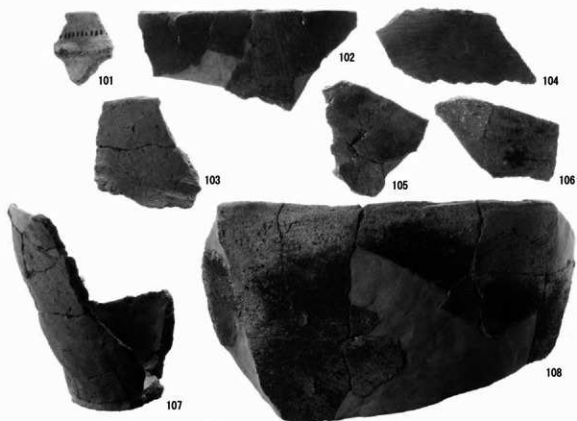
SA 3 出土石器



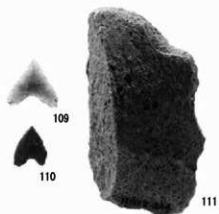
SA 4 検出状況 (南から)



SA 4 完掘状況 (南から)



SA 4 出土土器



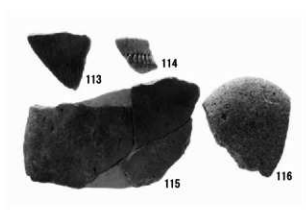
SA 4 出土石器①



SA 4 出土石器②



SA 5 完掘状況 (北から)



SA 5 出土遺物



S I 1 検出状況 (北から)



S I 4・5 検出状況 (南から)



S I 16 検出状況 (南から)



S I 11 検出状況 (西から)



S I 12 半截状況 (北から)



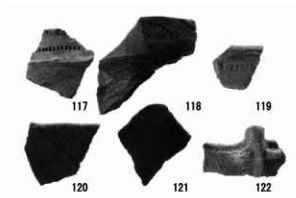
S I 9・10 検出状況 (南東から)



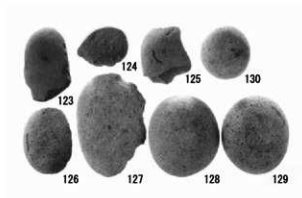
S I 3 配石検出状況 (東から)



S I 13 配石検出状況 (南から)



集石遺構出土土器



S I 9・10 検出状況 (南東から)



SC 1 半截状況 (西から)



SC 1 出土土器



SC 2 半截状況 (西から)



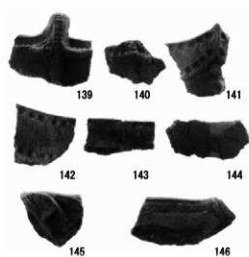
SC 2 出土遺物



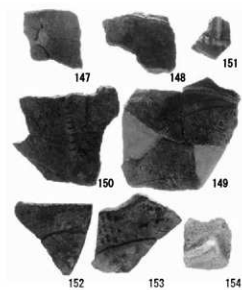
SC 3 出土土器



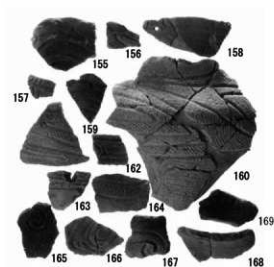
I類土器



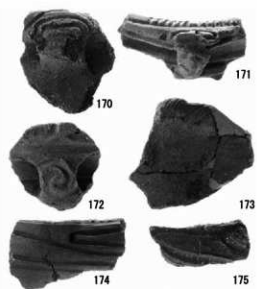
II類土器



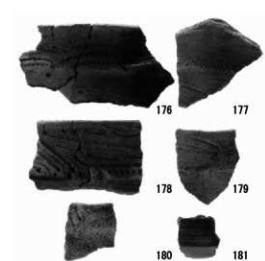
III類土器



IV類土器①



IV類土器②



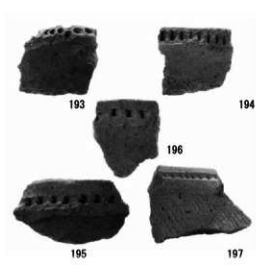
V類土器①



V類土器②



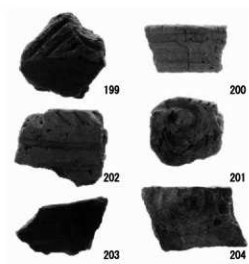
V類土器③



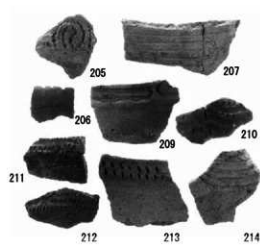
V類土器④



V類土器⑤



V類土器⑥

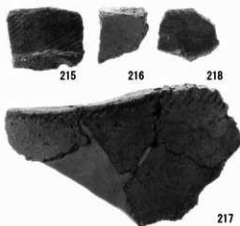


V類土器⑦

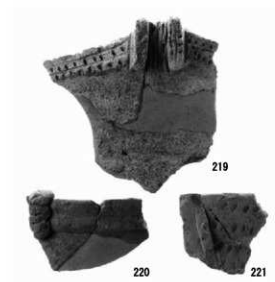


208

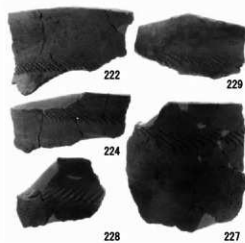
V類土器⑧



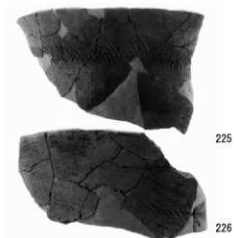
V類土器⑨



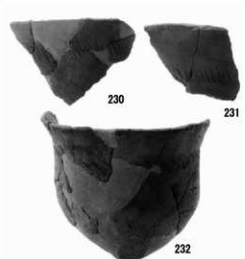
VI類土器



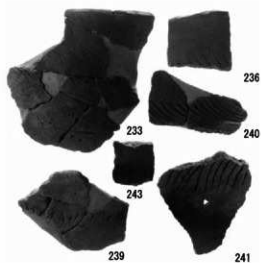
VII類土器①



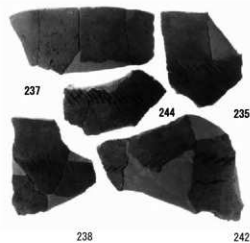
VII類土器②



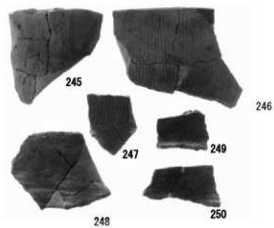
VII類土器③



VII類土器④



VII類土器⑤



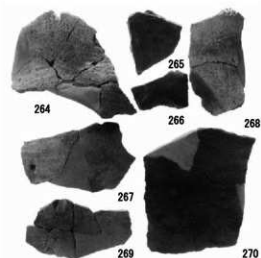
VIII類土器



IX類土器①



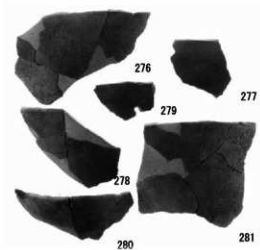
IX類土器②



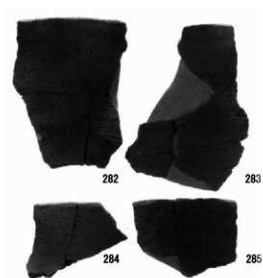
IX類土器③



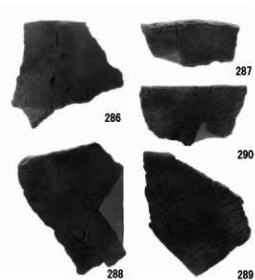
X類土器



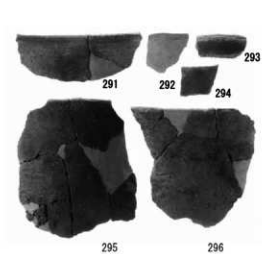
XI類土器①



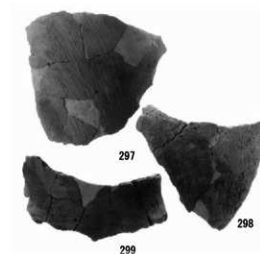
XI類土器②



XI類土器③



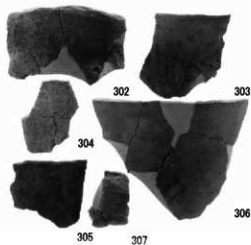
XI類土器④



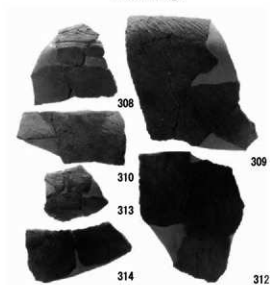
XI類土器⑤



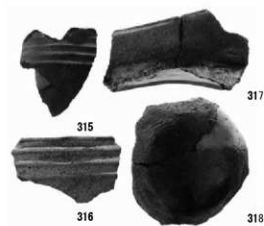
XI類土器⑥



XI類土器⑦



XII類土器



XIII類土器



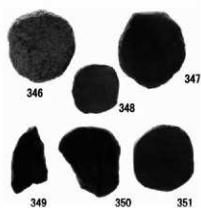
XIV類土器



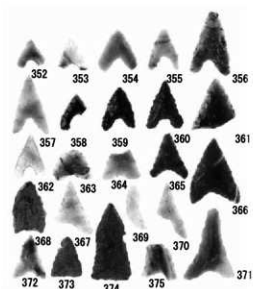
XV類土器①



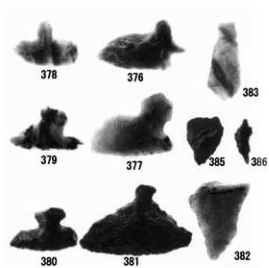
XV類土器②



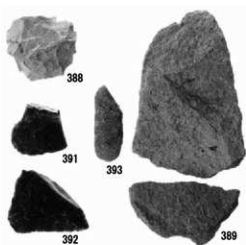
XVI類土器



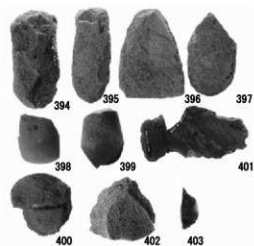
打製石鏃



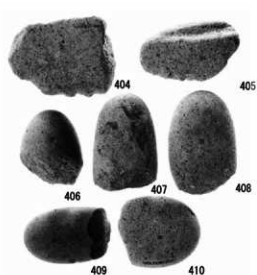
石器



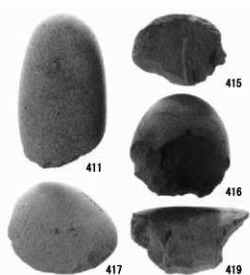
削器



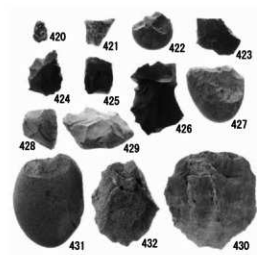
打製石斧 磨製石斧 スクレイパー



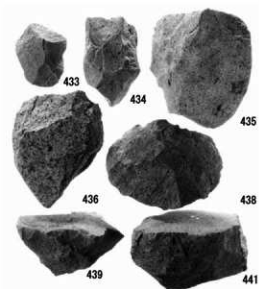
礫器①



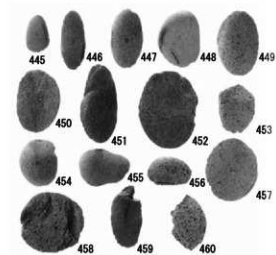
礫器②



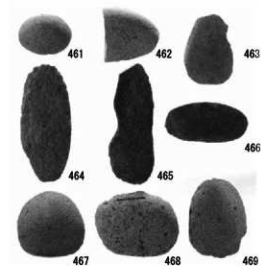
石核①



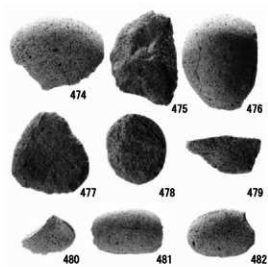
石核②



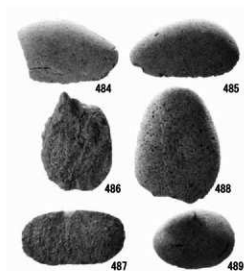
粗製剥片石器①



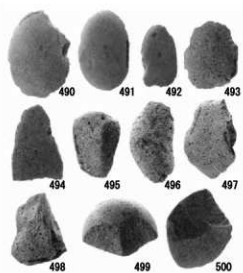
粗製剥片石器②



粗製剥片石器③



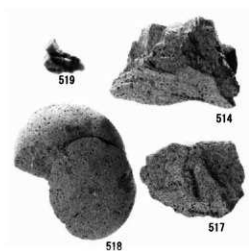
粗製剥片石器④



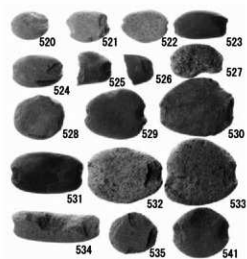
粗製剥片石器⑤



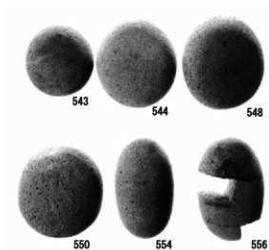
剥片（その他石材）



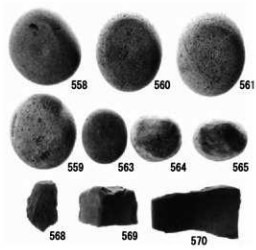
接合資料



打欠石錘



磨石



凹石 敲石 砥石



SA1完掘状況(北から)



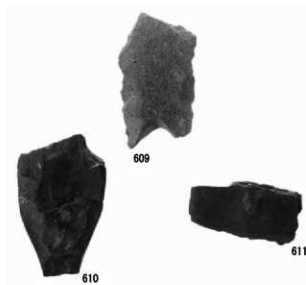
SA1出土土器



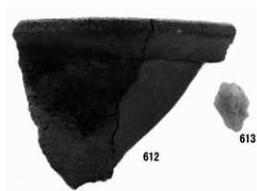
SH234出土土器



弥生～古墳時代出土土器



磨製石鏃



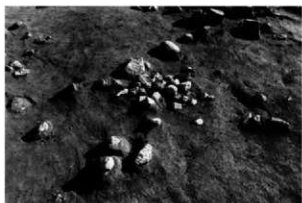
その他の遺物



内野々第2遺跡 調査区遠景（北から）



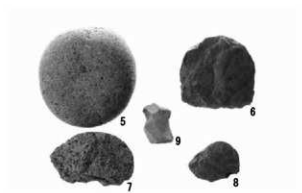
内野々第2遺跡 集石遺構群と焼礫（北から）



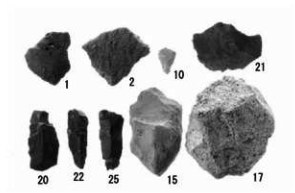
内野々第2遺跡 S11検出状況



内野々第2遺跡 S12検出状況



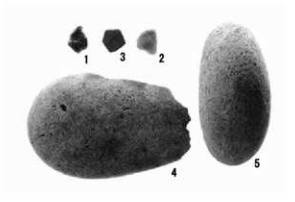
内野々第2遺跡 集石遺構出土の遺物



内野々第2遺跡 縄文時代早期出土遺物



内野々第3遺跡 調査区近景（北から）



内野々第3遺跡 出土遺物



内野々第4遺跡遠景（平山下原遺跡側から）



調査区近景（南西から）



調査区全景①（南から）



調査区全景②（西から）



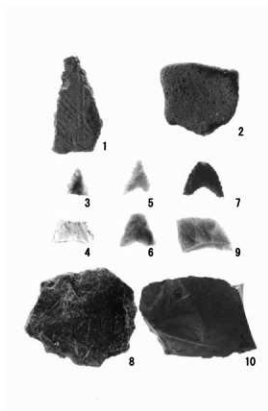
基本層序および土器出土状況



S I 1 検出状況（東から）



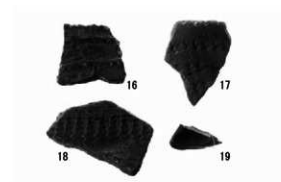
S I 2 検出状況（南東から）



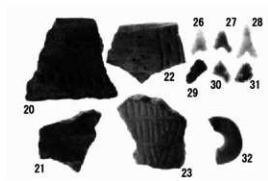
IVb層出土遺物①



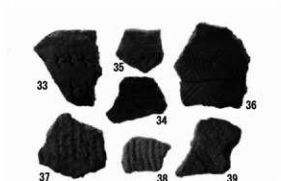
IVb層出土遺物②



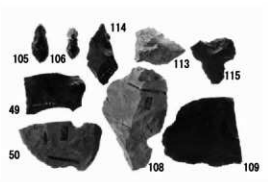
IVa層出土遺物



III層出土遺物



包含層出土の縄文土器



包含層出土の剥片石器



包含層出土の石廬丁、火打石

報告書抄録

ふりがな	うちのいせき			うちのだいに・だいきんいせき		うちのだいにいせき							
書名	内野々遺跡			内野々第2・第3遺跡		内野々第4遺跡							
副書名	東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3												
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書												
シリーズ番号	第202集												
編著者名	小船井順・今嵐原毅行・原口耕一郎・谷口めぐみ												
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター												
所在地	〒 880-0212			宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地									TEL 0985-36-1171
発行年月日	西暦 2011年 3月 18日												
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村		遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因				
うちのいせき 内野々遺跡	宮崎県児湯郡 都農町大字川北 あびのうちのうらばる 字内野後原	45406			32度 17分 31秒 付近	131度 32分 44秒 付近	2009.06.05 ~ 2010.01.07	4,720㎡	東九州自動車道 （日向～都農間） 建設に伴う発掘 調査				
うちのだいにいせき 内野々第2遺跡	宮崎県児湯郡 都農町大字川北 あびのうちのうらばる 字内野後原				32度 17分 22秒 付近	131度 32分 32秒 付近	2009.12.07 ~ 2010.01.25	1,410㎡					
うちのだいきんいせき 内野々第3遺跡	宮崎県児湯郡 都農町大字川北 あびのうらばる 字西尾立				32度 17分 20秒 付近	131度 32分 31秒 付近	2010.05.17 ~ 2010.05.24	280㎡					
うちのだいにいせき 内野々第4遺跡	宮崎県児湯郡 都農町大字川北 あびのうらばる 字宮原				32度 17分 08秒 付近	131度 32分 24秒 付近	2009.05.11 ~ 2010.01.07	900㎡					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項						
内野々遺跡	集落	縄文時代											
		早期	集石遺構	5基	縄文時代早期、中期、後期 土器、打製石鏃、石匙、打 製石斧、礫器、石核、剥 片、磨石、礫石、凹石、台 石、炭化種実	縄文時代後期から弥生時 代にかけて尾鈴山酸性岩 類の原産地遺跡							
		中・後期	堅穴建物跡	4軒									
			集石遺構	13基									
	土坑	3基											
	弥生～古墳	堅穴建物跡	1軒	弥生土器、磨製石鏃									
内野々第2遺跡	集落	縄文時代	集石遺構	3基	縄文土器								
		早期			石鏃、磨石、石核、剥片								
内野々第3遺跡	散布地	縄文～			剥片、磨製石鏃								
		弥生時代											
内野々第4遺跡	集落	縄文時代	集石遺構	2基	縄文時代早期、前期土器、 打製石鏃、削器、石核、剥 片、磨石、块状耳飾	アカホヤ火山灰二次堆積 層から块状耳飾辺出土							
		早期～前期											
要約	<p>児湯郡都農町に位置する内野々遺跡群の発掘調査報告書である。</p> <p>内野々遺跡は都農町内で発掘調査例の少ない縄文時代後期を主体とした集落跡である。当該期の堅穴建物跡などの遺構や、これに伴い出土した遺物は特筆される。</p> <p>内野々第2遺跡は縄文時代早期を主体とした集落跡である。集石遺構に伴って遺物が出土した。内野々第3遺跡は内野々第2遺跡に隣接する散布地である。縄文時代早期の石器や、弥生時代の磨製石鏃が1点出土した。</p> <p>内野々第4遺跡は縄文時代早期後半から前期が主体である。また、多量に回収した剥片石器類は、遺跡の周辺にも遺構・遺物の存在を示唆する。</p>												

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第202集

内野々遺跡
内野々第2・第3遺跡
内野々第4遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3
2011年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 秀巧社印刷株式会社
〒880-0803 宮崎市旭1-8-14
TEL 0985(24)1072 FAX 0985(26)0925
